

新

新

803-8

俳諧資料カード

年代

享和及文子

編者

(筆者)

曲亭

書名

俳諧時記

備考

秋冬雜
下

(下垣内藏)

俳諧時記

秋冬雜
下



吳市阿蘇 五十三番八号
下垣内 和人
電話〇八三十七一九八五番
千737

郊遊歲時記秋之郊 曲亭主人纂輯

秋

秋ハ緇なり万物を緇迫して便時小成
之秋名あきハ明之清明なり或之
いあきハ之あとかと通ど万物秋小なり
零落しりくもるんまをわるといふ對り

女皞こう

月令淮南子
皞或作臭

蓐收れうじゆう

月令

白藏

雨雅

收成しゆうじゆう

金高きんかう

唐高宗
九言詩

明景

詔勅
鶴唳賦

孟秋

朗暈らううん

元帝
箕要

爽頼すわうらい

秋仲文詩
秋の声之

夷則いげく

月令
秋声賦

七月

立秋

節 大暑の後十月半
卯小さきことひ

處暑ちよしよ

斗申小建之

新秋

韓文

相月

余雅 七月庚を
得る時ハ之を空

首秋

元帝
箕要

初秋

和名小初秋ハ七月十日
中院通菴柳抄卷八

十五日とて秋としは准すか一 涼月 全

相秋 淮南子 蘭月 具廣義 蘭秋 集要

上秋 集要 肇秋 全 文月 この月七日たか

書ともをんくち文をさし月と たかざり月

玉 盆秋 女帝花月 藏 親月 この月

墓 傍る日忍ふ 和介雅 接ぶふけ 今月の秋 百

一葉 柳 一葉八相をいふ 諸寺施餓鬼

げ月 終りたるを 末世の仏弟子 不勅して 毎日洋飯七粒 つを

渴をまぐ むと 或八日連の母 餓獄の中 堅き

此切産を後 げ 餓鬼をして 食を 給むる

○廣大施餓鬼の法 淨土を 長定 地を 掃ひ

作る 長 尺 小 但 桃樹 松 楯 の外用 を せん

鬼神 お せん こと を 食 せ を ぬ を 或 八 淨地 大 の上 或

八泉地 江 海 流 水 中 これ 川 施 小 こと を 用 ふ 東 江 向 け 施 せ

む 時 を 戌 寅 を 終 ふ 大 幡 二 本 此 は 呪 喝 を 云

又 七 如来の 幡 を 揚 ぐ 列 不 焦 百 鬼 王 を 用 る と い へ 施

食 の ち ち 面 然 鬼 は 始 る ち 忍 ち り 施 餓 鬼 通 境 鬼 八 分 を

日 と とも 五 百人 間 の 一 月 を 一 日 と て 壽 五 百 歳 復 舎 論 頌

新吉原燈籠

七月中の町の揚屋各燈籠を生と是より例となつて
毎年二つありその燈籠綾羅を以て金銀法物を
を造り考案莊親はこれに男女形像を造り
を燈籠足物といふ燈籠を造り男女形像を造り

この外八月廿日夕毎日まぐ妓女俳優をとりてこれを俄と云
 或は青中の町は様を裁九月菊を植ふ近年の裁と
 なり九拉里の夕作ハ今あつたさうふも下ハかき美淵
 こし日本橋のふありおりのけをうたふうもあつたさう
 うき世と夜のまのまはれ何なるのまもくひ迄一人
 人初まハ似成新造きりあの夕作あり噂ひとま
 何ホのまそアホ塔さる **小野沖水** 六日 山城の四
似城の論者の詞 昔や野
の条下に注す

小野天満宮 ありこれ西ノ丸朝日寺の地より帝廟
 より小あつるを以て北野と名づく七月六日小中松栢院
 水の水を神蒸ふ供を松風の祝ふ穀のまかを添てこまを
 供を松栢院より初年或は左隣あると云はれ多かりとそ

北野火掃 七日 毎年七月七日小中の村内外の陣小者
此の神宝を西の回及幣敷を亦して世
 こまを曝きその回宮内外
 の陣は様をとりて **雍州府志**
 児童七月六日小机祝を洗ふと小中の村を遊ばせ
 かも下今ハ二星より向るとのを書こまふとそま

七夕 七月七日 牽牛織女一年一會宵の令節なり故小夕
元来七夕ハ七夕
 と云月令廣義 たちとハ空を以てこま雲と
 以て天の星をこまとそハ空の機も娘と云とそハ空を
 の棚もこまありれ由名ハ俗小こまと云 **詞林采葉** 和云
 の歌ハ七夕とそ書ふ小を織女と書 **八雲所抄** 今の
 人七夕と書きたかちとそハ誤ハ七夕ハ七日の夕之

二星 牽牛星 織女
いをこま星 **河鼓** 織女
いぬみ **牛女** 二星の名を
上略セリ たり
 焦林大斗記云天河
 の西ハ星あり煌と云

をなほはるぬなをる
 参とも小出とれを牽牛と云天河の東小星なり微とて
 氏の下よりこまを織女と云世小双星と云 **月令廣義**

秋さり娘 したる娘 さくうに娘 百子娘
 糸あり娘 ねうほ娘 梶の葉娘 ○以上こま
 参の七娘は

たかきつね
 方葉おふの緑色ハ
 たりさ妻といふ小や
 たり心娘

七

ひときとあざとさ

日生の安 日星合

天河の東は熾 女あり乃天帝の

この娘とよふま小也

子之機機勞役之容を理ふ小皇おど天帝その独居を
憐く侍小嫁せんとて河西の牽牛を史と云嫁一

後竟小女子を塵を天帝怒責て

秋より衣

河奈小乃ゆめ惟一年一會せむ 齊階記

七夕布より 八雲御抄 只秋のころも小也秋よりとハ秋まを

ふとこ 万葉拾遺 秋より衣ハ七夕の貝之 貞徳説 七夕此貝

小く由来しこのころ死之 連哥新式 馬琴按さる小秋さ

て衣ハ衿を穿るべし 年山紀 年才五小云万葉十

ふふその又百機さるお布れ秋より衣ハ衣ハ衣ハ

所歎ま集中 万小まハ来小けりと此ことをま

去小多るとよめさるに秋来ての衣とよふま小名乃

より云云 侍賢門院 堀川の奈小 旅中て秋より衣

さむさるにいつか吹を武庫の浦凡 八雲御抄

七夕布ととせしハ 万葉の奈小 注さるる

べしとせと後の奈小 おまハ 楊泉

あま七女小限さるる 雲漢 物理論 天河

天河ハ其の回小あり長と天小むら 宇東 天河ハ

水の精之氣發て升り精華浮上 宛轉てはひ

流 物理論 天漢 銀河 星河 左界 靈源 銀

灣 銀漢 奈小あまのりハとよむ 或書云天の五

行日ハ火月ハ水 異本 辰ハ土 淮南子

銀漢ハ金氣のお聚るなり 烏鵲の橋

弟小後成恩寺敷の轉法記を引て云史記小云瓊

支ぬあり夫を遊子と云婦を伯陽と云偕老の誓

係小ハ二ハの候陽ハ之四の旬之小と云小女子十六

伯陽十二支之支ぬとなりて互にさるる切之と云

月を望むるを限かく夕小ハ月の出ををまらる

里小ハ月曉ハ月の入を惜してさるる峯ハ望る伯

陽九十九日て死を遊子と云歎きて月を形えと

尺る後小或夜伯陽 鶴小まかりて空を花乃

夕ハ花子 物小さるる百之支乃て死せり 遂

天の目生となりて鳥小のりて天を花乃 支妻 根

河を踏さるる帝 歎毎此川ハ水を浴

多小水 穰わて泣るを許さるる

七

七月七日ハ帝教法堂此事の目なりハ水を浴び
て之を浴びてを許さば年小一疋といふ人同の
小ハ一日一夜この時鳥と鶺鴒と羽を双橋と有りて
牽牛織女を通さば此を鳥鶺鴒の橋といふ遊仙崖
小病鶺鴒の二字をやめぬと云ふ事ありしか
鳥鶺鴒の二字をうきと云ふ事ありて
年小一疋天の川
紅葉の橋 鳥鶺鴒の橋ハことハ
あまのつたたと
わらまをいふハ八雲御抄 漢毛伊小鳥鶺鴒の橋の口ハ
紅羽を敷二星の唇形の葉ハ風冷く有り是を紅
葉小あなねとも紅葉といふつけし羽の字をえうの
声よむむなり二星のあなねの涙鶺鴒の羽を深て
紅はあなねを
藻汐州
二星の唇形 唐の天宝中後宮七
夕錦綵を結びて
樓殿を成高百丈數十人を容下花果酒炙を
陳ね世具を設け以て牛女の二星をまつなり
本朝の歌ハかくこれ小吳之七の棚を張り花を折
花果を飾へを焼おれるあり共これを目星の唇形
といふ

乞巧奠 唐の宮嬪七夕小蜘蛛を以
金盃の中納し曉小用て蛛の
糸の稀密を視て巧の多少を以たりと云 潜雅類書
七夕は為人糸縷を結び七孔針を穿ち或ハ金銀
鍮石を以て針と凡菓を庭中小陳ね以て
巧を乞ふ蟻子ありと凡のよを綱を以てハ巧を
得たりと云

煮餅 七月七日織女神を祭る又
牛神あり及祭供ハ煮餅と
先代旧事記 昔高辛氏の女子
先代是系織の象小妻と並小柳麵を以てこと
鋤耕の象小妻と

洗車雨 洒決雨
七月六日のあまを洗車するといひ七日のあまを洒決雨とい
天中記の夕雨ハ二星をまつ俗祝の洒決

今俗七夕ハ冷きまを
洗車雨 洒決雨
今俗七夕ハ冷きまを
洗車雨 洒決雨

をわひし
得しや

七巻の池 百子池

戚夫人の侍見
賈佩蘭後生

披風の八咫佛の妻とあり宮内あり附のてを説云云七

月七月百子池は熅三子因縁を以て樂事て五色縹

を以てお幣を謂て相連愛とを **西京雜記** 大盤小

水を合天の星を移きて **公羊根源** 七巻の池とハ七

の盤の水を合鏡をうつく星の影を移してをいふ百子

の池と天の河を織女を百子娘とハ之又百の盥水

を合れては向うと云説わすと百の盥水ありては

百子池と名ふるを思按ありらく化星の茶下小注と

妻述記 **八雲** 左小舟 **全** 妻述記 **藻** 妻述記

貝摠船 **八** 七種の船 いろいろの筆を七束つて

扨ひ小ハ七の数を扨て **星祭** **星の島** 七月

七扨ちとあり **星祭** **星の島** 七月

の夜座を酒掃し **宿小几** 燈を施し酒脯時菓を設

赤粉を河鼓織女に散 **一星の島** 夜をもち

老成志を懐く或ハ天津中をる小舟とる白光

ありこれを徴とく **老成** 故宮を乞ひ看を乞ひ

子を乞ひ只一子を乞ひ **雀氏四民賦時記**

先ッ七日ハ **雀氏** 河涸度を扨ひ **雀氏** 乞巧

あり河級の座小机四脚を置く **燈臺** 九本各灯あり

机のよりの拍をまえり **公羊根源** 筑前國大崎

の星の宮とく **北** 彦星をかり **南** 織女を崇む **二社**

のるにあり **天** の河と号 **女** を浴とて **北** 彦星の宮

小この七月廿日より七日の夜またむり **河** 中の拍を **拍**

七

願の糸 **乞巧** 眞西の机の上 **金針** 七 **狼針** 七

澁合 **江次** 茅 **漢** の妹 **女** 七月七を

以七孔鍼を用 **襟** 樓小穿 **俱** 以 **習** 之 **西京雜記**

七夕小婦人綵端を踏ひ七孔針を穿或六令淑詢石
 を以て針とて一歳時記又唐の宮中七夕小妃嬪各
 九孔針五色線を執り月に向てんを穿てり公事根元
 巧を得たりとて○明皇貴妃も小七夕小花清宮
 小喜酒饌を座まつね息を牛女に託む又各蜘蛛
 糞を搦く小合の中二箇々曉小ひり金蛇公事根元
 綢の稀密を巧の候とて故小民間も又これ公事根元
 天竺遺事 七夕糸ともいふ香花を供へ供物を調
 る座亦文を垂て竿の端小五色の糸をひて一本
 を祈るよ之年の因小必叶とて公事根元
 乞巧ハ蜘蛛の
 稀密より名く

星の葉

札の文の火より小深夜
 ちこれ物あり公事根元

庭の立琴

乞巧奠小所より箏一張をヤ下し
 東山西北の机上の妻小置注 延長十三年

の例和琴を用ふ良書よ云柱を立ふ小之儀あり乃て
 半呂半律を用ふ秋の朔子之江次第 半呂半律とハ
 樂書よ云黃鐘朔大食朔ハ律

星の物

七月七日
 巧花

藍丹及蜀漆丸を合へ経書及衣裳を曝も俗なるふ

と然四民月令 郝隆七月七日隣人を視ひ皆衣物を

曝隆乃作小衣履を出て人々の衣を問曰後中の
 書を晒のと世説 晋の阮咸字仲容七月七日旧俗乃法

當小衣を曝一結阮庭中爛然とて綉綿よあるハ

も咸と紀之總角より乃て女竿を立く大布の犢鼻を

標た中曝て云い俗を免ると能と○七夕小

草蓑を曝曝まどハ中章氏月令 供具をとく

の庭よ文をおく公事根源 七夕よ書籍衣服を

晒よりを曝ふるととて 巳歳時記 云七夕

星の物とも小袖も云イ 小俗物を以て

嬰兒を作り水中小浮べ以て婦人子小宜兒の祥とて

らむを化生といふ王建が詩云水拍銀盤弄化

生化なり今の泥塑嬰兒或ハ銀靴を以て

老化生をなまるとも云て七夕の戲もをらむ

五雜俎 馬琴按さる小水銀盤を拍て化生を弄らむ

といふハ百子の池此乃下九七夕の戲ハ婦人子の美
 を致さう起る百子ハ子の美れを以てハ銀盤と或

百子池を以天河う惑百今の盟と云はる者ハ非らん○
謝肇淵云牛女有育者より始り武丁の喜云小成
物物兼様の浪説に成る云云思謂七々牛女の糸ハ
元女曰の哉とて詩人採てこれを織て一時凡流れ
玩と云ハ可く是を以実事と云つる者ハ
男子の見あむ謝氏雜記小具と云を編らう **七宝枕**

梶の葉

晋の郭翰女ハ青標あり月小葉ハ庭中
小叶を織女と云はる者ハ与婚小仇儀と云て
後七宝枕を以て留留り別を決て去 **五雜俎** ひとり余
吾の妹小天人下り服衣を梳師小治世と云らむ者ハ梳
師の妻と云り年月を以て梳り服衣を得て天上と云心
梳師と云小昇天と云女ハ織女と云り男ハ牽牛と云り
との再び天上と云時梶の本の上より糸をお布と云はる
附て与るハ三星のよ小梶の糸を用ひ糸の糸と云
又この糸を用ふ略して小記と云と淡海志おもと云
高辻章長朗詠抄云云是日小生も亦の牛女ハ服衣
てふ謡曲ハ似たり糸ハこれ梳神記ハ裁も亦の技風
の目夫肉下小六七個の女女を視る二女毛衣を脱り田吏
とりてこれを糸と云はる者ハ死と云る便りの婦と云
あはして之女を生後毛衣を横指下に納く之女と云小
天上と云ると云

を擬て也と云 **茅の糸** 此糸
の糸の高むく **短冊竹賣** ひとり七月六日市中
書付ハ藻汐州 穀の糸を賣る昨夜
竹を賣る二星に供む或ハ短尺小樹の糸を用て
待ちを賣る今ハ民間の見女又この紙を剪て短冊と
一これと云を去は條の糸ハ法びまぐ屋上出見
こは竹竿の五練糸は換るもの紙昨今市中短尺竹
より多し又近來五色 **花名井の鞠** 七夕小丸名井
の短尺紙を賣るありと云 **終波のたふ家**
蹴鞠の意あり恒例之上高茂松下高松松并二枝鞠
と足木の者あり臺上及び地下の門人多くあつた

池の坊立花

七日 洛の六角堂頂法寺雲林院ハ三
条の南小あり近世の俗者光敬
品の花枝を二瓶のり山水の糸象を摸ることを
と云傳これを立花といふ今まありと云くこれを脱ふ

例年七月七日花数品砂の拍あり法人練をこれ
をさるに池の坊の喜花といふ二皇孫供を多のころこ

本願寺の菟花

本願寺西六条南大宮東
山小治の北油の小治の西小あり

東六条の南鳥丸の西北小治の山新町の東小あり西門
跡と称す七月六日の夕東西の本願寺末流共二皇孫
花数種を以船の形を作り又槽の形を造り中二皇
花数品をたたく門主小献まを堂上に並ぶる今

日七法人 七日此御節供 持統天皇五年秋七月七日
これをさる 公卿宴會も仍て朝服

をたまふ 日本紀内撰司方これを綱をま今日
索餅を用ると板あり名 公事根元 今日良家

并地下まに白帷子をさる一書文変ま戸く必
索餅を喫一或ハ送おおく取索餅ハ索餅を

横 逆の峯入 七月のそ免大嘗修験道山伏の
客僧大嘗方京小出 大嘗新

法螺を吹け令別杖を響り戸くを遍一府
檀家小治九皇文の法本山流熊所方大嘗云

これを吹の峯といふ法高山流大嘗方熊所に
出るを逆 仁明天皇天長

のまを逆 文珠會 仁明天皇天長
十年七月八日大法師恭養云云文珠会を修む

公事根元 文珠会ハ畿内の郡邑にわくけを設
席食をを食す食食小施 外是文珠涅槃終の

文二傍云云最荒生あり文珠師利の名を云ん
小十二位劫生死の罪を除却せん是礼殊供貴ま致

老ハ生々の処恒云法公 六道系 九日 五系の末北
の家云生ん 大政宣賢略 建仁寺聖

の角にあり今の建仁寺大昌院爰候と云孫管寺の
かそ云云 名勝志 孫管寺ハ法大師の因基を以て元

墓場なり小堂小地を安んず世に六層と称す傳は
この所冥途に通じ扱不登之け所方親六道に終る為

此の所と云ふより毎年七月十茶盆系九日男女
系訪を 維州府志 今日法人六道地差小治之男女

証を唱 聖王を定む各枝の枝或ハ新米を買ふ

精霊小供と云

核賣

今九月諸人六石にきうで
核の枝を愛ひ家小なる

これを和と云

茶におく俗聖美核の葉よりきうと云ふと云ふこれ
有美を定子の意之六道八桓氏天皇延暦十二年
長岡より今の京まで行つた時諸人の墓所と定む
たまふ一辻都記小又云つり源氏小相重の更衣を
墓にをさしたるに云ふに云ふはゆめゆめと書きたり
なりとを本も茶師如來八信教大師の他七佛茶師
の多一
清水千日詣 浅草四方六日詣

七月九日より十日にわたり清水親善小法人茶詣と
夜小入りと系詣小斎今日系詣平日の千交
小あつ新といふ浅草の親善も同日引く或は六
にこれを言ふ六子日といひ或は六方六百十日小あつ
と云ふより更小斎なり但西郊の撰集抄七の
十六小出所謂悲華経を引く志れども今の謂悲華
經と云ふ文は○七月十日

王子権現祭

十三日

觀音欲巻記

神社氏州岩附王子村小あり

熊野三所権現之別當禪麦山光院令彌寺

詩社社説云云文龜元年劫禱寛永十一年

官より修造を加へる毎年七月十二日系礼あり寺

中十二坊より田樂踊を出るとの併に右雅之法師

二人甲冑を思ふ小長刀を拵振ふ七本の長刀を佩

この外見踊あり乃七本等の使立く踊をちむこれ

田乐法師の遣風軟又神代の巻に土俗此神の魂

ををさすを其の附は花を以て又鼓笛階

用て云ひ舞をさすと云ふを家より今日に及

在より諸人系詣と志願あり亦の老竹竿を以て

旗を造りてを神系に納め又社内より旗の竹竿

旗を請交け持ち家小なる亦尚花よりカ病州

の五香といふ神葉をとり病苦の疾を治す

用ふ小入旗ありといふこの邊より其の地之花

山さう多く滝中川 嵯峨茶葉花小名あり不

動の流八成就院の境内小あり石神井川ハ王子山

の林を流る梶原塔大遺物の地夜奉りて

の林を流る梶原塔大遺物の地夜奉りて

の林を流る梶原塔大遺物の地夜奉りて

踊おどり 念仲ねんぢゆうおどり 題月だいげつ踊おどり 燈籠とうろうおどり
二に区く 伊勢いせ踊おどり 本芳ほんよし踊おどり 小町こまちおどり

王子みこ醇まじちかぬ瀬せ可かを平ひらげ軍士いくさしをさすす新鼓あらた戲あそび
をたりたり遠とほ小世こよ不ふ云い新鼓あらたをを子醇まじ西人さいじんと對陣たいぢんせし時とき

軍士いくさし百余人ひやくにんの命いのちを新鼓あらたををたすす先隊せんたいの軍いくさ前まへ不ふ
出で虜りよをを殺ころすす勢いきほ危あや懼おそくく遂ついににをを勢いきほ破やぶるる注しゆ云い

新鼓あらた戲あそびの樂人がくじん雜劇ざつげきををたすす跳躍しんごうをを致いたすす世人よじんの
これこれはは效こうふふ書言しよごん事こと 是こゝ躍おどのの枝えだ與よ吹ふ○本朝ほんてうの俗しよく七月

十日じふにちよりより十日じふにちははつりつり毎夜まいや大人おとな小兒こゝろ街まちにに踊おどり躍おどりをを傳つたへへ
一い或ある六夜むつや中なかつ同列どうれつ志してておお知ちままその家そのいへよりより大おほ踊おどり

ををるるととここをを總もおおどりどりといいふふののつつけけららふふのの家いへはは
たたがが踊おどりをを傳つたへへるるここをを踊おどりをを返かへりり踊おどりといいふふ
そのそのおお曲まがををららふふはは鼓こをを奏そうするるををととままくく青あお鼓ことと祿ろくをを

○志し弘こう踊おどり八はち路ろ山さん川がわ合村あむら一いつ宗そう寺てら村むら小町こまちをを唱とな
へへ踊おどりををたたすす○歌うた同どうおおどりどりのの浪なみ山さん彼か岸がし寺てら村むら

小町こまちのの郎らう中なかつのの老らう媪おん法はふ花はなのの歌うた同どうをを唱とな踊おどりををたたすす
松まつのの湯ゆ又また同どう○燈籠とうろうおおどりどりのの浪なみ山さん岩いわ念ねん花げ軍ぐんのの
吉村きちむらのの女むすめ女むすめ大おほ燈籠とうろうをを改かへ小こ裁ざいきき八はち幡ばんのの社しゃ本ほん不ふ聚くわ

男子おとこをを鼓こをを吹ふくく笛ふえをを吹ふくく踊おどりををままじじににをを燈とう
籠ろうおおどりどりといいふふ裁ざいくく架かのの取とりりのの燈籠とうろう踊おどりををままじじににをを燈とう

関せきありあり女子おんなの家いへくく春はる初はつちちをを製せい造ぞう一いつ途とをを
のの権けん振びをを秘ひまますすといいふふ○小町こまちおおどりどりのの街まち踊おどり之の或ある説せつ不ふ

今いま江戸えど民たみ同どうのの女むすめ見み士し人にん或ある止とりりおおつつなりりてて是こゝ分ぶんひひ
且かつちちるる是こゝ小町こまち踊おどり之のといいふふ○伊勢いせおおどりどり八はち世よにに以も

松まつ坂さか考こう終しゆう之の○本ほん芳よしおおどりどりのの地ち名なよりより名なつつりりのの
外とほ紀きのの舟ふね家いへ洛らく山さんのの幡ばん枝えだ地ち差さ踊おどり不ふ改かへ鄙ひんおおひひりり

ととまますすととまますす各おの々おののの名なありり枚まい舉あげげまますすととまますすととまますすととまますす
廿にじゅう三さん日にち 性しょう素そのの人ひと小こ茶ちや湯ゆをを施ほすすたりり
扱あ待まちのの名なハハ佛ぶつ拒こ流りゅう記き十八じゅうはち宗そう曉あき

扱あ待まち 門かど茶ちや 扱あ待まちのの名なハハ佛ぶつ拒こ流りゅう記き十八じゅうはち宗そう曉あき
傳でん又また同どう書しよ元げん九く錢せん止とりり傳でん及およびび張はり
巖い才さい不ふ示しもも足あるる九く公こう唐たう山さんももおおとと之の 燈とう籠ろう 燈とう籠ろう

高たか灯とう籠ろう 揚あげげ灯とう籠ろう 切き籠ろうととまますす 舞まいい灯とう籠ろう
灯とう籠ろうをを禁かみみ哀あれれ不ふ厭えんをを致いたすす十日じふにち教しよのの燈籠とうろうをを法ほふ

人ひと許ゆるささしてして汗あせをを入いれれるるここをををを定さだめめてて今いまもも九く中ちゆう
元もと不ふ灯とう籠ろうををとと致いたすすとと寛かん喜ぎ不ふ後ご不ふ起おこりりてて今いまもも五ご
おお終しゆうるる歳とし事こととと定さだめめるる明あけけのの月つき記きをを近ちかきき民たみ

女家別父母の冠服袍笏の類を具し終然小なるを
これに籠るま紋を以て之をを紗箱といふ父母の家
小送り女死にハ婿亦代りて送り蒲中不むと死
ハ別清晨陣設るとま敬之子孫冠服を具し
揖讓齋折去く神を導引以て祭事と復送り
てこれを出せ

五世圃金

盆會 盆供

齊明天皇三年七月

五雜俎

始く孟茶盆會を設同五年初て孟茶盆經を法
圓小下講すむ日本紀孟茶盆ハ是釈氏の考を述
息を報ひ苦を救ふの要う同蓮の母をまふを以
始とを梵語云く孟蘭此中を倒懸といふ孟六け方の
筵之釈氏要覽同蓮比丘より母の餓鬼中ニ生じ
をえく即ち祈を以飯を盛性くく母小餓を食
いふ口小くど化て火炭となれ終工食ふとを得
む同蓮大工叫びく地還り佛は白と仏の曰汝が母罪
まは汝一人の力いふもも我亦あむと當ふ十方の
鬼神の威神力をこむと七月十六日小不り當に
七代の父母現在の父母厄難中不れ其をのる二百味

五葉を具て以盆中小送く十方の大徳を供養

と一佛鬼神初て皆施すの乃七代の父母を

致し祥定の意を致しわきく後食を交すとこの

時同蓮の母一劫餓鬼の苦を脱と死とを得り

同蓮仏は白と永く来世の仏才子孝悌を致す

又孟茶盆會を奉て介と致すとを得さむ一可

る人々や佛の言大に後代の人を以て困て廣

く華飾をせむ乃本を刻之竹を割給賜芳糸

花果の形をなり工巧の妙を

聖靈まき利

灵糸 魂棚 聖灵棚 棚終 盆の當

十四日より十六日いつて家々棚を張先人の位牌

を列ねるを魂棚とも聖灵棚ともいふその灵をま

つ紙を灵糸ともいひ又天取之灵糸ともいふその式飯器

を公け孟茶盆子久かかけ小我菓餅香花を供して

これをもと又芳糸を祈中ニ布花尾草を以水

を灌記着給り灵位を祈その祈を習てその

祈といふ家の家の家の傍に牌前小幡經

これを桐経といふ京の俗の方糸を中用するの二
 方糸を公の臺といひ倍木をうんかけといふ○謝
 啓淵云孟嘗多妻六月蓮の母餓獄中二階の
 故不同この切徒を設け法の餓鬼をして一切食を
 得さむ人の祀考の天堂示空り極尔世界示生
 ざりてを予むむ餓鬼を以てきたり然も思ひる
 五雜俎 五月のこまが此一冥まつり
 文明八年七
 月十日云来

生淨靈 芥の飯 刺鯖

文明八年七
月十日云来

内膳宮方公郷方以下有法祝之儀ハ云々
 親長卿記 生心冥といふ文明の天の以方より
 現生の父母足跡などの生心冥を祀するなり○
 の俗七月より八生取二親を供養して生心魂と名
 一く是も孟蘭盆を云の終行之孟経云取ハ現在
 の父母をり者命百年病なく一切苦悩の患ひあ
 りや云云是七月十五日倍自恣の日取左の父母命
 云久を祈る勢致の文之 兩窗倭筆 ○蓮の飯を考

此の灵香小供ト又親戚の家工務るこれを生心冥
 と名づく符の墨以蒸る糯飯を白と親善料を以
 とせを結ばし仏念より取の炊 和三七月十五日
 人家各糯飯を符系小畏を結ばし小戒を
 親戚の同互小お符りてこれを結ばしをせ蓮の飯
 とすこの月をを鯖魚を賣と結魚一雙を一挿
 とす一魚飯を以一魚飯 七月朔日より十
 の内二挿七取刺鯖と云 墓土系 又月に入りて各
 祀考の墳墓示訪る之是唐山の人清明の日上墳
 祭掃の礼と同ト○源の災家集示七月十五日
 之のせき山寺にきうつ取而之のるを蓮の
 系ををんろを落おく小我ハ云々けり是蓮の墓
 系之○伊賀の古里にて一カハ系杖小者云々系を

三井寺女指

江及長岑山出宗福寺 又蓮
 地福院ハ天津の例小あり
 福寺

園城寺又三井寺と称せ定城寺ハ津園小井を
 以名と一三井寺ハ西巖小灵泉あり天智天皇地流
 三帝即位の時この井の水を抱き浴湯に執つれ

因く所井といひ後改く二井小作是之皇の浴井
毫華之會の儀この寺平日女人結界の山只七月
十八日女人の集訪を許し堂山せしむる事
女訪といふ當山六智證大師因縁の用基也
夏書納

佛者四月十六日より七月十六日に至り一夏九旬の間他
の化差のる小聖経及名目数目を書写し夏終りの
後これに堂塔伽藍小納め三思万具小回向せしむ
を夏去納といふ格
夏解草 佛尼解夏の目錄
子も又これに效ふ 之以節を束め

檀越は遺取をせよと交解事といふ今この事を詳小
まると已小五分法身の序とて故小吉祥等と名づく
親氏要覽 四時一色泉石の下小生む山卯の人以瓶
小挿して視る先小落字ありといふも葱翠華りて洞
子とて家小吉るあはれはあづな花を同く故小吉祥
等と名づく 漳州府志 節ハ伊又反音印草の名之

字暈天和本草云云交解事ハ夏門冬の大以紙をとり
水灯會 寺小あり當寺ハ華人莫蔡隲元
城別字治胆太和田黄蔡山万福

珠禪師明曆中の述立之今夜宇治川の船中にて
これに依り水中施念の法事之の式船二艘を双
申の刻斗小圍をのり小出先流し折アそ宇治橋の
下小入り兼小及く船中数々の灯を懸き舟小僧徒
左左小度と列ね七如來の牌を安し供物を備へ經
卷を福し音聲をうちて流し流し下取あつて後
三百六十個の燈を宇治川に流し流しはひ水小燈ひ
散礼をむ信堂火の如く一の灯白紙を以小蓮花
を邊内艾心を笠との熟艾ハ燭硝を以煮る火
をその末小長下たは六或ハ流し小くひ伏見豊後
橋の下に玉取とのあり僧徒亥の刻さう小忌屋の

前小ゆる○南國の凡俗中元の夜家戸各善美飯
を具し斎供をし前小羅成ハ相繼の所傷亡の野
鬼を祝祀し早て燃く水燈二千六を楯ハ流水小
向く塗めたる名つけく渡船と
以燈ハ紙燈なり 月令廣義 照冥 事
照冥 照冥 照冥

施火燈 大文字の火 多層火 船形の火
妙法の火 ○七月十六日今夜東

山淨土寺の山と新を以大字を名すこの字畫九
筆の及ぶ亦小あはれ傳へし至町家御旨の日を序
托記の乃こそと長ぢひ及小一条通を以面とこと
一説は延徳元年七月十六相國寺補横川和尚補住持
乞將軍美哉高道補信るんこの月六日より薪を伐息火
を以小補あはれそのる小補あはれその數十家あり今日申
の刻各伐り乾とりの薪木を推補ひ山と示補せ九六
文字一畫長補百五十回余五尺斗を隔補くせ薪木を
積補上二堆との數四百八十余所各薪を積補終りて後
日の補浸補るを妨補ぐ日補火と息とこの外北山松補の
小妙法の火を息と補松補息補小補の形の火を息と補堂
岩山補小補の居補の火を息と補洛外補の山補岳補并補
原野補法人集補りて補麻補の條補樞補の枝補破補子補公補々補の數
を補燦補く補こと補を補取補美補の
経木流 十六日 揚州四天
王寺の東
坊坊の亦小補岳井の水あり補名補白補玉補の補水補
はむ補り補白補河補法補皇補の上補東補門補院補寺補に補強補一補時補の
水補整補小補岳補の形補あり補を補又補て補白補玉補の補水補と補り

亀井の水と海とを以てその号の起るとりなり
新定 澤補た補た補龜井の水を補び補あ補げ補て補の補藝補を補す補が補つ補外
七月十六日世俗補経補書補堂補に補於補て補行補木補の補表補小補法補名補を補記補
この水補を補ひ補て補冥補魂補を補吊補ふ 撰陽群談 青補月補毎補に
六補舟補の日補講補堂補に補於補て補經補を補補補一補糸補訪補の補戒補名補を補名補張補
小記補一補回補向補甘補と補和補泉補武補於補糸補訪補の補と補記補名補を補名補張補傳補
去補り補て補指補る補矣補 梓補弓補と補つ補致補一補と補ハ補也補と補り補て補記補身
の補と補と補入補る補形補今補の補經補本補ハ補この補名補傳補の補遺補言補也補○
江戸補の補俗補七月補多補中補船補中補小補彌補經補一補經補本補小補志補と補示補
の補戒補名補を補記補う補矣補と補し補を補流補水補中補に補投補と補れ補を補川補施補
俄補鬼補と補は補是補施補俄補鬼補通補覽補の補本補と補様補也補との補なり
又水補滸補傳補小補記補と補示補の補水補陸補堂補 十六日
ハ補この補方補に補ハ補川補施補俄補鬼補ハ補ハ補 十六日
簡麻魁糸
簡羅王補六補地補獄補の補主補鬼補官補の補總補司補 俱舍論 簡羅
此補小補速補と補ハ補 叙氏要覽 珍補麻補鬼補或補ハ補 珍補羅補此補小補 註補解
息補と補統補と補 翻譯名義集 貝補府補の補一補三補六補分補 秦黃
三補才補二補祇補江補王補才補三補宗補帝補王補才補四補五補官補王補才補五補珍補麻補鬼補
王補才補六補變補成補王補才補七補秦補山補王補才補八補王補平補等補王補才補九補都補

市王才十轉輪王世俗十王のころ岡下王の政を
 ありて九王の名を知る稀に七月十六日を大沙
 日といふこの日治りてを彼一奴僕といふ服をさす世京
 小て六千石の岡下堂一多る江戸小て六未坂心法寺
 浅草法華坊長安寺沐川寺町賢法寺 世俗の
 寺を留
 大経管の坂二年己未の政人を指点と先前
 年の十二月朔日より翌年の十二月十二日小ありて
 八幡山下の郷家安居の政を勤む郷家村屋申
 の長を子との土地の申す此氏わ政との又十二
 月八日今日石清水安居政人の宅小放り遊所
 小細の神人長吏の補位を授けこれを指於せ
 又十二月九日政人の宅小放り郷家元を食
 愈一能拍子小ありこれを志といふ是小習
 礼の祀り又十二月十二日政人夫婦松山を勤堂を
 赤き垢離を修むこれを精を入といふ又十二
 月十二日政人浄衣を忌一七所社系一奉幣

あり政人の婦も又これ小儀并郷家烏帽子淨
 衣を忌一供なりとの行粧志在風の放生河小
 橋ニあり六安居橋と号く是安居政人の海橋
 なり常に浄の人を禁む政人これを忌むは
 今日より山上おれ政人の社傍の坊止常一精
 進潔斎まことの西郡桂の里の女子孫夜叉
 白布を以政後をつとまりて桂拾を拵ぐこれ
 を桂帽子と稱す今糸の童謡小小桂帽子
 是之十二月十日安居政人夫婦社系本社の前
 小大な松一本建て白布二疋をその上下の枝
 にか多人を引候小猿のまねをてたの松に
 せむのうけ布の枝を伐り携て政を小ぬる後代
 修政の敷とて今七月十日を以十二月十日は換
 安居の政の當日
 善福寺童相撲 江戸
 とて路出井ま今八三
 月十日とも候の
 雑色町小雨の麻布心と号す世俗尚寺を麻
 布と稱す閑心海上人の親書上への才子之
 當山と号す天台宗を了海上人と九四百余年

のたはれとの親孝上人常陸の配所方為宗の時
 常寺小常宿あり淨土法回のうへり浄信依あり
 て親孝上人の才子となり一向普念の教志となり
 くるまの道の遺傳小ありむとつて七月十五日ハ河
 上人の忌日之今日寺内ニある所の麻布持呪の社
 前小て童お撲あり
 祇天寺千部十五月ノ 明显十五月ノ 山祇
 祇るのころなるべし
 天寺八江戸藤黒小あり岡六祇天大傍正たり例
 年七月十五日方正百とお鉢院種子は彼終この
 茂系指
 衡突入つと 昔ハ徳圓小て後と入とて家
 おはし 戸秘巻と以器也或ハ之の
 家の嫁娘妻妻まよく常以て之とてお地を客
 致辰間上限ら以深く入りて然小之の辺常まを
 勢及山田よりあり百忌世人山田のつとと字控て家
 成從教を重くハ身欲の道に致及これを職徳の
 る小之とつて七月十五日方正と今ハこのころ絶てた
 小ひ
 七月十六日内裏貢の綿云云 藻汐州
 新綿あひ 新綿とハ蚕の綿之蚕の繭夏月に

孰く秋初に綿紫を物と丸小
 新綿あひ 新綿とハ或説小本綿也秋之と云
 清灵の社ハ六条極の小西小ありトハ条極大炊の
 門の小ありハ社ハ免ハ近湯通新町あり上清灵ハ
 条極の西本雲寺の北あり上下山灵の社毎年七
 月十八日清灵八月十八日祭礼あり神輿二基之山灵
 八所ハ崇道天王崇道 信与親王信与親王 古備登灵古備登灵 後大夫後大夫 廣
 繼廣繼 後系丈人橋後系丈人橋 速勢速勢 文正宮田文正宮田 火雷神火雷神 なり
 世小火雷神を稱世小火雷神を稱 菅家の灵とて致をハ誤り之
 傳傳 云云清灵八所の内四所ハ桓成天皇の清時これを
 初傳ト下の四所ハ仁明天皇の山字之皇を初傳
 之上出雲寺を山灵の神宮寺トト下出雲寺を
 下の山灵の神宮寺とて傳教大師の筆劔小て今
 古寺と小絶古寺と小絶 たり寛文中慈眼大師の遺傳
 小あり久遠壽院准后山城國宇治郡山科の
 之小於之出雲寺を再興之小於之出雲寺を再興 一ハ毘沙門天を安
 重重 志志 云云清灵の社あり是古を存重 之の遺志
 なり上山灵の清藤ハ条極通中も灵小あり下清

其の以族亦六年くもの所を定めどその年神幸
既座の家内不安を以族所より其の君を以族と稱

存子とやひの樹出とやひ

鳥屋ふむと八夏を小入するこ
四月八日小入く七月十日小出く之行著存と申之

一説小波初四より出く致といふ又説といふ字をそ一
たくとく是り程く説わり西園寺警首直取四月羽毛

將小易らんと且致と記帝婚を解去り鳥屋の内
小放日を送りて脱産して又新毛を生下く七月

中旬小出の如くこれを片多登といふ二歳毛を易る
と西鳥登といふ二歳

存子の山別

存子の山別
ハ七月九月

と西片能といふ和三
存子の巢を立て父母小入るを以て○存ハ極要の

の存子を生くも巢小あり其の子成長を以て虎六
親を食ふの表あり父母をそおれて居る小巢

より一尺去て子をばなす故小一尺秤を呼ぶ存秤と
いふ下草集存子何の心と云足言山へ存は是ちをいふ
足高明神ハ訪後神祇之死をの別せしこの心と

物と云二條基房卿鈔恒山之鳥生四子羽毛既成將
分四海其母悲鳴送之是往而不返也孔子家語説

花一説小丸尊を例してハ訪後神祇始なり故小六
七月の沖狭心系も存も訪後因縁あり元月小巢を

祥とといひ○仁徳帝の時依網の長念の阿海を
其名を捕く致して云長每小網を張り名を捕小

いふも是て是等の類を得て故不美とてことと
致を帝酒の君を召て名を二つと曰是阿木の名を

酒の君言この名種数多く百濟小あり到てうく人
るが又捷く飛て名をを掠る百濟の俗け名を号

て俱知といふ是今の乃酒の君は捷く名を到むいふこ
幾時なるとして帝婚を告ぐ和泉國百舌神の以將

小展等々稚子を捕しこの年八月甫て存井部
を定まら故小時の人との心を喚ぶ存井部といふ蓋

酒の君、百濟の人なり
存子何の心と云はれ
七八月の存子

存子何の心と云はれ
以存子を捕るを
全待て存子の離巢を離れ飛翔しつる食

飛致と云常小絶崖断巖の喬木を度る其の巖

この山を六地藏村といふは後保元三年平清盛六ヶ所
 小堂を造りこれをうらちとて七月廿四日供養西光法
 師之を与り終ふ今小堂ありて七月廿四日供養法六所小堂と
 これを地藏村といふ洛下の児童も又各香花を街衢の
 石地を供してこれを祭る又今日六地藏の院し亦六
 所の堂に諸大鼓を懸置を鳴り以て誦念講をなす
 俗これを六社を鼓と稱し洛東光福寺于兼寺への二院之
 ○江戸かてもこの日六地藏并に其堂宏權殿ありといふ

伊狭山系

北書

伊狭山系に造る徳屋
 今在記 或説は山系ハ洛下
 後訪ハ坂入帳命

神教を造りての外人家も祭礼の間に洛下
 造る又この山系といふは日本紀才一不野槌の神ハ
 二百箇野薦の八十玉籤を挿しむ是ハ天照太神を天
 の岩戸より出さざると廿四日の間をこしりて依り後訪之
 とすまなふハ洛下を以て幣とて敷くといふ也伊狭山と
 といふや或伊狭記より伊狭山ハ遠望をけを對て系
 とて造る之の始ハ田村將軍の母倍の高丸を伐んため

依徳國よりこの林に祈り九小棍の系の致有
 並に思ふ人湖の波と馬を走ると並に射
 了とて今並に射て祈るといふハこの所以なりて
 翅波とも書く後訪ともありと縁起に出る也社桓
 氏の沖宇田村將軍の建立といふこの林ハす
 田村の系を 徳屋 伊狭山系に造る徳屋
 系貞徳説天八月之藻汝

享和ハ七月廿日とて塙山井にハ七月廿七日といひ説
 多ハ七月廿日とて並に射て祈るといふハこの所以なりて
 種家といふ初使者の爲新小使家を設る
 今もその系凡して種家を造るを新式初抄とて
 種家といふハ後訪系のこととて系ハ享和十七又
 度あり是との一つのみさ山ハ山城並取の近所といふ
 説ありと名所方角抄歌枕秋の夜是亦ハ依徳
 といふ春兩抄より伊狭山系といふは此の
 角觥

郡領使

万葉

○両相堂で力を授養射野不觥

○童相撲 過角力

七

試と放小角能と漢書注角能ハ相撲指南

壯士裸祖お博く勝負を角とお群試既小早ハ

左右軍大鼓を雷してをり豈角力伎の遺耶

文獻通考史記恭の二世甘泉宮小在紙木を

角力試能優試をハ漢氏帝の試を好心即

今の相撲之事源岳仁紀小大和國出麻蹶速と

出雲回野見宿祢と力を撲む蹶速野見小備

と能むの腰を踏おられて死せ野見ハ菅家の

祖之○柏系天皇の時より代の天子皆悉お撲を

好む負観以後寂然とて舞る之今聖主之を

控む又楽もびや扶桑畧記先三月の以大將以

下陣の度不放く相撲使のを定む徳國七々に

選て相撲人を取とむを都儀と以公事根

源云ハ以小仁教東唐の大撲とあり裏去云是ハ徳必

の供濟人ハ大撲を好む也南教出沖のと紀仁教放てる合の抜也云

の前として天子の所後也先十六日の乃小の

侍あり上郷勅を奉りて左右の次將小相撲あり也

之をを後に左右の近浦方をからく回之使也

下ありお撲をとむを力家ことう改とい

ア元六月小内取といとあり仁壽教月ハ元六月小の月ハ元六

仁壽教の東唐不放てとを行所物是と死後涼教におくこれありと

年ハ也且手スととの義とハ同とりハ云ハ左ハ右ハ右との角力あり

小出沖が左右の角力ハ東唐放てる角力ハ又云也特異

の示物衣をともて元元年江記云角力ハ元年人以行列也の

常云下衣袴をともて一度小角力とりて勝負あり元八日

大の月元八九日ハ衣去る合後元六右大撲相會に以才云

小の月元七八日ハ衣去る合後元六右大撲相會に以才云

奏も佳年最上用を決て左右勝右負勝のとハ右先也細考天子南

教小出沖王郷系ともて大將お撲の奏を執る十七者取

て勝方乱声あり又元九日枝とて角力をとりて

御後せらる之神龜三年小時りて徳回方にとせる

寛平七年小ハ童相撲を沖淡ありもとく角力の起り

をり小日本紀垂仁天皇七年七月當麻呂小勇士あり

云云○延喜元年七月八日丁丑音お撲二十者を沖淡

綾綺敷不放く之のあり扶桑畧記延長六年閏七月

音お撲終る舞を奏と言今著聞助最後加ハ

七

公事小あつても何方小あつても今のお撲の敷こん
も内裏の角力小准下て秋とま九お撲の勝負を定る
者を新習といふ法の流あり播州東坂本西園是
又お撲の魁首を圖とい次を圖服といひ又次の次を小
詰といふの余はこれお頭といふ是今のお撲の極意

角力とりなりぬややのさうかき 山風雲

飯詰が子とことひもさうや相撲 奔居

鳩吹

あつてもさうとさ亦もいふを合せて吹くと鳩

吹といふは鳩といふもの鳴く小麻の声の似るゆゑ又
秋ともさうお麻の秋はまきとさうおはれお麻と
笛といふ麻の音をさねがて我らうもさう行上のつ
ぬ **奥義抄** 鳩は秋は仲実がうんおをさうさう
ふて鳩のさねをさうさう **八雲** 鴉人の鳩をさうさう
を合せて鳩のさねをさう吹くをいふ **哥林良材** 鳩
をさうさうをさねをさうさう又麻をさうのさうなり

藻汐艸 秋さうにさうさう人鳩のさねをさうを合
せて鳩のさう吹くをいふ **袖中抄** 法記此の

如といふも是れなり又一説小鳩吹は夜をさう
名人鳩のさねをさう歌さうさうおはれさうさう
さうをさうといふは説さう一亦お説小鳩ぬ
風とさう西風をさういふ今按をいふ

堀川 さうさうさうのさうも鳩をさう秋はさうさうの仲実
おの説はこれのさうをさうはせさうさうなり又

於玉 さうさうさうのさうも鳩をさう吹秋風さうも 巻法
西風をさういふ説はこれのさうさうおひ説さうさうさう

さうさうと吹く風を **花火** さうさうにさうさう人秋と
鳩のさういふさうさう

漢ふこれに説火といふ **扇おく** 團扇並
その製系ハ地よりさう

又このさうといふも秋は樹く **稻妻** 稲のさうの
秋冷なりて扇さうをさう

さうさう **電ハ難** **編米** 田畑送
さうさう **稲** 稲のさう

楸 俗これを **檀** 楓 **柞** 柞のさうハ山柞
さうさう **柞** 柞のさうハ山柞
小あり新く

あつとつきの虫ハ月華

初嵐虫

虫角 虫賣

○は月夜小入て火を叢間小点トて虫をとる

共虫

蟋蟀

詩経 蟋蟀之今俗いんをこほりたといふ

ちん虫 促織也

の吳名之

筆つ虫

同 叩頭虫 冬蟋斯

又月ト

皇虫冬蝮

今俗これを

蜻蛉

和名抄 或俗作

蠅未

鑣虫 馬追虫

菴小似て

秋の蝶

秋の螢

伊勢物語 とぶ螢をのこまをく

秋の蚊

蟬蛸

松虫 鈴虫

あく声小なりてあづけり

あく声小なりてあづけり 色をりといふ黒蛇ハ松ハ

山組

精蛉 本草云一名胡蝶

胡蝶 崔豹書

一名胡離和名木煮無波性蛉の小なりて美ら歌との

和名抄 今の俗いん又今ららるといふハ於熱水の最

和名抄 秋の虫

周茅烟之

一名義

冷麦

西瓜

一名ハ寒瓜 大元之世祖西域を

無三秋物

竜田娘

秋の野山 律の調 千秋虫 万秋虫

秋風樂

露務

鳥の浦 鳥の籠 秋鳥 鳥鳥

日本紀云云伊弉諾尊曰我生とてこの國

唯朝を務めてて意とては満る我鳥も白く

をくたり 鳥鳥 志鳥 鳥の籠 上鳥 下鳥

今日小死當多月持の大地供を修と十七夜小ハ三
待と称す月の出を供せ給ておと致すなり
居待月 十八日 月持 十八日
藤波州

ねまら神は日月の八雲源氏若葉下 永徳のころ
るまの九月と字敷くころをまの九月月れ外
も後育の月なるを公すの○外を月を八重小月
月と抱えしむも重月よりて七月小海ハ八重
かくはも月の百を形なむ十九日なり 桂明抄
又一説はまの月ハ十九夜日月之亦之保持ともいふ

十日亥中 十日の月更 更さら月 十日の月
源波州

常娥 羿不死の茶を西王母小情小姮娥竊と
服して月中小走す 淮南子 嫦娥ハ羿ガ

走るを蟾蜍といふ天文志 真如月
走るを蟾蜍といふ天文志

雪外の月れ 法花法義 元生のまに仏性ハ常小如
猶も自らなるの体も少も深き汚も喻る月の雲

撞きても月の体ハ常小清く影のなるが如しこれを
美此の月といふ六不妄の義如と云ふ月の養ける
法の故に切妄相を離すと不妄の故に我他彼此の
別あり 心月 拘る月
共ハ清くなるを○
観想我心月輪上有

枕字十 不妄の影
不妄の影 たゞ一妻の月を指 彌傘

八道行用 月の氣
月の氣 黒白の二氣あり五小樹根を繋乃至樹

確言喻經 之常の喻ハ人虎小逐れて野中の井に陥
らんといふ所の茶を切つて座をえんハ毒蛇はを飼
て候人といふ又黒白の二氣のりくこの茶の根を食
ふせんといふたうて毒蛇のりくを食ふと云ふ虎ハ
平生造西の罪業黒白の氣ハ日月の二氣といふを
月の氣といふ樓炭

経此文ハ 奥義抄 月の劍 二日月の形を刀劍
たゞ一又満月を

たゞ一 月の都 月宮殿
月の都 月宮殿 羅公遠用元仲
玄宗は侍して宮

中月ちゅうげつを教しふ公遠こうえん之月つき半はん小せう五ご人にんと要ようしるや否いな判はん杖じょう

を取とて空くうま向むかう擲なりて大橋おほしほしととか致いたす之の色いろ強つよけ

如ごとく傳つたへて因よりてと乞こめくと教し里り清せい光こう目めを奪うばひ寒さむ

氣き人にんを侵おすと遠とほく大城おほしろ關せき小せう五ご人にん公遠こうえん言いふ此この月つき宮みや殿とのなり

仙せん女にょ數かず百ひゃくをとる素練すれん寛かん衣い小せうく度た摩ま小せう

帝てい同どう是この行ゆきの曲まがとと目め電でん裳しやう羽う衣いの曲まが選せん志し

此この二ふた夜よ之の子この二ふた列れつ小せう女にょ

午うの二ふた列れつ三さん入にり子こハ夜よ中ちゆう之の

枉かたが 枉かたがとと二ふた本ほんののううとと杜仲とせぢゆうととのの子こおお似にくく分ぶん列れつ

ハ仙せんとと二ふた本ほんののううとと六む鳥とり伝でんのの説せつ又また志しををつつ枕まくら枕まくられれとも

冷泉れいせん殿とのと宗初そうしよののあありり小せう女にょハ強つよて穿せん毆お金かね

ももででももかかままねね下した後撰ごせんののあありり又また後ご叙じよのの源げん出でのの落らく葉はももた

て本ほんのの教し定ぢやうままとといいひひいいふふくく杜仲とせぢゆうのの一いつ種しゆ蔓まんをを

ののここののはは下した或ある人にん云いふ蔓まん生せいままとと木きはは侍しやうてて乞こめめくく

幹かん太たいくく下したまま上じやう敷しきせせとと木きのの属じゆく之の日ひ光こう山さん通とほるるのの林りん小せう

徑けいくくわわ 和名抄わななまのしやう又また薄うすををいいふふとと列れつををいいふふとと

芒ぼう 楚辭しよせき注しゆ小せう草木さうぼく文ぶん白薄はくはくととわわららむむ

薄うす 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 時孫ときそん云いふ葉は茅ぼうのの如ごとくく長なが

の如ごとくく 漫芒まんぼう 葉はのの百ひゃく經けい 夜よのの羽うとと紀き

仙せん條じょう芒ぼう 志しののままとといいふふとと志しののままとといいふふとと

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

王わう律りつ刀たう 漫芒まんぼう 葉はのの百ひゃく經けい 夜よのの羽うとと紀き

の如ごとくく 漫芒まんぼう 葉はのの百ひゃく經けい 夜よのの羽うとと紀き

志しののままとといいふふとと志しののままとといいふふとと

仙せん條じょう芒ぼう 志しののままとといいふふとと志しののままとといいふふとと

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

おおぬぬきき 和名抄わななまのしやう 鬼芒おにぼう 四五尺四五しち志し杖じやう利りりりくく人にんをを傷やぶすす

或ハ蕎麥糲の灰汁ニ浸シ二百日
白柿 法柿を以枝を

こり出して食ハ味ハ甘ニ変ビ下忍ニ
つね或ハ糸小繫テ晒し乾まはれ蕎麥多ク指差糸

を用て包宿してよくおねを生まじ秋州西条の産取

英之佐州これニ亞流及及び

尾州の降登柿ハ長ニ守あり
胡葱柿 豆柿 全上

干柿之ハ塩ニぬり
柿州ハ糸所柿
御所柿

宇治ニ出ツ
と名を以未ねりす

大和の所村より出
木冷 似柿 此柿又似

樹液の下系ハ致拍
木冷 似柿 此柿又似

伽羅柿 形小なりて長く
田舎柿 形条く太

て味淡しあり
透徹柿 形長く肉少く尖

て醜柿と云ふ
肉中沈香理の如く

おて味ハ取英是
圓座柿 形大ニ肥条く薄

も依房柿の属し
の附と云肉起り

癭を
樽枝柿 是醜柿之異条の俗これを指

ハ片拍
枝といふ蓋酒樽中に入置きて

炭を脱
君遷子 蒲萄柿 上ノ高味英

の謂あり
ことと云も食

用とせを
柿糕 英柿ニ米粉を和し類蒸飯なり

ゆつふ
小兒亦与ふ食して下血ヲ制止む

初めり
柿臈 猴菓を取て山中樹木

和三
の虚或ハ品腹の四カ致

和ニ
梨子 梨子

和ニ
大殺 奥羽秋田の産他別不倍と物樹下にありて

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

和ニ
紅瓶子梨 瓶子の形して赤

青梨の種
まじ梨小似て褐さ之梨よ敷
圓梨 梨中て大く皮
種やはも水梨も梨よまじ

空閑梨 肥前産極めて大之也
少く赤之の味ハ多梨

妻梨 草生の浦津勢ハ
小く枝さきさきハ

山梨 上
貝小ハ梨
鹿梨 ありのこ
ありのこ

新米 今辛米
新藻 叔挽
大カ大豆の如く之を食ハ少く梨の味ハ

新米 今辛米
縮干ス 縮板 縮川 田の色 田の庵 田舎

小田 山田 縮舟 魚縮 今の人玄賓借勢
と書ハ假字遠り借勢をふん古今集に

鳴子 今の人玄賓借勢
とほつとあり雪雨流をほつとありの巻

鳥刳 引板 鳴竿 彈 紫字
傳燈録 ○いひへ之皇の世人死て棺槨殯葬せむ包

小白茅を以しこれを中野小投孝子その禽獸の食
をこれ小忍びを彈を作りこれをちり禽獸の害成

防く按さるる彈ハ紫字なり田圃の中草偶人をりて
弓を拵め以多獸を切せりれ之○他中園湯川寺

の玄賓借勢亦を民間の奴と云ふ一田に在て稻を
ちりる者雀を驚かすを以紫字と云ふ今も多りて多雀を

驚かすは朝ヨ大と傍如と云和○ん子引板ハ多紫未
ると此繩を以これを引ケハ鳴る多雀を驚かす又方さか

捨積抄木板まを流(漚)をつけりかき一庵をお
とらまをゆめともいふ○鳥竿ハ躬恒秘抄抄木牌の

先ヨ字を以片山里ニ粟米といふのを作り積を遠
りさるる○とほつハ古今蒙雅抄田のおとるに

人多人形といふ或ハ添水など書ハ後の人ヨと云ハ
そほつ或ハ曾富澤などあり

焼帛 馬の尾を焼
和之説ハ附云と云致へる

田小弁と云麻

七

その香を嗅ぐ田を

鹿火屋

焼くやまを山に徳
鹿のつくす小小屋

てまわたり枝折藪

鹿のつくす小小屋

他して塵埃何れれの嗅ぐ火をとり棚をたて

て麻をやらむると公得下或ハ香火を又置敷屋たて

字をのりて書く事もあふふりまふくもあれを用ふの

らびて又火の字濁りくもて顯照何れの説く述ぶるも

とぬ釈まわ

木綿取 桃吹 綿実桃如くは小

列巻中より白綿取

鹿 二十年かゝる茶麻とあり又百年かゝ

白麻と化し又又百年かゝる法麻と化し

拾物 日本紀 麻を以て

○秘蔵抄小云くハ

牝麻を以てとハ牝麻を以て奥義抄ハ

論 牝麻を以てとハ牝麻を以て奥義抄ハ

日本紀云く麻ハ古くも

の難記云く麻ハ古くも

は蜂ハ八雲御抄ハ蜂

と云思按するハ徳洗此の如く

後の人ハ古くもハ古くも

たり加茂翁の改書云今

次とありを以て是を志し

狹牡鹿 和名抄ハ牡鹿

鹿を狹ハ狹ハ狹野

云今のハ小男麻掉麻

集小ハ小牡鹿と云るハ

ハ添ては詞なり今ハ

夢野の麻 拾津國風

あり又先傳ては昔

あり又先傳ては昔

あり又先傳ては昔

ありとの嫡といひ野小居との妻の牝鹿法徳回中使小
 居る彼牝鹿屢野路を往て幸とお聖と既して牝鹿
 幸りて嫡の亦宿を明且牝鹿との嫡小居り云今夜
 吾背に雪零おたりと云又初の草生たりと云
 け愛何の祥ぞとの嫡復夫の妻の所為性云と云思
 乃坊相志て云背の上草生るハ矢背の上射るの祥又
 吾妻ハ白陸空小塗の祥汝法徳は汝ハ必射人射
 らるそ海中小死人律で復性と云る也との牝鹿感志
 小猪ど復中流小流了海中行船小遠遇後射死さる
 故小けを名づけて愛中といひ俗説小刀裁野小立取
 真牝鹿も復相の事小云云契沖う云仁徳記小菟
 餓野の鹿の愛れるハあはれと云ふ方復性といふ
 之をどこはよりて後
 中ともよひ河社
 肩拔鹿
 此のそま下は
 こけて肩ぬく鹿ハ妻といふを旧事記云云復
 今中臣祖天兒屋命忌部祖天太玉命内拔天香
 久山之真牝鹿之肩而取天香久山之波彼加而
 今古美古事記の説といふおちり神代天鹿の肩骨を

抜てしりかひりてその木ハ和名抄小云楊桃一名朱楊
 和名波加名 延在武云凡鹿中沖下料波加木皮ハ大和國
 有封の社に傳ふ様
 てこれを進し
 紅葉名 十六 班龍

錦馬 共ニ鹿の 鹿笛 捕者鹿と云んるハ笛吹
 鹿を奪くハ鹿笛の形銀查の葉の如ハ鹿の鹿角
 を以てこれを作り撞すハ鹿の腹の皮を以て之を小
 竹葉の如しの小糸を附て笛の口を繋ぐとの吹へ
 之吹と云ハ小篋を以て笛の肉を拂ふ是家私吹左の指
 を笛の支振ふ是おたはめが如しこれを作らざる

の笛の音を以て牝鹿と云ハ牝鹿の事と云ハ牝鹿ハ
 鹿の事と云ハ鹿の事と云ハ鹿の事と云ハ鹿の事
 鹿垣 鹿を田圃に下
 鹿狩 伏見教人
 鹿狩 鹿を田圃に下
 鹿狩 伏見教人

本朝雄略天皇云云ハ小狩して之を大鹿を獲
 多ハ小草香幡披娘の冠をを凍めハ帝後

人々の黙と得つ朕は其の英云
を以てとるまひとをあり 溲の後虫 和布の

たる小沛老中のありありとを以て 勢語註 日にかくと六
番の刈藁まつてこの虫我々をさすをほろむとあり

名つて之を 榮雅拙 約ふの示をふ不依とてんら
たふべし深く分て殻の一片を嚙わり分殻の意に因

と以てハ秋なり 増山井 蚯蚓鳴 孟夏始と公仲冬
ハ先づ出晴ると夜夜啼く或は結と雨と付く紀

て百合とて秋自蟲冬と定をおるやうして雌雄とある
故小郭璞が賛云 蚯蚓土精之心虫文以不分

自無虫小睡とん今小兒陰腫るとありハ以てこの
物小吹るとと経験方と云蚯蚓 其虫鳴

人を吹程大風の如く眉鬚皆落 其の
父也 是の虫の音と云 鳴 正宗ハ龍鳥一

俗混合とて鳴とと和と云 鳴 西十八品あり 〇天鳴
〇はと鳴 〇拘思鳴 〇黍鳴 〇黃脚鳥 〇京鳴

〇雁鳴 〇秋鳴 〇山鳴 〇遠音鳴
〇木雀鳴 〇草鳴 〇ホネ中鳴 〇鳴の羽搔

〇鴨の鳴 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔
鴨の鳴の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔 〇鴨の羽搔

きて波のぞく樹のこを齋雲といふ今の女房相
 小い子をひきとてとい彼が肉の色よりいふやと
 陸にうたれぬをば東大あれ美の八は葉もあつて
 略とておひともいふ後の人いふて出の字をさう
 めさうとてあつて今今の日ハ何 **鰻鱓** 魚種
 るし中よりなりぬとあつて **鰻鱓** ありて鱓が
 一を以て鰻魚小漫とて時ハの子を鰻魚 **秋七種**
 一葉者小漫とてまて故小鰻鱓といふ **羅碎公雜錄**
万葉 秋七種の花ハ萩 尾花 虫撰 世説同義
 首の花 松子 女帯花 菘袴 鮎 虫撰 世説同義
 此花りとも虫やまて行ハ何ハ小葉葉あり出信ふや
 美色ハ教之の道遠と昔教之入るの暖熾序ふ
 と向ひて虫を筑子とてまてまてまてハ堀川院
 の亦時より始りたる虫撰とも昔ハ葉葉の社司
 なるまて作らぬむ一於虫かごととまてまてまて 故種同
 の信らけりともやと昔ハ葉葉あり出信ふとあつ
 合せけり 堂上の虫とて九月之恒 一雨小まてまて

八月

八月とハ葉葉月の略といふり来
初月といふて初来とて序の初て来

た教らちかるといふり又まてまてハ八月ハの字
をそのまてまてまてのまてとい説ふまてまて

南呂 律 **白露** 節 處暑の後十
五日斗庚に

速を **秋分** 中 白露の後十五日斗
一雨小まてまてまて

仲秋 月 **竹春** 簡 **壯月** 纂 **中高**
書 未考

中律 出所 **難月** 全上唐類函ハ八月難
一を以て秋凡ハ葉葉とて

あり難月 **槐風** 玉 **月又月** 全 **燕六月**
の語のま

雁来月 八月鴻鷹 来美月令

八朔 八朔梅 **特怙の節** 馮氏常供
たのこ せつこ

この菖田の美のを以田の美は美と云い而ハ菖田の初
 菖田を禁裏秋草の菖田の名ある歟又今日君臣明交
 其又美と云うて田のこの訓をかりて秋の菖田と云い
 公事根元云々八朔の風俗は後醍醐帝潜龍の時外
 殿源通方の子亭子在中不近後の男女私けけを
 かりて雨系を懸けたるの後即位を以ても加り
 三引このりあり或ハ以後源義院建長年中より始
 まり新穀を折交或ハ土器を盛り送り送りお祭り
 田の美と云い園大層云々光明院康永三年八月日
 今日風俗不似ひ雜名物流布園白以下秋菖田あり
 一条禪圓兼良公明在二年の記云々今日各物亦
 不之不持以と云来い云々二十年来
 このとあるを云云禪圓の記云々ハ寛元年中始
 行是之の後に始りて又寛元年中再興ありとのある
 一〇井内侍日記宝治元年今代後深平院年号の下の八月
 数日中宮の四方よりとりたりなりハたき物と云ひ子
 なきと云うくはけりハハ又と云うたき物の名
 之てたの美ハ物なき白いと云うる者草をけ内侍の
 之をたき物とたのめハ湯きと云うるを合せり云々たのめ
 の美といふは小又云う梅松菖田足利等氏々の
 心なり物なきの乳なれをいふハ八月一日など小法人
 の些物数と云うてありと云うる人なり云々
 山紀聞〇ハ秋菖ハ梅樹の一種なり
 この菖花を用く菖小この名あり
 尾花の菖田原
 康富日記文安五年八月初日乙卯云々尾花の菖の
 つまみの由来何れもや自然に及ぶ云々ハ同云々
 いふに及ぶと云うの子細を云うてハ邊菖かハと云
 〇八月朔日小花粥内裏仙洞以下令用給良菜云
 云彼粥調法薄里
 曾行器京の俗八月朔日
 焼粥入合也海合藤枝
 小菖の乳母を
 の出さるの女児に好器一双を賜ふの好器の中一掃
 英の菖の花を盛る菖の花ハ白系餅あつきと赤小豆と
 した菖この餅の形房かこ白系小餅より破あつきと赤系と
 赤系又赤系と名づく女子赤小豆を喰であつといふ又物
 小菖ををつくと云はあつきの菖をとりて赤系と名
 づくといふ今日菖の菖は菖を以菖子を造り或ハ鳥

〇八月朔日小花粥内裏仙洞以下令用給良菜云
 云彼粥調法薄里
 曾行器京の俗八月朔日
 焼粥入合也海合藤枝
 小菖の乳母を
 の出さるの女児に好器一双を賜ふの好器の中一掃
 英の菖の花を盛る菖の花ハ白系餅あつきと赤小豆と
 した菖この餅の形房かこ白系小餅より破あつきと赤系と
 赤系又赤系と名づく女子赤小豆を喰であつといふ又物
 小菖ををつくと云はあつきの菖をとりて赤系と名
 づくといふ今日菖の菖は菖を以菖子を造り或ハ鳥

儀の甲を以て造り成造り或ハ糸紫を以て金灯籠を
製ス又練を以て葎を造り草の實を造りて此の形
を作桃仁を刻て松虫を作り亦ササ仁を枝を分
らねて造り器々にお飾り京の俗を祝ひ物とす

○八月朔日を腰とす俗

天中の節

八月朔日

これを腰臘といふ月令廣義

の日の事

○以前小天中節赤口白舌隨節滅と書て門戸
小押と云云拾芥鈔陰陽秘法云わつ大国の后

天中樓小座て事わりの人素懐を遂ぎ小より忽火
神となりて天中樓を焼時小后呪て云八月乃隨

節滅云云傳の凶悪日陰陽系天中の札を以門

戸に貼て道場よ正月一日を

天中の節とすともいふ

三村祭

三村或ハ水
村小作泉

洲隈南の庄陸穴の下条岡口村小あり佐吉日記云

祭多神伊弉諾の是れ此子奉勝食揚圓長棟之後小

生玉牛取天王を合せ祭る乃佐吉の外宮とす故小

朝廷あり七年小一度住吉の社造替をなすり時

尚社もこのまの社地元岡口村本戸村系村の間に

俗三村大明神と稱し大寺祭と異す○密宗山念

佛寺ハ聖武帝の所經よりく約基の岡基之社

八十石泉州府志例系八月一日言これを三村祭又古

祭といふ本戸村岡口村原村の本居神あり大念仏寺

の祭

三日月泉州堰常樂寺の天神

堰天神祭

像ハ菅神大宰府に社

き日自化りあり七軀の像れらるといひ傳ふ社傳ふ

長徳二年轉改正月海濱小漂ひますふよりけし

安置ス或ハ昔陸穴の郷湊村小あり故小陸穴天

神とい中より北の庄ハ初精と文明二年菅原系長

の記云云和泉國毛須津井草部土師向井陸穴

高石ハ菅家の氏神天穗日の命以来の旧儀ハ

為長々のまのとをさすともくは陸穴天神ハ天穗日命

五条祭あり

小く後ハ菅原相を合祭祭

泉州府志例系六

月十日を其神祭と八月三日を秋社祭とすこの日

系菅原神輿堰七道濱むなり夷嶋渡所即

日還幸之先板の徳抄四日と

野祭

冒一條帝
永延元

云々今ハ三日と云ふり

年八月五日祭礼下りて衣幣あり後冷泉帝永業
元年八月四日定む五日八坂の國忌よりて之元一

社注式北野系今八日元八五日先例大長より始む

納云々後小幸大匠と称す傳りあり料米六十石

拾枝抄多る神立座中八天満天神東八中將殿社注

西八吉祥女菅家の北方社の西南吉祥此の系云々

藤の神輿下立賣の西河旅所は移りなり其

間止余町の地は蜀錦を布供の軍綾羅の袂

とてねせん袂たんの声雲井いひ雲

多る當社の旧記あり也

近江平下風自發大明神八猿田彦神祇正堂これ

比良明神と同体社説昔八桐帳あり元祿中

より止む今八尺内陣を用く宮殿を造りしむ

之四月上の辰巳系礼神輿渡所あり往古の神門石

橋の邊今水中二町半湖水の沖より縁記あり

也多居のあり而を務川村と云社跡あり町中河

あり務川と号すけ川の北を務川原と云別當を白岩山

延命寺福壽院と号す毎年二月八講あり桐帳八

八月つぎ **敦賀祭** 十日 氣比大明神八越前國敦賀郡

氣比の神宮六宇依り併之八幡八夜神天皇の毎祿氣

比八仲哀天皇の結度之例祭八月十日○今月二日よ

り十日と近國北里四方の徳商人放下師狂言師ホ

事り集り二日神輿洗あり敦賀紙屋町といふ所り

例年紙細の家ヤツ其竹籠を出一京の祇園囃

残摸と二日神幸四日を後宴と称し町中の氏子

東番西番と多れ引山を出一地車あり町中を引

廻り山のよま一丈半の松を立四方錦繡の邊幕水

引ホ洛の祇園祭の山の如しよま氏者人歌を飾る

山の數或ハ五ツ或ハ六ツ祭礼當日よこれを出すと天

神の表とて示流流あり神輿社の方十日之

待宵 これを小正月といふ **名月** 名を九月

今宵の月十五夜三五夜是月月見

仲秋十五夜の月をむかと申とあり和漢と云

民間今日餅を制し同番芋と枝豆とを

盛り茶神酒尾花を月小供ト或は相務る今の
清人の説は八月十五夜雨ふれば来年元日收賤之者
十五夜晴くとれば元日雨ありといふなり或物より
たりと云ふ事これさうさうと云ふ事多くと云ふ事

秋は只このひ身の名をけりおほしき事八月はさるる西
名月や夜をあらたにたぬ袖に侍也 露

新月

三五夜中新月
也 白樂天詩

端正月

事文類聚○今
の人八月十五夜を

以良夜と云ふは縁之書言古事は良夜は
深更なりといふなり秋の夜も限らざり

俗間今日必辛と云ふ事
食は故は芋名月の名あり
月華 月華あり或は
人八月望日

夜半或は以微雨後或は以必八月のとなりて秋後のそ
俱はこれあり或は以その五采鮮明旁照數十丈金線

の如き此百餘道或は以但紅雲をを圍繞する信
川吳比部搗謙少くも時こびこばるるの景象鮮

妍千態万媚直は人間の心をえざる所の奇之云云
又言二月朔日正午日華ありき人愈々

得て李程が五絶の詩を徳興天慶祥開月華
ふとのこれを謂耶 五雜俎 ○愚按も我俗七月十六

夜の月中之尊仏の形あり
といふは八月華にさすべし
十六夜の月 哉生魂 既望夜

○倡月といふはひと
別と十六日の月をいふ
物汝 海潮八月独大なるハ何

故は月をさすはハ團盛なり八月の望に盛之 五雜俎
秋は金もなれば金生水も水は金を得て盛るるなり

を名抄 臨安志に位子晋が
るを附會するものハ非なり
司召 昔六位以上が階を

えりて采爵を授けり之上御官の東の二聽をさるるを
次は朝所といふて二献の規式あり次は自安穩の座を
二献あり挿取の花を上御以下冠さるる大臣ハ白菊細

云ハ黄菊冬後ハ龍膽との余ハ肉の花をさると二月の
列見は同 式兵の兩者より然司の軍の首を選成する

を列見といふれを書わつるを擬階の姿といふ
これ人を擇出で定むは定考と云ふ

公事根源
司召ハ秋の除月之京官の除月と云ふ春の除月ハ練召

司召ハ秋の除月之京官の除月と云ふ春の除月ハ練召

司召ハ秋の除月之京官の除月と云ふ春の除月ハ練召

司召ハ秋の除月之京官の除月と云ふ春の除月ハ練召

と号ス各洋任の軍を召と云云矣政
官秋ハ外記の廳に於て召沛を

八幡祭

放生會

八月十五日諸國の寺のありといひも男山の神
事を以京師の人八幡系或ハ放生會といふ社

改養豆の南八九町あり京を去ると四里余男山石清水と
号一或ハ雄徳山鳩の峯と称ス欽明天皇三十年冬肥後
國葦原の池の邊民家の見之方の時神降ると云我ハ是
人皇十六代崇言天皇ことこねはふりて豊前國法座一八
幡大神と称ス伊ハ貞觀元年秋七月八幡大神鳩の峯
より移るふの秋行教南都大安寺に居るこの僧姓ハ武
内大臣の裔之曾て貞觀の初宇佐の神祠に詣一其九月
昏ハ大衆経を説夜ハ密咒を誦と夕夢中ハ大神告
て云師王城なるハ我も又随ハ初王城に居て當皇
祚を護べ一と行教つち山城國山崎なる寺の夜
大神又夢中告て曰師我居る亦を云と云と云これ
又云ハ東南男山鳩の峰に光を現ハ初教これを奉
て宮殿成る○正殿ニ座中ハ八幡宮 神東ハ氣長足
姫尊 神西ハ比咩大神 玉後嵯峨天皇源姓を諸皇

賜前ハ八幡宮を以氏神とこの社を以本朝才の宗廟

とあり毎年二月十日初卯の日神楽あり所神楽ま准せり

八月十五日放生會あり養老四年九月征夷のときあり大隅

日向の國逆乱とありて宇佐の官に祈請せりありその

徐宜辛嶋勝堅豆米の神軍を率てつれ國を征一敵

を討て利あり大神降ると曰合戦の向多く教書を致と

宜く放生會を終とと諸國の放生會と云始に○

今晚神を輦中とせしり神事を促と左右の馬寮

和馬二疋を牽召使官堂外紀史九右兵衛の府弁

奉後上卿左右衛府上藤前駐本指屋敷とあり向ふ

神輿猪の鼻を下り宿院頓宮とありて行列祈幸と

准この式後三条院延久二年より始

當社祭式甚敷未之故と略と 鶴岡八幡祭

相州鎌倉より一名ハ雲井ヶ峯上の宮ニ座中ハ尊神

東ハ神功西ハ妃大神之 神下の宮四座中ハ仁徳天皇東

久礼宇礼の二神西ハ妹比咩之後冷泉帝の所宇伊豫

宇保於義期后安倍貞任を伐と丹祈の旨ありと

康平六年八月石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮

の地を初請き永保元年二月成就義家朝長修後を
加ふ治業四年十月右大将朝々小林のまはすはこれ
今の猪苗圃之毎年八月十五日放生云云祭礼を幣流

竊馬角 筑紫宇佐宮祭 十音 欽明天皇三十一年豊
前國宇佐郡鹿之峰

カホあり 菱形の池の上の民家の見流して白我ハ是才十六主誓
田天皇廣幡八幡之我を護國灵験威身大自在王
菩薩と名づく迹を徳洲は神明と云ふ今影よみ地

二在とありこれに参りて祠を建八方ハ池の
幡を立故は純直して八幡と号ス社統ニ當社ハ登
参して云大神の絶言我无量劫よりこの三有化生

志賀八幡祭 十音 四代
根元云八幡ハ岳跡の早後ハ豊前國宇佐ニ鎮りあり
一ハ聖武天皇東大寺建立の後巡礼の途に純直を
了りて彼寺に初請やせん身をたど勅使ハ宇佐

皇即位九年壬申近江國湯賀郡ニ岳跡ハ幡一の所
前八幡大井公今の聖太子是ハ唐大僧の形聖太子ハ
阿弥陀八幡大井の分身之深海志 是山王七社の神

外神奉るなり之 筑前箱崎祭 十音 糸神之座
皇東ハ神切皇后西ハ武内宿禰之仲良天皇ニ帯を討ん
と欲しあり神切皇后も亦筑紫糧具の宮にあり軍

咒して曰請征伐の後降延われと三韓と云ふ平定し
筑紫にありありて男子降延るハ應神天皇是之の
地を以て宇弥是といふ胞衣を嘗ふ事あり地ニ埋之松

速例祭八月廿音之 古老傳へる昔この松系ニ戒定
て標とすとの松在と云縁起云昔白幡四流赤

心喜廿二年六月廿日純直よりて宮を箱崎の松系ニ

速例祭八月廿音之 古老傳へる昔この松系ニ戒定
て標とすとの松在と云縁起云昔白幡四流赤

速例祭八月廿音之 古老傳へる昔この松系ニ戒定
て標とすとの松在と云縁起云昔白幡四流赤

幡四流虚空より降る其所に松を栽て標とす故に八幡の号ありと猶説述異之社筑前國那珂郡あり

河州峯田祭

十音 河内國長野山護國寺地藏院の縁起云當社八皇十六代

應神天皇の御陵へ母后神功皇后の御胎内よりして三韓征伐の後筑前の國に於て降誕所殿は軼の秋あり多々峯田別の皇子と号りは於て是より矢の家を守りて之は時々顯れり治世四十二年仙齡百十歳の春大和國豊浦の宮に崩じ玉体を瑪瑙の棺に納め河内國藤原の國に葬りは於て三代欽明天皇の勅よりて宝殿を嘗て之所の神明を祀る所謂中殿八幡大井丸六仲長天皇右八神功皇后之世に神祠多しといふ當社八玉體を納めはの天廟あり八幡宮の根源威験流るに神紫八月十五日の夜自の院の所廟前本堂(鳳聲)を行華なり翌十五日午の刻還幸年一未あり四月八日若宮系後孫樂見齋隔年とこれを以て放生と云ふ當社これあり伊勢安濃津祭 十音 社説より但社説題を記

勢國安濃郡津城の南に八幡宮茲座 昔古の頃の三神相傳ふ建武中足利より氏々二國と云ふ八幡一社を並んと

欲し修塲を以始とす乃ち宮殿を千歳山の上と造り石清水の神を初詣し源家の興隆を祈る旧記云永正

年中當國兵乱よりて神殿荒廢と僧願海募りて國中を化して再興と耐し享禄三年之又數十年の度類

廢りて僅に存と寛永壬申年城主田獵してこれに至り小祠を林樹の間に作る左右何の神あるを考る者村老

を召てこれを問ふ言足利將軍の建る所之即ち心教を獲りて土木を集め正殿許殿神庫華表を造る寛

永十二年初めく祭儀を行はると同止年岳水は厚の二村三百石の地を附て昌泉院を以別當とす今栗松院

といふ古ハ山上ありて千歳山八幡宮と称せり今の地はより安濃津の城を築るを以安濃津八幡宮と号す

乃一志郡岳水村に屬と蓋津の城の街坊に菴藝安濃一志の二郡は隣といふ

三津八幡祭

十音 播磨西成郡 大津の寺町あり三津といふ津也津。羅波津是也といふ昔の基寺院を定て三津寺と号

後神院ありて八幡を初清と毎年八月十五日祭礼あり
社説云當社六清和天皇の所宇筑紫宇佐の神男
山は遷座の時西海より初めて至り東洲中への旧跡より
祝ひ祭るといふ又一説は應神天皇行幸の地ともいひり

○揚州難波堀江の人月を以所賞と各跡文より及
て家よりこれを月元と稱し又難波の所枝と稱せ是
八幡 とらしかおら 江戶城南深川より
富賀岡八幡祭 十五日 所為岡におき

と云別當大栄山永代寺 給深川第一の大神之或ハハ
神侍ハ菅公作之源三位親政深くこれを崇む其後
千葉家より移り足利家氏より傳へ基氏持氏に至り後
上杉家に傳へく太田道灌ゆこれに依依と名所記
寛永元年長感法印灵夢の正ありて永代嶋宮
居を遷す一同八年成就と **磯石集** 深川の六人本居
神と祭礼八月十五日放生會あり三十年に一交正
祭礼を以練物引山ホを以と深川の惣結守なり
とより
豊浦祭 長門國豊浦郡龜山あり多勢神中ハ
應神天皇元ハ神功皇后石ハ仲良天皇ハ

七二社法式云人皇五十六代清和天皇貞觀元年男山
子遷座の時約教和尚行宮を造りこれを初清と後土
御門院文明年中建立○今八月祭は二月十四十五
の吉日龜山祭ありこれを先帝祭といふ安徳天皇の所
祭礼ハ阿弥陀寺に陵あり海辺に宮ありこの祭前後
四の間に息花とを得ど又平家蟹赤間が岡の海
辺より常ハこのとなり是先帝の所給月ありと里
民より又九月十四十五日八幡春日の多社をより
國主より馬二を牽せ競 **野口念佛** 十五 播州
馬ありといふ是八幡祭也 加古
郡教信寺ありこれを野口念仏といふ清和天皇の所
宮教信といふ者あり姓氏詳ならずと或ハ南都興福
寺の住僧永西房の才子と加古の驛舎の北に草
店を築び常は西方に向ひて祢名念仏と性仁也
寺に孫人の符を授け勞を救ふ貞觀八年八月十五日
完栗の竹を以て盜賊の爲に教されぬ首ハ教信ハ
ほり小幡り鞍ハとの地を築き毎年八月十五日僧徒多く
教信寺に集まりて仏事念仏を○祝書の略云

抄州傍尾寺に僧あり勝如と名づく貞觀八年八月
 其の夜一僧ありて門を敲く即ち迎へる客僧云吾
 播州加古の教信之念仏の功カ小なりて今夜極楽に生
 生する之高僧ハ必明年の今夜往生す死之といひ訖
 て去る時之中音楽交えぬ年八月十音の夜勝如
 界て 駒牽 駒迎 江次才云云元八月十五日之
 死せり 朱雀院の所四忌よりとく

十六日に改用ふ頭書云云依濃勅使の牧十五ヶ所延書
 式之裁も野の一之天皇南殿之出所ありて所馬を分チ
 取し出所免時ハ建礼門の前の大庭に於てこれ
 を牽介し裏書云云上野九牧延喜式廿八日云云
 七日甲斐の勅使の牧十七日甲斐穂坂の牧廿三日依濃
 翌月の牧廿五日氏蔭勅旨の牧立野の牧又十五音信
 濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日延喜式云云
 ころこれ外兼平官府十三日氏蔭杖父の牧廿八日
 同小野の牧所馬これを貢む公事根源云云公卿以
 下次才より馬を賜ふ馬の足綱をとりて所前不
 毛と一津と取給りたる馬を引合使とて次將
 を以院東宮にとる

菅大臣祭

去日 京四条の南 綾の小路西

洞院の東より南北道を隔て是善公の宅地との
 内北は菅神の社あり是菅神降誕の地之故に社を
 建てこれをなす 雍州府志 或人云け所昔菅家の館
 一夜花梅の天神といふ是之今も花梅の跡この地
 存も又一説は文字の宅地あり菅神をわき遷宮の地
 之洛の人阿米神と称す例年八月十六日社辺の氏子こ
 沙をなす神輿一基童子 御雲祭 去日 八所の
 素袍供奉社僧といは従ふ 御雲祭 去日 八所の
 八所の翌午後三時神輿二基中の所其の離宮を
 出幸の舁八本九舁を床上に建て棒二本四人を
 以これを背ふを幸の舁と云神室のより持てこれ次
 ぎる故も又勢力の人舁を帯の間にまき多を以こ
 れを棒中これ系舁といふ又一人舁の先は道祖神
 の後面をうけて神輿を先うけ後面の鼻長大なり

俗これを玉の鼻といふ別處及氏子供を所旅所より
 西の方今出川下鳥丸を歴り長者町より室町を

過り本社は上所灵の社、京極通筋遠橋の乾二町余あり、下所灵の社、與も同所は津敷を土ッ、許五本別尚氏子供、上所灵の行列の如し、神幸此洛次京極を生榎木町の西より東洞院の西を麻して出水より室町を下り、二条をより油小路下立賣をより東へ、京極より本社は下所灵の社、京極通大炊所門東北の方、
菜名祭 十日 春日大明神の社勢あり、例祭八月十八日なり

州菜名の城下あり、祭る神四座別尚氏眼院の祝る云、経津主命八神護景雲元年下野香取の宮より初詣と又武甕槌命八正慈二年八月十八日常陸國麻嶋の宮より初詣と天兒を根命姫大神八永仁二年八月十八日伊賀の名張より初詣と毎年八月十八日を以祭辰とたると正慈永仁の月日を以これを終るとつり、先十七日社前の南北に車一輛が佈夜まで、然し祭あり、翌十八日祭礼の時、件の車を南北へ引渡し、音楽を奏し、明和十年の春、回縁以前八も社六座より北之嶋の神社に、南春日見神社三座

共、昔春日法度の目を以、多回縁後祭祀、延一と二嶋大明神八土地の神、法度の年月、詳ならず、但凝洲崎鳥洲池の洲崎合せて三嶋といふ、七月七日の神幸あり、氏子貞糸川に於て石をとり、来りて、あ社小献ごとく、石取の神幸といひ、日囉遠物を以、
 ○この八月祭を天武天皇の祭礼と記せる書あり、日本紀、天武天皇元年九月朔、車駕還伊勢、四葉名宿、まよふ云々、今、駅中、神社あり、よりて、撰り、記、欽、
菩薩祭 十日 肥前國長崎に於て、来船人、船神を祭る、八月、これをほさる、あといふ、和云、舟の神を媽祖娘々といふ、俗、これを船井といふ、唐、船長、傍まより、性、なる所、の神、是、船中の水揚、を、馬琴、揚、まよ、五雜、姐、ま、海上、天妃、神、ほさ、あ、は、とい、あり、甚、冥、たり、航海の者、多く、危險を著、こと、風、濤、の中の、如、か、か、蝴蝶ありて、雙、死、を、夜、半、忽、紅、燈、あり、甚、危、といふ、も、濟、ふ、を、獲、天、妃、ハ、その、功、徳、を、言、て、以、天、子、配、む、を、い、の、と、女、神、ハ、あ、い、と、い、ふ、知、こ、記、す、の、媽、祖、娘、ハ、天、妃、神、也、○長、崎、は、唐、人、

和云、記す、の、媽、祖、娘、ハ、天、妃、神、也、○長、崎、は、唐、人、

寺として四ヶ寺あり福州石反町崇福寺漳州下院
 後町福濟寺南京六寺町興福寺この三ヶ寺昔ハ
 唐僧住して今ハ看主持之外は日付寺として院後町ハ
 聖福寺といふあり昔より和佛持へば此祭の日ハ和
 佛も唐の教束して法未修好と本よりハ教音この日
 未舶人しとの寺院（系指）との吳体をえとも諸人
 群集とといふ四ヶ

電戸天神祭

十四 江戸本所
の丁急電戸

寺といふ其黄蘇蘇池之
 村あり 今ハ俗呼て亀井戸といふ社は一個の清泉ありて是ハ
 漏出掩ふ石龜を以て龜の甲上は空けて水を引取ふ

龜井戸なるを所ハ此紫太宰府の神体にあたり寛永三
 とつう

丙寅年菅家の末系大鳥居信祐建立系し八月

十四日本所牛沖前と蘭手之為社の神宝天圓の剣と

ありこの外後水尾院の震華安楽寺の瓦硯を以

の文基 大園秀吉公の文屋へのり上運分
 師信巴となまといふに其前縁あり神庫に於てこの

辺成平川蛭子名あり祭の日 西院祭 七月 春見

有幣神楽あり近來正祭也 神社ハ
 洛西葛野郡あり四條通西の土も四町斗云云西院村

の西平林の中ハ社ありて名跡無き西院の号ハ中

ころ此所小育院の居りて故この名ありて育院と
 書を後編りて西院と作る次例系八月廿八日神輿ハ

二基とのハ住吉れ神なり 秋土 立秋のち才

住吉の社ハ 西院ハ幡多と云来詳 秋土 五の戌の月を

同村の西有 秋社と寺大抵春社と同ト 京師八月秋社ハ各社

鮫社酒を以相務及貴戚宮院諸肉雜物を以細

和し飯上り爰これ 燕歸る 燕子春社は来りて

を社飯と云 葵花録 秋社に去次 月今之

中宮の所といふ 秋の宮中宮に限らざるの

秋の宮 八雲 九中宮を月また云 采雅拙又一況

后宮ハ西の方を設けりて殿ありハ秋の宮とす又

天子を日またとすハ中宮を月またとすハより

秋の宮 祭る日上の丁日 後の彼岸

と云れを 春秋の彼岸ハ昼夜等分なり長短分ハ仏道ハ中

道と崇ふこの附帶して中道の辰之故ハ仏道を修

提謂経英津土ニ味経ハ五目と答を修しる事又て
 たり八日ハ別彼岸とあるハ五目ハ立春春分立夏

夏至立秋。秋分。立冬。冬至。是天地の諸神陰陽
 交代する所の日。梵天帝釈。諸長三十三人。司命司禄
 閻广大王八王使者。悉出四方を巡り見人民の善惡
 を校録するなり。故に善事を修むれば又善事を大
 師の觀經記に念仏して西方往生の修行をなす
 夏冬其の兩時を取らず春秋の二節をとるもの也。冬
 仲春月。仲秋八月の兩時。正東より日出て去。西に没す
 弥陀の四立。西日没の所にある故に弥陀の在所を死
 生を指示して往しんじゆ死活杖の祭しんじゆ猪の熊三條の南福
 生を遂るなり。刑部省の地より獄を断じて死刑を行ふ故に刑
 死人の為此の社を建て。系記を修む。毎年八月
 系日神幸あり。此を死活杖の祭とす。○千本引接
 寺土生の地。菘ホト。毎春修む所の念仏會。元死
 刑人の為す。執行のまひ野分のまひ八月の大風を以秋風。京野
 ちりり始なり。草木を吹合る由を考ふ
 やさい八月且夕やや寒し

良寒

八月且夕やや寒し

初みぢ

落紅葉

万葉集黄葉作る和名をもちと
亦この名あり。つづを略してはとと

通じ及みのちも秋をなづる秋もゆり○紅葉を流
 木 雞冠木 檀 黄檀 栲 栲 柞 八雲栲 漆

梅 藻汐草 此類をれ秋の葉を落るもの由急なり
 ざとくはつれも通じを檜樹の紅葉とせん

花とくは檜紅葉と 碓さか 衣ころも 去い 去い
 〇古人衣を擣ふ兩女相對一杵を執り美を看

か如く今易ふよ引杵を作り對坐してこれを擣
 和訓彙編 淨傘を云抄に云ぬはさねたぐの略なりと

つり板うらはあつらひ控へんは石の編へんは作る衣板さかはあつ
 らを疑かりと云ふなり衣うつと八作はちと云ふなり

八作はちはあつらひと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 誤り馬琴うま按おさむる和名鈔に云唐韻てい云碓さか知林反

沼伊 擣衣石也字又作砧いとありとの次は擣衣杵を
 也又との次は碓さかを載の陸詞切韻りく云天戰反展てん繒石

也僕語鈔云岐沼伊太とあり碓さか碓さかと云ふ和訓

ふねのいふほどふねたぐの暗なる人まてく字散をさるら
 てものを福をハ和洛のまを解せる銀く又磁うつ
 と依。かハ式子内親王 ぶいひすまねのまは愛こ
 めく物も一袖のまをさるら以後との物ありすべし
 俳諧師の説ハ杜撰多し初人の人まてくさるれ○志
 であつとハ釋抄と云ふまづよすへ又あまりにすへ衣志
 であつともいふハ雲志とハ釋抄つて神幣を志で
 とも志づともいふ共志矯るるるハ仙覚拙 愚按まらよ
 志で志づともいふあまがさへまうれは静の志すわじ
 志づハ倭文と云いふの文布ハ日本紀ハ之都波陀又
 之頭旌利などあり志げやうづ倭文の志すれりう
 一とよあるハ是ハ今四ハ志作まらるる志ハ四ハの列ハ
 用ひまらり候字ハ志まらうと云へ○鏡巻ハ衣を
 志くハ志のうろ緒を巻らうと云へ○志まらりハ格を
 うろろ緒を志まらうと云へ或
 かまらり出所の志考也

長夜 八月より九月
 まらり候なり

名の木散 牡丹の根 大の秋ふ後ハ
 根をさるらるる

木芙蓉

水出りのを草芙蓉と云ハ荷花是ハ陸
 に物まらり候志考也

木犀

江南の桂ハ九月花を用く子ハ木犀ハ
 南方草木志桂ハ數種ありその系鋸齒なく

后子の星の如くうろ光潔ありあり散嵐の圃ハ
 叢生とらんを藏桂と云ハ一名木犀亦犀花香
 氣最るる人を

桂の花 木犀 梅嫌 正字
 不詳

嫌 縷紅 金剛草 馬を繫くハ放
 其の根をつて身

檀特の花 芭蕉の屬本草
 正字

花紫

白粉花 正字
 未詳

白粉花

未詳

烏頭

附子

紫苑 鬼のまじ草

こまじ草は下草にまじりてけいれ鬼のまじ草と云ふ
 是は万葉西は大伴家持坂上家太娘はつらみ
 離絶數年後會相聞往事歌と云い鬼志許草
 鬼醜女草など云うれ紫苑之○鬼のまじ草と云
 別の草の名はあらず云れ草は然を云く草はまじり
 高き人を云人料は下級につけたるを云ふに云ふこと
 なり云れ草といふ名は只たまに云へん程なりけり鬼の
 まじ草といふといふに云へりハ彼の鬼はあまのこころといふ
 詞之日本紀才云不順也凶目汚穢之所云云云と
 ハコころと云へり詞之凶のまじを云ふなり **袖中抄** 又後代に
 良の説は昔人の親子を二人のりけりけり足才孝
 かなる親うせりてのち歎き塚にたづなふ如く云々
 幸ありぬと見才ありけり云れねえの兄公まつて
 私をうりたる様どもおひるさう只よ止む耐なり世宣
 草ハおひを云うめを塚にたづなふ様を云ふなり
 くれを恨まひ紫苑にまじりて草といふ種ハハコ
 の程よりまじりてけりせ世は萱草をこまじりてと
 云と云なりあり弟ハ又絶てて泣く日親の塚に
 声あり忍ぶるまじりハ君が親の塚をまじり鬼神
 なり兄ハ云れ草を植て公まつてまじりておまじ
 らんとその家をまじりて寔之其許ハおまじ草植
 てまじりてまじりて至孝之天帝ありけりおまじり
 けいれむらハ今よりまじりておまじりてまじりて
 べとらして止め弟ふと後まじりておまじりておまじり
 あるまじりてまじりてまじりてまじりておまじりて
 苑草ハ娘と云とおまじりておまじりておまじりて
 わん人ハ植ておまじりておまじりておまじりて
 まじりて鬼の師子草と云ふまじりて○紫苑を云
 のまじ草といふまじりておまじりておまじりて **八雲** 思おまじり
 くまじりて鬼の別まじりておまじりておまじりて 和名抄に
 紫苑和名能之俗云之乎途又鬼和名於途と
 云ハ是を云ふたがひあり和名まじりておまじりて
 このまじりておまじりておまじりておまじりて
 まじりておまじりておまじりておまじりて

こまじ草は下草にまじりてけいれ鬼のまじ草と云ふ
 是は万葉西は大伴家持坂上家太娘はつらみ
 離絶數年後會相聞往事歌と云い鬼志許草
 鬼醜女草など云うれ紫苑之○鬼のまじ草と云
 別の草の名はあらず云れ草は然を云く草はまじり
 高き人を云人料は下級につけたるを云ふに云ふこと
 なり云れ草といふ名は只たまに云へん程なりけり鬼の
 まじ草といふといふに云へりハ彼の鬼はあまのこころといふ
 詞之日本紀才云不順也凶目汚穢之所云云云と
 ハコころと云へり詞之凶のまじを云ふなり **袖中抄** 又後代に
 良の説は昔人の親子を二人のりけりけり足才孝
 かなる親うせりてのち歎き塚にたづなふ如く云々
 幸ありぬと見才ありけり云れねえの兄公まつて
 私をうりたる様どもおひるさう只よ止む耐なり世宣
 草ハおひを云うめを塚にたづなふ様を云ふなり
 くれを恨まひ紫苑にまじりて草といふ種ハハコ
 の程よりまじりてけりせ世は萱草をこまじりてと
 云と云なりあり弟ハ又絶てて泣く日親の塚に
 声あり忍ぶるまじりハ君が親の塚をまじり鬼神
 なり兄ハ云れ草を植て公まつてまじりておまじ
 らんとその家をまじりて寔之其許ハおまじ草植
 てまじりてまじりて至孝之天帝ありけりおまじり
 けいれむらハ今よりまじりておまじりておまじりて
 べとらして止め弟ふと後まじりておまじりておまじり
 あるまじりてまじりてまじりてまじりておまじりて
 苑草ハ娘と云とおまじりておまじりておまじりて
 わん人ハ植ておまじりておまじりておまじりて
 まじりて鬼の師子草と云ふまじりて○紫苑を云
 のまじ草といふまじりておまじりておまじりて **八雲** 思おまじり
 くまじりて鬼の別まじりておまじりておまじりて 和名抄に
 紫苑和名能之俗云之乎途又鬼和名於途と
 云ハ是を云ふたがひあり和名まじりておまじりて
 このまじりておまじりておまじりておまじりて
 まじりておまじりておまじりておまじりて

をせんとすたひの詠 おん とも

露草 月草

あまの 月草

おるすおの花はねの影を以て おん とも

宇治花園

山城風玉記云云 鬼道と八輕嶋明宮の内宇天皇也 うぢの とも

子鬼道の雅郎子相原の日折の宮を造り以宮室 うぢの とも

崩潰のころを新勅撰集慈法昔人一人のあまや うぢの とも

文慈法八宇治の園自粒通公より五代後法性寺兼 うぢの とも

笑々の子といふその先祖の花室を知りたるは うぢの とも

或説は秋の花とハ芳宜を以才一とて宇治の花室も うぢの とも

元芳宜の うぢの とも

芒の穂 尾花

龍膽

うぢの とも

久佐又途加素もに粒撥之俗はこれをいふ うぢの とも

旅り○正白花ののを箆就撥と云 うぢの とも

この説は尾花がりのおひま うぢの とも

是就撥なるすの うぢの とも

と六列種之宗彙記時珍の説は うぢの とも

遠くその花且は開午収り暮り うぢの とも

烟草花 一名相思艸 うぢの とも

藍の花 莢は花 うぢの とも

多く丹波は出づ 伝法の うぢの とも

そのそ又その所秋 うぢの とも

露草 月草

宇治花園

山城風玉記云云 鬼道と八輕嶋明宮の内宇天皇也

子鬼道の雅郎子相原の日折の宮を造り以宮室

崩潰のころを新勅撰集慈法昔人一人のあまや

文慈法八宇治の園自粒通公より五代後法性寺兼

笑々の子といふその先祖の花室を知りたるは

或説は秋の花とハ芳宜を以才一とて宇治の花室も

元芳宜の

芒の穂 尾花

龍膽

うぢの とも

久佐又途加素もに粒撥之俗はこれをいふ

旅り○正白花ののを箆就撥と云

この説は尾花がりのおひま

是就撥なるすの

と六列種之宗彙記時珍の説は

遠くその花且は開午収り暮り

烟草花 一名相思艸

藍の花 莢は花

多く丹波は出づ 伝法の

そのそ又その所秋

露草 月草

宇治花園

山城風玉記云云 鬼道と八輕嶋明宮の内宇天皇也

子鬼道の雅郎子相原の日折の宮を造り以宮室

崩潰のころを新勅撰集慈法昔人一人のあまや

文慈法八宇治の園自粒通公より五代後法性寺兼

笑々の子といふその先祖の花室を知りたるは

或説は秋の花とハ芳宜を以才一とて宇治の花室も

元芳宜の

芒の穂 尾花

龍膽

うぢの とも

久佐又途加素もに粒撥之俗はこれをいふ

旅り○正白花ののを箆就撥と云

この説は尾花がりのおひま

是就撥なるすの

と六列種之宗彙記時珍の説は

遠くその花且は開午収り暮り

烟草花 一名相思艸

藍の花 莢は花

多く丹波は出づ 伝法の

そのそ又その所秋

露草 月草

宇治花園

山城風玉記云云 鬼道と八輕嶋明宮の内宇天皇也

子鬼道の雅郎子相原の日折の宮を造り以宮室

崩潰のころを新勅撰集慈法昔人一人のあまや

文慈法八宇治の園自粒通公より五代後法性寺兼

笑々の子といふその先祖の花室を知りたるは

或説は秋の花とハ芳宜を以才一とて宇治の花室も

元芳宜の

芒の穂 尾花

龍膽

うぢの とも

久佐又途加素もに粒撥之俗はこれをいふ

旅り○正白花ののを箆就撥と云

この説は尾花がりのおひま

是就撥なるすの

と六列種之宗彙記時珍の説は

遠くその花且は開午収り暮り

烟草花 一名相思艸

藍の花 莢は花

多く丹波は出づ 伝法の

そのそ又その所秋

露草 月草

宇治花園

山城風玉記云云 鬼道と八輕嶋明宮の内宇天皇也

子鬼道の雅郎子相原の日折の宮を造り以宮室

崩潰のころを新勅撰集慈法昔人一人のあまや

文慈法八宇治の園自粒通公より五代後法性寺兼

笑々の子といふその先祖の花室を知りたるは

或説は秋の花とハ芳宜を以才一とて宇治の花室も

元芳宜の

芒の穂 尾花

龍膽

うぢの とも

久佐又途加素もに粒撥之俗はこれをいふ

旅り○正白花ののを箆就撥と云

この説は尾花がりのおひま

是就撥なるすの

と六列種之宗彙記時珍の説は

遠くその花且は開午収り暮り

烟草花 一名相思艸

藍の花 莢は花

多く丹波は出づ 伝法の

そのそ又その所秋

採藻

秋野山は出て菜菜をとる之 **苺菜** 茨苺実をとりて秋之

苺菜

○貞徳云苺菜は苺菜の形は苺菜

人多くこれを供ス蓋

新蓋草 銀杏子

多く人食ハ瞑眩

五雜俎はる今の俗

三ツ用あるのを帯

結毒を消といふのハは

苗香の突

荔枝 荔枝汁酒は

多焼酒之五雜俎

國人最荔枝を

蒲萄棚

紫葛 通草 工月朔日河州

核を内裏へ

或人云今款どる所の物を考る

と郁核と和語

お近一放し通草を綴り

とる款枯菜を以

統を造りこれ盛るその作

通草の別種

天札 枯樓

梯ハひさこ

種瓢 竹離豆

お近放し名を

救荒本草より眉見豆

虞美人草

麩冠の如く大

題説

清水が新式

木耳 菌

木より生ずるを木耳

松茸 推茸 棕茸 紅茸 羊肚菜

栗茸 鬼蓋 鬼筆 藟菌 竹蓐

○石菖草 ○初茸 ○湿地茸 ○草茸 ○絳茸
 ○麥茸 ○搜茸 ○猪茸 ○鹿茸 ○馬勃
 本草 平茸 和俗所用 ○鹿厨本草
 菖菌を以平茸とす 木曾の山中

多くこれあり昔木曾養仲西京へて殿扈これ
 を携へて官宿を享せんと是より本邦の味とある 本朝

食 滑煤莖 榎より考へばなり 蛇茸 天狗茸

月夜草 この三種大毒あり 又笑菌は
 人殺てらつて

楓樹の下に生じ大毒ありこれを食べハ笑すく其毒
 一死より多かり速に人糞穢土を嘗て其毒を消し
 三六個活すとありといふ ○嘉定乙亥僧徳明遊山

と忽チ奇菌を得くゆりて流し供と毒蕈と
 僧死する者十餘人徳明亟に糞を嘗て免す

正を撰り日本の僧定心といふ者あり寧死とも
 汚さずと唐理り折裂よむ死とも今に至る菴中

菴や日本に度煉あり其僧姓ハ平氏日本国京東

相州行香縣上守の郷元勝寺の僧あり寧非
 命一死してその口を汚さず陣仲子の風は無常

五雜俎 馬琴云此俗何人なるものぞ 笑菌あり
 本朝の茂親をうもむと永く史籍に記してその

災を嘆む 毛見 農民秋みりり年々見を収
 つれりの秋 納るる下毛懸更田地の是也

を巡見とるを毛見といふ毛ハ稻草といふごと
 稻の葉を薙ぎとるを毛見といふ元百石の田地に

てて百石あるを縮取といふ悉く縮く得るの葉は
 その次百石のうち或ハ八分七分の收納を成り

よその收納を定め免を免といふ謂もあハ免多し免
 く取るの葉は百石を収といハ五十石を半納といふ

中の上之れ年の豊凶より農民の免の多きを
 又とて或ハ一分或ハ二分を破免を免を請ふといふ

收納を免を免 中稻 落穂 稻束 穂掛

やつかや 八束穂 長く大なる稻穂ハ八束をいふは穂こも

八束穂 一の束ハ一握りぬめりてたよは新古今

集兼光神代よりあると云ふ
穂よ長田の稲の志をひくるとん

西米拒引

粟子時 苾菜時 薤蒿時 小菜

中拔大根 鴈
月令は八月鴻雁
来る九月に至り

又陸房未賓と云ふ何れも仲秋先
る方志を主とす季秋後至者主賓とす

○鵝 ○腹白 ○丁陣 ○田面の丁 ○落丁 雁書
○白丁 ○海丁 ○丁字 ○旁丁 ○丁番

漢の蕪式 盾金
盾が多し今の人丁の声しゆと云
か古事 盾が多し今の人丁の声しゆと云

二季名 莫傳抄
丁の異名 了系名 稻負鳥

せし傳文といふとわんハ疑ハ
記さざり或ハ馬と云るもハ疑ハ

渡鳥 玄鳥 啄木鳥
秋のいろく
の小鸟あり

鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉
鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉

鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉
鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉

頰赤 繡眼兒 瑠璃鳥 画眉白

連雀 鷓鴣 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉 鶉

烏鳳 檀鳥 鶉鳥 鶉鳥 鶉鳥 鶉鳥

木兔引
木兔を以小多を誘引し羽を抜

回 或ハ妹をよ作る妹
高羽銃 妹をの羽

人初鮓を賣脱と云ふと戸
初鮓 俗鮓はゆと云ハ非

の初鮓の如く價數銀よる
鮓 筋子耳子垂
同一鮓の子

江鯉 九月大洋四の宮系 河鹿 蛙の好と出

あり秋まわりと呼吸あまかづとの証でかうと六派
を俗傳は西行よあわりとよりの説説ふり考る

所る一の声麻は何れハ俗傳が河鹿 臣 正字 續 鱧
といふ妻ハ春之蛇蛙の條下に注せり 鱧 杜父魚の

鱧 水底より呼吸魚之故この魚を誤りて河麻と称
誌國はあり伊豫。越後。加賀。近江。山城。亦よき

土地より各もつり形も声も大同小異之石伏より石
らひ石のち又川おとせ見くらふいと之字を 嵯 びこ江

あし魚 越 の外も狩あり近ごろ山海名産 下 築
圖會てふまよ季くたを種しハこの畧記

蛇入穴 鮫 一説ままよと未詳 新酒 〇中汲
〇濁酒 〇醱醲 〇醱醲 〇新酒糟 池田伊丹の新酒 松

〇新酒糟 大抵季秋初冬の間

よむたいとよむのちめく入津

九月 この月夜やうや長 易ふ夜長月

無射 律 寒露 節 秋分の後十五日

霜相降 中 空露の後十五日斗成よ

季秋 月 杪秋 月令廣要 梢の秋 和俗

玄月 素秋 九月 上 限 紅樹 通俗

樹鶯眠 延とわれハ紅樹とせうりハ九月の星をよハ

晩秋 紅葉月 職 寢覺月 全

小田菊月 上 本深月 菊月 菊秋

和俗 色 〇月 本この葉かりとちせりよりまづ

本は急の秋といつてあなト

加波良宅本中可波

菊花の宴

借法用の
樗王天祐

山より法花の秘文を窺うより、文と意童に他へ
 意童八百余歳をなほり、貌少壯如、魏の文帝
 の時名と彭祖と、更と文帝に此例を授けし文
 帝との例を受く、壽七十歳、今、三陽の宴、是へ
 と、の、説、童、継の、基、き、し、り、よ、く、一、列、仙、傳、は、彭、祖、八、帝
 顛頂の玄孫、姓ハ、鐵、名、鉄、周、より、八百、歳、の、衰、老
 正、と、樗、王、曰、く、大、ま、と、ん、と、を、病、と、稀、と、す、は、後
 遂、は、法、花、の、西、姓、彭、祖、の、傳、が、は、り、ま、き、り、る、と、以、て
 所、今、ま、り、め、い、元、野、史、中、説、の、綺、語、より、お、つ、菊、花、宴、泰、漢
 以、本、賦、より、西、京、雜、記、卷、の、三、よ、を、戚、夫、人、の、侍、見、買、佩
 蘭、後、ぞ、扶、風、の、人、匠、傷、が、妻、と、り、唐、月、と、り、一、肘、の、と
 を、祝、云、く、九、月、九、日、菊、黄、を、佩、遠、餌、を、食、ひ、菊、花
 酒、を、飲、む、人、を、と、く、世、長、若、く、と、む、菊、花、餅、を、時、節、に
 菊、を、採、採、り、木、亦、菊、雜、へ、れ、を、醱、し、来、年、九、月、九、日
 小、ま、り、始、と、熟、を、就、く、れ、を、飲、む、ま、は、
 と、菊、花、酒、と、し、一、魏、より、以、本、賦、よ、い、如、く、
菊花酒

淮南の桓系、費長房、上、陳、と、杜、曼、と、長、房、謂、く、
 云、く、九、月、九、日、世、家、小、灾、厄、あり、家、人、を、と、く、
 を、飛、り、葉、黄、を、飲、む、肘、小、熟、一、の、を、地、に、ひ、き、き、り、と、
 菊、花、酒、を、飲、む、は、ら、の、細、酒、と、し、と、桓、系、の、言、に、お、
 しく、と、熟、葉、り、と、山、に、登、り、夕、小、ま、り、と、還、れ、の、雞、を、
 皆、果、死、を、長、房、が、云、ま、り、て、代、り、今、の、人、九、日、お、
 と、菊、花、酒、を、飲、む、と、い、え、う、と、と、存、

續齊諧記 西京雜記の夜、赤、小、蛇、と、
茱萸袋

子、あ、よ、
 注、せ、
てまき小登り 九月望、
九日小袖

九月、初、日、より、八、日、お、あ、り、と、者、程、と、
 是、も、九、日、より、一、段、然、と、入、小、袖、と、
温酒 九月九日、
 八、字、温、酒、の、

後、身、肉、こ、ろ、ろ、と、飲、む、時、酒、を、飲、め、ハ、病、を、得、ま、今、日、
 一、酒、の、つ、つ、め、用、と、し、世、疾、向、言、ふ、も、裁、せ、く、白、

了、後、光明、峯、寺、
菊龍衣 九月、衣、取、菊、龍、衣、
 殿、下、の、抄、も、も、と、り、
 九月、衣、取、菊、龍、衣、
 青、嚴、正、

徵、記、 九、月、菊、衣、と、り、
 今、日、纏、纏、を、の、小、袖、を、用、ひ、く、九、日、小、袖、と、し、

菊の志綿

九日夜入るる所登の南階
も多し菊花を植ふの菊よ

赤白更の綿を丸め菊花よ花より枝は分らん

今日菊を菊花ふより替へてこそなり 所湯登地

九月九日菊よ綿志綿と何のひよりこそなり

もも更傳はばお菊を花のあよりた空を雲を防

だんと志を更

竹 世諺問答

菊の節供 栗の志綿

本邦の俗九月九日親戚朋友送ふお菊よ栗を

ゆり菊花の志を竹むゆ志よ菊の節句よ

栗の志綿

後の雛

雛糸三月三日九月九日

いひあらむ

後の雛

さうむいひ定れた

その心をきよき陽をも雛糸ありあり源氏

物語よりこそ雛糸をひわりとんえよりその雛

托の源をたよりちよりの代より竹も神

業より日本記崇神天皇七年の春二月十日

皇の神は昔よりく胡越の長を世にあらむ

はりの火彦の命勅命を奉り和理坂より不

ふよりりふよりこそあかあか武垣女彦妻

の吾田媛と縁を縁を合よりを告あ

哥よ比賣那素夜望とよええより比賣那素

夜ハ雛托のとりとと記日本紀よ記されれど

心ると色づるよと後とあや その祝言

帝は廿六年天照太神伊勢國百祀度命の平終河

より御流座の時乙若子命菊よ備美をひり

倭姫の命よ御流座をよりひり

美の小き人形人く 後の附の弟よあむり花

罪習ありると悪き神の布衣をよの菊菊よ後

真とゆるる 後の附の弟よあむり花

く奉けよとよと 後の附の弟よあむり花

この天見を接おと名つけあふ小児の身よあむり花

ともとも諸病の災難を後ひ除く 神の

今ハ秋の雛おむり 後の附の弟よあむり花

風ありらる故秋の雛おむり 後の附の弟よあむり花

不 後の附の弟よあむり花

海亡胤廻

夫野人の改命を海螺の宝壳を

九日 諸馬寺由岐社天慶年中劫後也 諸神記 藪の

神社山城国志賀郡鞍馬山あり多る所の神一座大

己貴命 神社産業この社天す不慮の時或世とまあり

の所穀との神あり故由おと号と蓋大己貴

小彦名古小疾病を疾一たりを治るの神一とも

五條天神及當社小穀とらる好達法より或故お祭

る神進雄ととも例祭九月九月八日の夜

氏より男女借物を施す小献也當神靈本を

山城国志賀郡鞍馬の北二里許より祭りの神高

靈の神毛水恒の神より別雷神官オテの持社より

神代の巻去伊比諾の尊訶過実智を斬く三辰とテ

その一陰を 雷と云ふ○貴布祢の社ハ船玉 命と高

而龍之 所ニ社法 九月九月見咳逆疫と死亡とト多

仍相者をトトセしむ云貴船の神の祟る事と云

と云ふ小社弘仁二年百六代後 秋九月九月疫を退しむ

今貴船の神惠と稱と洛中を振るも此是の送意歎

改曆雜事記 今より必未毎季九月九月小兒お集り

小神輿を造り貴船と稱と洛中を振るこねと

生玉祭 九日 抄外東生郡天壽山也云あり

年中小社守の傍らふまらる寺院をてめ神地と云

内小接を神との不潔を悪く彼傍を野毛傍思れ

神威を今に旅店の側より造営と云後信

長の兵火小係り神社灰燼となり後上神主を別小社

と云ふ中秀吉城郭を築め日今の地と云 社家注進記例

今九月九日神樂一基持行流鑄馬あり社内十坊ありの

日南坊を

後日氣 九月十日或土日祭裏所菊の

別當と云 宴あり○京師の士女十日再會

して小守陽を云

四宮祭 十日 近江因後又祭大津

月令廣義 歲時記 の説ありありの神

四座大比叡 大巴 小比叡 國常 氣比 仲長 小禰師 大己貴

之按より當社八日吉の神威之故小四座を以この地と云

す里民云この神法府の四宮幣使四位某々之故云

四座を以四位の言と号まらる誤り也神法府の由云

小四位と号まらる社法云云あり神主大比叡小比叡

氣比小禰師壇土の老翁之小禰師を以本社と云

故小田宮より小例祭九月十日大津浦中比大なる神樂
二基引山十二速物造り花火を公せし夜二今相撲之

下鳥羽祭

十日 山城國宇治郡下鳥羽ありなる
神牛匠至田中至と号き例祭

九月十日下鳥羽及横大橋の土公各神とて神樂二基
あり名勝志し云々 神社八法侍との巽二町むらり

例幣

本林の中 九月九日 例幣の法を承りしに注連を引き
みらり

門外小標木を建てる俗厄及上軽を腹の軍門内へ入る
ふらり字を記しこれを前庭とす土日の羽幣使度足

○例幣とハ伊勢大神宮ハ例幣をもとる一毎年の
事なれハ例幣とす 公事根源 續 景紀孝徳天皇年中始

め伊勢太神宮ハ幣帛使を割せり云々 中臣朝臣をよして他姓の令を用ふるを指されと俗
大中臣及浪をなすことこれに

沖籠餅

文永八
年九月

土日日蓮上人相剋龍の口ふけと厄籠あり白刃の下僅ふ
一余成令も今日宗門の危殆を絶く縁ふ供せしむ

住吉相撲會

九月十三日住吉の相撲
會 拾遺抄 神興玉出

滋賀官後清信供ありはち神主勅使付とて宣
命を凌りて五横十三番重相撲三番あり 續

白異禪のよ不淫連を纏ひくも合はり是今日れ
神事 社家記 一延まきう六社を交差合外を造り

新殺の指をまけりけりて農家用ふの市を
あちちおまうと賣りうあを多く持くの市人雜集を

故室の市と云ふや只當社の新賞舎と云ふらふ
今ハ神樂を別敷ふらうとて新殺新賞其神脈

室の市

九月十二日室の市ハ神珠
り 撰陽群談 住をれ

中以上りゆ法をいとを
社地ハ市雅の往りゆもの遠祖田差の當祭夫物を

おろしとてあの神市をさうりゆををいと社とて諸
國の市は始とて外をさうらふ小津の市も又浪

白川祭

十月 天法天神の祭ふ
し 流小白川の

里南山の上より栴社山王春日八幡 山城名勝志

神樂一基降之幸なり社詔云云云云神天満宮が

彦名余栴社は亦同一天満宮法を延元元年

三月十二日之縁所ハ本社鳥栖のま二町より西

らり倒糸九月十三日 十三夜 後の月 二夜の月

主人本居神と云 豆名月 粟名月

十五代崇徳院保延元年九月十三日今宵雲渡

く月明く之をむり定平法皇明月之夜のう作か

る依り我朝九月十三夜を以明月之夜と云 石中記

今夜の月を院名や之歌詩に載るの彦名忠道公

の詩詠と云るに多かり昔家の此の如き詠亦在り

之海く九月十五日月を詠むのひは後人亦五の字

を以三より詠と云るものあり或は兼好が妻宿の

詠の如き又信と云るに是は亦建仁寺三益和尚十

三夜の詩の序小延壽の沖時始と云記せり云々

ひの月ハ唐山も言ふこと云々明の十二夜詠よ

鄭母谷何大榎うはあり本期の條九月十三日を豆名月

と詠ふ粟名月と名づく是等と以柿物と云

餅を制す 莢豆を煮くこれを食すと云る云々

又倍間今宵必芋子を食すもの芋子外皮を除きて

これを煮くこの芋を吟く夜つまといふ後の月ハ月

十五夜を云とく九月十三夜を後と云は此條二夜

の月ハ中秋季秋酉夜月を賞する故に云々 忠道

公十三夜の月を詠ふ詩。閑窓寂々月相臨徒属

空明秋望巨禁潘室昔蹤凌雲去訪將家旧徑踏霜

尋十三夜影勝於古數百年光不若今 独馮前

軒回首見清明此後價千金 菅家九月十五夜の

詩一首。黃萎顔色白霜頭况復千餘里外投

昔被榮華替組縛今為賤謫艸兼囚月光似

鏡無明罪風氣如刀不斷愁隨見隨聞皆慘慄

此秋独作我身秋 一從謫居就此系荆萬死兢々

踟躕情都府樓繞看瓦色觀音寺只聽鐘声中

懷好函孤雲去外物相逢滿月迎此地雖身無檢繫

何為寸步出門行 鄭少谷何大復詩ハハ略

天壽寺一衆會

十曾 栴列大坂四天壽一衆會ハ
九月十四日及十八日六時堂

工故これに倣せ此堂傳教大師草創也且本寺
葉師日光月光の三尊大師の造りとすり九月十五日
未刻元僧三綱堂司樂人沙汰(宮中)は公人(若仕)を先
時刻を三綱及一和尚と告ぐ仕の撞(音)二書を撞
該役人太子堂(仕任)太子の像を(音)鞞(音)うつ(音)まの
式二月十五日の如廻廊の下より六時堂(波御)あり法
る(音)才(音)振(音)洋(音)阿(音)弥(音)陀(音)經(音)傳(音)供(音)万(音)歲(音)樂(音)。

山石倉家

延喜東(音)原(音)王(音)納(音)利(音)悉(音)結(音)西(音)刻(音)還(音)御(音)寺(音)護(音)

十五日 八所(音)明(音)神(音)の(音)社(音)洛(音)北(音)長(音)谷(音)村(音)の(音)西(音)山(音)石(音)倉(音)あり(音)王(音)城(音)

の四隅(音)に(音)岩(音)倉(音)を(音)置(音)是(音)其(音)一(音)捨(音)茲(音)抄(音)大(音)

雲寺(音)岩(音)倉(音)親(音)音(音)云(音)親(音)長(音)卿(音)記(音)云(音)文(音)明(音)三(音)年(音)三(音)月(音)

廿九日(音)岩(音)倉(音)長(音)谷(音)の(音)親(音)音(音)小(音)弟(音)十(音)面(音)融(音)院(音)の(音)御(音)我(音)野(音)

中納言(音)文(音)紀(音)卿(音)草(音)創(音)也(音)鎮(音)守(音)岩(音)倉(音)大(音)明(音)神(音)所(音)謂(音)八(音)所(音)

と(音)八(音)幡(音)加(音)茂(音)松(音)尾(音)山(音)王(音)住(音)吉(音)春(音)日(音)新(音)羅(音)又(音)太(音)

神宮(音)貴(音)船(音)楢(音)荷(音)平(音)尾(音)を(音)妙(音)以(音)上(音)十(音)二(音)社(音)これ(音)を(音)

十二(音)所(音)明(音)神(音)と(音)稱(音)也(音)是(音)大(音)雲(音)寺(音)の(音)跡(音)也(音)云(音)云(音)五(音)人(音)本(音)居(音)

神(音)と(音)是(音)例(音)祭(音)九(音)月(音)十(音)五(音)日(音)神(音)輿(音)控(音)行(音)正(音)神(音)主(音)八(音)村(音)中(音)の(音)

氏(音)子(音)交(音)り(音)これ(音)を(音)勸(音)む(音)大(音)雲(音)寺(音)元(音)使(音)兩(音)人(音)を(音)代(音)り(音)て(音)

八(音)人(音)法(音)師(音)三(音)人(音)供(音)奉(音)夜(音)宮(音)大(音)炬(音)火(音)云(音)云(音)法(音)師(音)云(音)云(音)石(音)倉(音)家(音)前(音)

か(音)之(音)書(音)何(音)り(音)祭(音)礼(音)九(音)月(音)十(音)六(音)日(音)也(音)俗(音)小(音)堂(音)倉(音)の(音)屍(音)云(音)云(音)云(音)云(音)

と(音)云(音)後(音)小(音)介(音)と(音)神(音)供(音)を(音)奉(音)一(音)村(音)の(音)内(音)彩(音)婦(音)を(音)云(音)云(音)

と(音)云(音)曾(音)礼(音)の(音)臚(音)を(音)云(音)云(音)の(音)神(音)供(音)の(音)忌(音)を(音)既(音)不(音)載(音)神(音)

初(音)も(音)云(音)云(音)云(音)一(音)村(音)の(音)老(音)者(音)ち(音)ひ(音)き(音)き(音)枝(音)本(音)と(音)持(音)針(音)

婦(音)此(音)屍(音)を(音)云(音)云(音)新(音)ぬ(音)と(音)云(音)と(音)走(音)る(音)を(音)云(音)云(音)云(音)云(音)云(音)云(音)

オ(音)を(音)り(音)故(音)小(音)尾(音)

小倉家 十音 豊前國(音)到(音)津(音)の(音)初(音)八(音)倉(音)

小(音)河(音)り(音)々(音)々(音)神(音)申(音)八(音)倉(音)神(音)天(音)皇(音)左(音)八(音)神(音)功(音)皇(音)后(音)右(音)八(音)玉(音)依(音)

姫(音)之(音)草(音)創(音)年(音)月(音)詳(音)也(音)云(音)後(音)多(音)相(音)院(音)文(音)治(音)四(音)年(音)乙(音)未(音)儀(音)

を(音)云(音)の(音)他(音)不(音)動(音)請(音)の(音)神(音)祚(音)を(音)分(音)と(音)四(音)時(音)の(音)祭(音)祠(音)に(音)傳(音)不(音)

今(音)云(音)云(音)云(音)依(音)太(音)祝(音)の(音)子(音)孫(音)世(音)々(音)祝(音)史(音)と(音)云(音)其(音)後(音)法(音)末(音)

強(音)河(音)も(音)云(音)云(音)人(音)到(音)津(音)の(音)城(音)小(音)居(音)と(音)云(音)其(音)後(音)乙(音)未(音)儀(音)天(音)正(音)

の(音)數(音)九(音)國(音)亂(音)と(音)云(音)神(音)社(音)灰(音)燼(音)と(音)云(音)祝(音)史(音)の(音)家(音)族(音)も(音)

四方(音)に(音)流(音)離(音)と(音)到(音)る(音)所(音)を(音)云(音)云(音)云(音)云(音)小(音)新(音)と(音)里(音)氏(音)

一(音)々(音)其(音)最(音)初(音)を(音)た(音)て(音)僅(音)古(音)法(音)を(音)傳(音)也(音)云(音)云(音)云(音)云(音)中(音)細(音)川(音)

族(音)之(音)作(音)の(音)社(音)を(音)造(音)言(音)又(音)到(音)津(音)の(音)社(音)を(音)云(音)云(音)室(音)曆(音)庚(音)辰(音)

年(音)小(音)倉(音)系(音)族(音)更(音)小(音)祠(音)壇(音)謂(音)故(音)を(音)建(音)て(音)を(音)奉(音)奉(音)の(音)と(音)云(音)云(音)

九

四ノ節 九月十日 晴後神樂を役敷年より流瀧馬より
 夜ノ入禮を修り奉樂を奏す。神湯の祝あり。當日
 十六日 團主は御座りて幣を奉りて又流瀧馬より晴後
 本社より遠門一説より倉原或ハ巨探ニ他ハ山城より活
 の近降ニ創祭九月十日と云々あるも
 山の井との外は書けずとの史念と記すに違
 十五日 東去至京九月十六日洛東急傍より名勝志云
 或十六日

園游祭

九月十六日祭礼 東山園修正二位東去至京神樂
 一基跡七本有りとの内一本の跡紐より垣を以て築き二
 連棟を一処を造り彩色を施す大なる洛よりすの傍より
 感神院の二宮を彫刻疑ニ是感神院の跡と云う當
 然より此を權院の森と云故ありと吉田の史より云々
 然るに同神の社又是傍より故より西を以てこれを名
 大なる洛の村氏を敬く神室と稱するは薩州府志云々
 一宮祭 十音 濱國史並北牧方村よりなる神
 年既天王八王子北野天神様社亭社
 天王四天王 昭々寄姫大明神流系大明神流系年
 歴正詳云々 例々九月十五日今日十六日神樂出神樂

神湯未あり 氏子八ヶ坂村小倉村栢根村田口村甲斐田
 村中宮村禁野村濃村是社傍神宮寺及社家畠田
 氏記より云々又一説より官平園大明神ハ河内國河内郡
 小町のあり。神天児屋根命。姫大神。香取神。鹿嶋
 神。若宮社末社十八社神武天皇の御宇法皇例云々
 九月八日九日社勢水足大炊下祿宜神子云々重皆農
 民云々これを
 兼勢と云り 神田祭 十音 神社江戸湯治あり
 多ふの神ニ度大
 神田祭 十音 神社江戸湯治あり
 多ふの神ニ度大
 年 法皇之將門の灵ハ六十二代朱雀帝天慶三庚子
 年二月十四日將門滅亡す其の後悲灵云々崇るに依
 り延之の以一遍上人三昧教坊持門の云を以神田の
 神社小倉と云ふ者社々々の今今の神田橋の邊よりあり
 此不いふへの其之場村今よりありて祭礼の日神樂を志バ
 らくは西の面めて奉幣有祭礼九月十日院町山王と
 隔年ハ神樂二基ハ山三十六本踊屋甚大神樂云々
 不修云々の祭の縁也ハ於光天仁の形を換へて

二箇余の鬼神の力を造り臺のせて救人とせざる
引山の外へん 神事ふ然の町内神田外神田佐馬町
なす 深可造日本橋通り町若後都合三十六町へ神幸の町へ
 へ夜言より格捕を捕へ持ての枕灯を中へて裏張へ
 了神楽渡所の町へ本社より後金町通り飯田町より
 田安所口へ入上野所へを盤橋教ま本橋より
 日本橋十軒店通り筋遠所門をさく本社へ還所へ
 大抵系式山王ふよおをひくへ神事能あり今分り
 神主を傍大隅を社家へ巫女ホあり○當社男坂
 のと眺るの比へ世好するの人八景を称して下細
 當社八景ハ。金城初暎。神祠茂林。土翠晴雪。
 箱根白雪。野外晚煙。橋下淺水。遠寺疎鐘。
 前池宿燈。亦社内は小浜町の井戸といふあり或を
此作或人の云湯者本町のありえ 鞠を
造る或まのぬよ時迄をもとるる 此の俗語は是洛
 て再ハ浮こが丸を鞠町の井戸といふ是源こく
 撈ふくささ此謂之或ハ當社の近隣板浦雲列
 の瀟湘中ハ井ありこれを小路町の井戸といふと
 くれう是あふ今ハ井の蓋は瀟湘こく水も

牛御前祭

十首

武藏国葛飾郡那珂川
 下流の固くくハ溜田院の下

少何り清和天皇貞觀二庚辰年慈覺大師の勅請
 之洪社略記よ云おある所の神年臥天王これ系文也 此
 礼九月十八日と此戸天満宮と陽年ついで 築土祭
 當社ハ本所の攝津守より

築土祭

十首

江戸本也所門外少之當社むいハ本也所門の内
 少あり故よ一名田安大明神と号すくと別當若
 龍山成院院の改くおある本平の將門の墓を国道
 灌將門の墓を改くくと田安明神と号すとえ和二
 奉今の津之戸ハ八幡の社地ふりされよふら
 津之戸の神と号す今ハ縁地との神八幡の宮長ハ
 以後去れ社と号しと當所の人の八幡を以て居
 神と号田安邊邊飯田町多ハ飯河系の人ハ後本を
 本居神と号是は四手に倣ふの故之例お九月
 十五日迄年神事奉ハ當日神供十二元の祭系
 本社江戶日比谷即ハノ
 別當金

芝神祭

十首

別當金

國院神主西東氏社儀云々當社飯食神旺宮
 へ入皇十六代一條帝實弘二年九月十六日修務
 止るべきを勅請を後多麻院建久四年源光朝
 々下野至那須野貴向の阿禰所へ旨何りて當
 所を納め一千三百餘貫を寄附せり。百代土
 所門院明應二年修務分新九年氏茂少田所の賦
 主大森宮頼を七。國東へ感之持人の別當社
 の神領を持て居り神農大徳及び心を正
 親町天皇の御年中官より神領所寄附之實
 永十一年修務迄を當社の田代ハ晴寺の山
 際より有り故も飯食神旺と云々此れ九月十日
 同月日を神農大徳此神農大徳と云々此れを
 々々世俗神旺の御され奉りて此れの間は内
 と生妻市有り在朝醫方侍云々薑云々穢土通
 神明土佐有り此れを修りて生妻市と云々此
 此の御杖別筆も後の花を画き内へ館を修り
 て此れを修りて生妻市の人必生妻市と云々此
 々々又當社の氏も此れの間禮を儀々々

自家とれを食

勸學院

十五日

三月十日

今も此れも有り
 の大学の南に建つれり。南曹とを下げ冬嗣人
 臣遠き慮ありける。や子孫親族の字向をさぐれ
 られんため勸學院
 を建立公事根源
太秦の牛祭
 山城国 太秦廣

隆寺常盤村の南山あり九月十五日上宮王院の
 庭に於て牛祭を修めお侍々喜覺大師辺朝の日
 順風を广大羅神に祈り後山の神を獻出の
 禁下勅請と赤山太秦も又この社あり故今夜
 寺中の神事も广大羅神を多ありの寺中此れ
 若紙衣を若牛にきて上宮王院の若紙衣を讀
 誦せ是等々懺悔の御りて此れ寺僧さく是
 をつと心志くれどもそのと誠誦は進まを以進世は若
 寺説云々此の念仏念と給十日の曉開闢十
 三日の曉云々略
山祭
 中巳年日 周防國吉浦郡仁
 發の神社九月中

巳午の日の祭礼を祈りこれを山宮と云ふ山の古名に
 仁登の庄殿は仁登の神社と号す多々の神佳吉三神を
 以奉社と号合名多々の神三神味高彦命下照媛命
 各一社以上玉殿三社と云仁登の神社と号す又後
 大御神とも云と稻宮とも稱す衣食の事を主り人
 神あるにたりといは号あり祭礼の事也織機之神事あ
 り次の日神幸神樂三聖本社西神幸の地と云
 なる深瀨馬あり皆国幸りこれを祈りせらる
 有司代てく国主の拜礼あり又六月御田の祭あり
 鎮守の年月詳なきを人王十二代垂仁天皇の御
 勅幣を奉らるるを記す也
 之餘の傳記矣散也

度會新嘗會

外宮十六日 内裏より初稻を伊勢右宮へ奉りて
 内宮十七日 ぬらり大嘗會といふ御即位の後
 日本國中の神々御饌をたてまつりせり人をいへ
 度會といふ西宮度會郡も徳座師もせり也
 名なり又伊勢を竹の都ともいひ新嘗を
 夜は早稻米の御祭といふ神事なるを初稻といふ

れよりあり今の初稻と號す
 誤り候々なるをいふとく一
 穴織祭 十七日 十八日

按列豊澤郡池田村民家の山と云あり後羽大御
 神と号す是揚陽群神也穴織是服の衣社の間
 云うく十町斗云○應神天皇十古年春二月
 百淑王縫女二人を貢真毛津と云是今來自の
 衣縫の始祖也日本紀同二十七年春二月戊午朔阿
 の使主加加の使主を具しつうと縫女を求めむ
 阿知の使主高粟國に至りて久乃乃路を去るは
 道を知るもれを言兼よと云兼王乃久礼波
 久礼志二人を副と導者と云これより久乃乃通
 ありとをゆり吳の王工女兄媛弟媛吳織穴
 織を与へ同日十一年春二月甲午朔阿知の使主
 吳より筑紫紫よりの阿曾大御神工女を乞ふは
 兄媛を以白月取大神と名る是今筑紫の國に御
 使君の祖に取りてその二女を率く按は國と云
 武庫よきて天皇崩をめぐりてこれを人
 鷓鴣の尊と號すこの女はその後今吳の衣縫改

おぼく上達仁寺此千光国師宋西次宋の日記中是風
 の種ゆりくまゝ短見の縁波濤に隨て漂ふをり
 宋西これを収めくまををり且止波濤くま
 なるををりをばり常西寺ありて社を今今
 の宮に是今今幸くく西の社に公社病と風波の
 種をばり事を種故不徳夷と社を公社の日宮川町
 迄の居民遷りおぼく神樂一基持持原に遷り
 ○或は云宋西入宋して海潮の日茶の社を移す
 筑前國背振山下植岩上素と名づく宋西宋の葉社
 を公の社と人々之櫻の尾及び居社に遷り公地
 相宜故不日奉分

卷懐食鏡

上雅波祭

廿日

括及西成郡大坂博野町

おぼく神にた才稻荷信稱才二稻園鳥妻廿三平
 野仁德天皇後三多院延久三年お清世俗仁徳天皇
 多とてふ毎年九月廿日神事神湯承り氏子
 醴を醸くく互にお務く社に遷りは徳帝の社に
 大は橋の東上町の肉を是はくく皇
 屋の跡くま吉の時上給波下社

淀祭

廿日

伊勢向の神社山城國紀伊郡淀の社小橋の東河津に
 おぼく神一座天逆向津姫宝基文因神天照大神社神数石
 清水の社家の統去八幡遷幸の縁ありて伊勢向と号
 是くく小祠も一様上淀姫の社多々亦今三座淀姫の神
 千紀自供の昊天神伊てふ千紀法師肥前國佐賀郡淀
 姫の神をこの地小筋橋と淀姫の神八幡宗苗の叙
 母神功皇后の御妹又淀大荒木の社を廿二日或は淀水
 意淀の娘大蛇神の系廿三日と何と云ふ也云云淀姫の
 社多々あり是は淀の流を神樂一基淀の地縁換く
 神樂還幸の時行列をまきくくして跡を是一掃り
 く目下能をゆき故
 座麻呂祭廿日坐麻呂の祭
 九月廿二日はと相嘗八十崎と号は新嘗の神の
 木幡祭廿四日山陰國宇治郡赤碕村にありて
 骨命之是地神廿二の神あり父八素雲益馬等之後天
 照右神取く脚をくくくこの神下土下降りくく故不

の具を當社に合せしめ伊予土佐播磨の社務を下の社
の事小井あり園の清水と名く清水明神と号せしめ九月九
月廿四日上祀社内日神雲
天満流鏑馬 廿五日
廿五日の夜先づせやりのり

拾及西成郡天満より多々前の神小野より下九月廿
二日流鏑馬あり社家これを名むる唐の造り天
満橋より至りて馬
北山系 廿六日
六所の社洛小麻
を池の的を射と
苑寺の西南衣笠

の岳の良平松の中あり系神祥るに生創る九月
廿七日 在勝志の 北山天神系九月廿六日新明神様
於
三音申あり云月廿七日新明神様朱より
管見記

或ハ九月廿七日等持院村系社
藤と坂より北山系と稱す○北山神社は北山村より
天長六年八月天地変災ありんと云す北山の神ふ

福 類聚 名後志と云北山は橋の西小に六町ふ
あり 古橋は北山系村の
向紙金川の橋 洛陽より咸安の北方方にあ
らぬと云ふも古より小山と稱す野村名の橋
下を吹くも小山系と云日と記し流鏑馬と云ふ

津村祭

廿七日

津村御具の社八拾列西成郡大坂津
村よりあり神後志名村の系政

が具は昔津村の某より武勇を勵と法固を巡行
し軍制與首を極むお控ふよりく「夕系
政の社より詣りて神殿より通夜を時し神楽を武勇
を感下池より云振津国新波の勝地ふ祀ひを此
我將ふ汝を擁護せん若く云何を以て祀とせん曰
枕上神幣ありんぬ且云くこれ祀とせん神幣を
某よりくこれを祀ひ津村よりと葦祠を造
り神幣を納めくこれを祀ひ御具の宮是を元祿
の以御具大明神と稱すなり毎年九月廿九日神系
神湯の式あり津村の土人本居神と云

掛陽郡談

鳴滝系

廿八日

法名の社洛西仁和寺此西小鳴滝ふ

あり諸神祀ふ云 王城の寺権三子者
神右白鹿の八神

西洞院よりく九町の擁護神を羅列府志より福三
子の宮は西山鳴滝村より是の地は地を祀りて
仁和寺此法字と云友社と云人本居神と云同日

三代此の如くあるゆゑに代々皇女を伊勢太神へ送り
 たりしをせり之天皇即位のころ内親王の内處
 女をよそに太神宮の御給仕と定りたまはせり
 内親王をよそに太神宮の御給仕と定りたまはせり
 ありとせりも定ゆり二年の八月より翌年の九
 月まで野の宮より移りて同三度の神事三度の
 移り 桂河の御移 桂川ハ山陰國葛野郡ニあり
 あり故上野原以南よりあり今桂川と移生之昔
 野川と云ふ上を野小枝川の南よりありと遊川と
 今ハ九畚宮の群行ハ九月十七日ハ本日桂川より
 移り板橋を修しゆこれに桂川の御移と云ふ
 伊勢方御遷宮 凡大社造り毎一陣の美
 あり伊勢方太神宮春日の社一季を修るときハ
 必造給あり遷宮の時修りての神室行事宮御遷
 是年の月伊勢方太神宮の人を多く京師をむく十二日
 の御多事并上野遷宮より入ると云ふ是宮の人

先、聖山の国河の儀、諸事、その秋履を戴洋生
 あり、自門深く太神宮を信し、田く、復て、
 板橋を修し、多事と云ふは、修りて、後の花より、故
 より、の福、より、以、平、兵、を、修、り、云、ハ、一、年、毎、
 遷宮あり、ゆゑに、十、五、年、毎、あり、と、云、ふ、本、朝、の
 とも、あり、云、ふ、あり、と、云、ふ、板、橋、修、り、と、云、ふ、三、年、毎、板、橋、の
 とも、あり、板、橋、ハ、本、朝、山、陰、上、紀、列、大、枝、山、より、あり、と、
 ○月夜御遷宮ハ、無仁天皇二十五年三月ハ、外宮
 ハ、内宮、延、暦、の、後、百、八、十、年、
 云、孫、と、雄、皇、古、帝、の、所、也、
 云、井、木、云、云、ハ、出、撰、九、月、の、御、事、と、云、ふ、事、也、
 云、云、云、ハ、七、八、月、の、間、と、云、ふ、事、也、
 云、云、云、ハ、今、同、事、と、云、ふ、事、也、
 月 鯉魚風 九月の風、李、花、を、降、り、門、前、流
 金 鯉魚風 水江陵道鯉魚風起、美、容、老
 五 鯉魚風 九月の風、新、古、今、集、之、我
 組 鯉魚風 西、大、門、ハ、お、丸、り、ハ、お、丸、り、云、云、

風もあつたりと菊きく 月令に曰く菊は天地の正色

秋のあつたりと菊きく 秋のあつたりと菊きく 秋のあつたりと菊きく

之花も色を以て名づけしと独菊ひとりきく 独菊ひとりきく 独菊ひとりきく

以て亦その極たぎの候ときありと独造ひとりぞうの正ただの

この花も世人奇きを好このむと毎まいに継つぐと入いる

この白しろも以もて紫むらさなる者ものを以もて貴たかしと

くわの切き尋常じんじょうとせむとるとる 五ご雜ざ俎そ菊きく木き鞠きく花はな菊きく

ハハ躬まごにに陸佃りくてん埋雅まいが 四し声せい亡ぼう花はな云いふ菊きく舉行けいぎん反本はんぽん首注しゆぢゆ

よ云いふ云いふ和名わな加波良かばら字あ毛木けうき一い云い可か波良ばら於お

波なみ岐ぎ俗ぞくよよ一い本音ほんおん之の重おも日ひ精草しやうそうとと和名わな鉄てつ

百も夜や草そう 藏玉ざうぎよ 日ひ生せい見けん系けい 古今集ここんしふ 藏玉抄ざうぎよしょう

まのまの三さん系けい 藏玉ざうぎよ 金きん系けい 金きん系けい 金きん系けい

霜見系しもけんけい 菊の淵きくのふち 全ぜん 总綿そうめん

千せん伏ふく系けい 齡系ねいけい 古こ事ことととるとるとると

まのまの山さん系けい 乙女系おんなけい 全ぜん 花はなのはなのはな

花はなのはなのはな 花はなのはなのはな 花はなのはなのはな

百も菊きく 狸ねこ々々菊きく 金きん系けい 碎くず揚あげ菊きく

大だい白はく 金きん目め貫くわん大だい般ぱん着ちやく 公こう冠くわん草そう

女にょ花はな 鞠きく花はな 秋あき無む系けい 藏玉ざうぎよ

隠いん君子くんし 秋あきのの花はな 菊きくのの字じ秋あきとといいふいふい

秋あきのの花はな 菊きくのの字じ秋あきとといいふいふい

秋あきのの花はな 菊きくのの字じ秋あきとといいふいふい

秋あきのの花はな 菊きくのの字じ秋あきとといいふいふい

秋あきのの花はな 菊きくのの字じ秋あきとといいふいふい

ういし（此れ）地榆（又音赤紅）作させし類もの
まの音色紅しと云う地榆のこころ

つよえとのまゝと（和）を本草よ云紫細く長くしく
鑿齒の形つゆり七月をと同く葉縁の如く紫黒
色に後極おし吾亦紅（和）
ハチもく肉しと云う（和）仙莖（和）白英（和）雪下（和）
いふと又野言（和）

南天の実。罌子桐の実。皂提子。苦提子

木患子。木薬子。榎檀子。榎の実。老母

茶の実。梅檀実。桐油の実（和）の油は松脂と
等しくまんと云

椿の実。棕の実。栗（和）落栗（和）纒栗（和）
燒栗（和）榎栗（和）

茅栗。柴栗。剥栗。出落栗（和）付栗（和）必徳（和）
脱と地（和）

下の野列おらり出栗（和）一年よ三度收むと云
山栗（和）山栗さうり（和）柴栗（和）
ホもみ小栗さうり（和）

ひやう（和）儀よひやう（和）栗と云ふ山栗のさうり
この穀をさうり鞍馬村ぬ柴栗と稱せらるるは此
甲州の栗栗ハサのらうり栗條の如くは天栗ハ丹波の

名を冠 熊栗架を極（和）栗の楢（和）熊栗架（和）榛（和）花栗（和）
ちうり（和）和訓一熟のさうり一月ハ（和）唐柿（和）花栗（和）標（和）新榎（和）

新胡桃 新松子 楫藤（和）著（和）通（和）の如く（和）

菜菔（和）具（和）菜黄食菜黄ハ本邦より京師小
く苗代（和）菜黄と稱せらるるは胡魏子（和）かき（和）

大和本草 佛多母（和）近世より天和本草 佛香碧（和）
佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）

佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）

佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）

佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）

佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）佛多母（和）

柘子シロコ 密柑ミカン 橘ダイダイ 橘ダイダイ の花ハナ とト 花ハナ をを 花ハナ うちうち ちち 花ハナ をを 花ハナ うちうち ちち

柚ユズ 柚味ユズミ 金柑キンカン 乳柑ニギハヤシ 九年ニクニ 母ハハ

雲別橋クモワケ橋 空橋カラハシ 似に 藤ふじ 水木ミヅキ 熟柿トクナシ

烏柿カラスナシ 馬榑ウマナシ 漆シ 色イロ のの ぬぬ 松マツ

野火綿ノヒワタ 草葉クサハ 山ヤマ 藤ふじ 花ハナ ちち

末スエ 桔キ 系ケイ 塚ツカ 破ヤレ 芭ハ 蕉セウ 花ハナ 種タネ 紫ムラサキ

豆マメ 緑豆キナンド 一年イチネン のの 二ニ 豆マメ のの 名ナ 大和草ダイワクサ

豌豆マメ 通信ツウシン 志シ 豌豆マメ 豆マメ 豆マメ のの 名ナ とと 故コ 小コ 豆マメ のの 名ナ よよ 知チ りり 馬ウマ のの 井イ

蕎麥ソウ麦 蕎麥ソウ麦 新蕎麥シンソウ麦 新蕎麥シンソウ麦

遅オソ 稻イネ 晚オソ 稻イネ 稻イネ 孫ムコ 田タ 落オチ 水ミヅ

露ツキ 霜しも 露ツキ 雨アメ 霜しも 満ミツク 麻アサ

尾越オビノ のの 鴨カモ 今イマ 云イハ 小コ 月ツキ のの 同ドウ 家カ

紅葉ベニハ 新シン 湖ウミ 湖ウミ 中ナカ

萌モウ 葉ハ 湖ウミ 中ナカ

網代アミヨ 歩フミ 網代アミヨ 歩フミ

網代アミヨ 歩フミ

網代アミヨ 歩フミ

網代アミヨ 歩フミ

国近に国氷魚細代各所云々其氷魚九月
より始りて十月二十日迄これを貢進せしむる細代事

一百ありて十月二十日迄これを貢進せしむる細代事
と定むる一 番綿 番糸 袴袴大坂より送
へ積物に綿とて

の廻松一 番二や三や四や五や六や七や八や九や十や
の廻松を以て損益を定むるを番綿とす 赤胡椒
九月野外二 群 秋後 秋より後 秋

をちりてそのん 秋後 秋より後 秋

善秋 秋の善を以て秋の夕
秋の別 秋の限

秋の名 秋を借ひ 秋の湊 秋源き

冬を借 冬を際 秋を隔

秋よりく 九月盡

俳諧歳時記 秋之部 畢

俳諧歳時記 冬之部 江戸曲亭主人纂輯

冬

冬ハ終也物終レ成也 秋名冬ハ
ひよそりひひハ寒なり 日本秋名

顛頊 帝 月令 玄冥 神 子孟冬 月令

析木 礼記 上天 介雅冬 玄英 月令

安寧 余 羽音 月令 律檀 檀本の

て律を降る云々や淮南子十二月の本を記す
十月、檀一介雅羽異云々、檀ハ陰木之周礼云々

冬ハ槐檀の
中を以てす

十月

應鐘 律 月令 立冬 節 冬後
の後

十月廿四日 乾 小雪 中 立冬の後 十月廿
又建を以て 良月 傳 固

陽月陽上冬元帝暢月暢同書玄冬

三冬三九冬九秦正秦
月令廣義秦

正月初學小春初初冬初時雨月時初霜月初

神宵月神
集

此月大神宮の依許（諸神あつかりのふね）と云ふと
とりの又貞治のころ後法安海門由阿方葉集の注
をくく詞林未葉抄と云ふの中二天下は神宵月を云
ふ而云國八神を月とも神月とも云是法林の云う所の
とりの故この神在の浦に神く志條の附り童は
化れるが如き葉舟波の上と云ふと云ふは法林の
この浦の神在の社に集りぬいそ大社ありぬいと神在の
社に不卦山といふ所より作大天照神と云ふ是則法林の
神をくくはと云ふ云この説又端と通しと云ふ出雲と云ふと
と云ふも二天下のうらを神ると云ふ月やんや荷田東管

霜の候は神宵月は無雷月と十月は純陰の月と云ふは雷は
声なりと云ふゆゑと云ふ六月を雷鳴月といふは對せりと
これ古人未慮の論又安成の章は年凶純陰と云ふ十
月を雷を月といふとハ云ふも集才十三の哥に雷聲の
目青天之九月の鍾孔乃落者といふ秋あり月令に
仲秋の月雷始なりと声を収と云ふと云ふは太古と云ふ
るそと右の云ふは九月を云ふよりこれハ十月と
云ふより雷の声なりと云ふは又云神あると云ふは
雷を神と云ふと云ふとハ云ふも神の如くはる境に
あるも後撰集に云ふと云ふは神もあはれ我中の
云ふ力をうらふなりも初中と云ふも雷神と云ふは
お徳よ神といふと云ふは又云神あると云ふは
ふ云ふは外説がまゝ考へてお下り云ふは六太の如
く出雲に依神の系り集りり云ふと云ふは海雲の境
と云ふは月法林葉集に依て
くくはを云ふは後と云ふは

更衣更衣朔日朔孟冬孟冬の旬旬
公事根源旬の説

(十)

氷魚を賜ふ

公事根源よまの第云
三朝のちら氷魚を賜

神送習

任吉の神送り
九月晦日あり

燧燗を食ふ

朔日 峽人十月朔
日ふとく

蕙畏と作りとる物也
荆楚の人多
燧燗を食ひ或ハ糖と
事文類聚

拜墳一日

菱華録 程子遺書 二京師の人十月朔

日墳は指で以凡食粮をさへたり

炒ひき 朔日

炉炭を進す 燧燗

歳時雜記 燧燗
共上炉炭のこと

玄猪 亥日 カの餅

初冬その月まゝ建
亥の日まの餅を

食ふ六病を 太平御覽 開化天皇十年十月但馬国
初冬餅を献せ 類聚 是カの餅の始 綿繡

万花谷よの餅を食ハカ病を除く 〇秋ハ多子
者へ毎年十二子を生 〇生ハ多子を生ハ多子

これを進す 〇日まの餅を供す 神を祀る 政事要略

四季物語下集 〇日本紀 崇峻天皇十月四日

山猪を献せ 又太子傳 冬十月山猪を献せり者あり

カの餅と名づるは始す 〇カの餅と名づるは始す

〇天元元年十月そのカハ日長女

御の火桶よりひきとりて内裏の女房

は火桶に火をけしきりておわたりて井の

のくを焼くす 〇源順家集

よりいらん 〇源順家集

〇初妻の目を視 〇火桶に餅を

とあまハ火桶ハ袴桶らん 〇火桶とこの日

〇火桶とこの日 〇火桶とこの日

珍と合をくつくと大皇十皇大皇皇明麻西栗柿糖
之正親町公通々の抄并に清湯殿茶末の式委しく

又さう○一は、按列能勢部大代村、白土夫ら者
佳せりとの家代、まはりの候と負て、よみ先神功自皇起

まうひりけし及し切佃大丸の近里ハハ板八幡の
神領よりりて今々古法守よりこれを捧といり

達麻言十日

南天竺香自至太子齋齋氏と号
普通元年深く今武帝初

む江を流して魏へ入り嵩山に居り九白殊峰を經り西

域へ歸る深の大道三年十月各日

射場十日

天すら場
射に出御

わうく公卿以下の射藝を御後あり先代皇史本記

三月とま公事振源これとす江次第十月旬射
場始注蔵人式七日各音

残菊の宴五日

群臣詩
を依り

酒をのふと重陽よむを○延暦十六年十月曲

宴と酒酌みと皇帝

十夜五日

洛東
を依り

山真正極小寺真如堂鏡を以始とををさるるを覚

大師の作この像は吳験よりて別時念佛を始む

これを十夜といふ蓋伊勢

興福寺法花令九月

毎日

より七ヶ月の間南圓堂にて妙法の大會をひらりしむ

あれ十月六日長園の大臣内膳の御忌日となりて之因院

後大政大臣冬詞公が太長内膳の御忌日となりて冬御

香ふ始りしせむとや六日此令を依りて

維麻十日

南都興福寺に於てこれを
修む大職冠の忌日なり

之故事要略云云唐安雲二年正位大政大臣聖上朝

安穩社稷傾覆なきをよみ此令を依り○齋明

天皇三年十月内臣藤子山階寺を建維麻を修

山列陶原の家を社と山階精舎を創り維麻を

を設く維麻云云

金毘羅祭十日

綴列格是殿
より依る

神一坐或ハハ三輪大明神或ハハ素盞鳥古高山の

秋家の改めし故東願山と号す同基詳あり

一經小傳教大師入唐帰朝の日金毘羅神を勧請せ
と稱すや（一）燈十八町志（二）石階嶮（三）又山宗徳院の
廟を以て廿六金毘羅大権現と稱せ合せ（四）や（五）也

○京安井親性寺（一）山宗徳院の社より金毘羅の
社と稱す八月（二）

廿六日祭礼に芭蕉馬（一）十二日芭蕉庵桃青を
伊賀の人松尾氏（二）

後江京居（一）俳諧ふまはり元祐七年十月十二日
痢疾を患ひ（二）程彼の（三）後其角去来

大州亦空巖（一）を送り（二）大津の義仲寺（三）芭蕉（四）晋子
終焉の地を偲りて枯尾花集（五）と（六）傳紀許六（七）滑

菘音傳及（一）凡俗文選作者列傳（二）と（三）詳（四）之（五）近世（六）佛書（七）
流（八）ひ（九）日（十）延（十一）を（十二）句（十三）き（十四）連（十五）交（十六）與（十七）仍（十八）故（十九）又（二十）多（二十一）ふ

男（一）記（二）御（三）糸（四）供（五）十一日又御糸（六）講（七）式（八）八（九）合（十）を（十一）稱（十二）
弘法（一）忌（二）を（三）漸（四）終（五）供（六）ら（七）し（八）終（九）る（十）故（十一）お（十二）め（十三）い（十四）こ（十五）う（十六）ふ

え（一）と（二）め（三）と（四）通（五）じ（六）氣（七）接（八）と（九）め（十）い（十一）と（十二）り（十三）日（十四）蓮（十五）上（十六）八（十七）房

列（一）の（二）人（三）三（四）國（五）氏（六）弘（七）安（八）五（九）年（十）十（十一）月（十二）十二（十三）日（十四）寂（十五）々（十六）年（十七）六（十八）十一（十九）後（二十）醍
醐天皇勅（一）して大菩薩の号を授（二）けり（三）蓋（四）洛（五）小（六）妙（七）頭（八）寺

の妙（一）実（二）雨（三）を（四）祈（五）り（六）賞（七）買（八）ふ（九）因（十）て（十一）註（十二）圖（十三）賢（十四）水（十五）今（十六）宗（十七）門（十八）の
徒（一）佛（二）檀（三）を（四）掃（五）除（六）紙（七）割（八）多（九）の（十）造（十一）り（十二）花（十三）を（十四）挿（十五）こ（十六）め（十七）色（十八）の（十九）候

を（一）供（二）さ（三）め（四）の（五）多（六）爾（七）と（八）風（九）烈（十）と（十一）これ（十二）を（十三）中（十四）命（十五）講（十六）流
と（一）ふ（二）一（三）箇（四）終（五）終（六）終（七）終（八）終（九）終（十）終（十一）終（十二）終（十三）終（十四）終（十五）終（十六）終（十七）終（十八）終（十九）終（二十）

下元の日（一）十音 正月上元七月中元十月下元これ
を（二）天（三）宗（四）月（五）と（六）又（七）潛（八）確（九）類（十）書（十一）道（十二）三

一正月（一）祭（二）を（三）以上（四）え（五）と（六）七月（七）祭（八）を（九）以（十）中（十一）え（十二）と（十三）十月
祭（一）を（二）以（三）下（四）元（五）と（六）と（七）遊（八）ふ（九）と（十）元（十一）三（十二）官（十三）大（十四）帝（十五）の（十六）祿（十七）り（十八）られ

俗（一）寺（二）の（三）基（四）き（五）三（六）元（七）の（八）日（九）水（十）官（十一）忌（十二）を（十三）鮮（十四）む
の（一）罪（二）福（三）を（四）元（五）ふ

告（一）事（二）林（三）聖（四）王（五）忌（六）十七日洛東福寺の（七）門（八）山（九）忌（十）之（十一）今日
方（一）丈（二）一（三）什（四）扣（五）を（六）と（七）り（八）年（九）後

聖（一）王（二）の（三）像（四）を（五）腰（六）裏（七）よ（八）り（九）て（十）寺（十一）傍（十二）若（十三）後（十四）ふ
聖（一）王（二）の（三）須（四）弥（五）檀（六）一（七）女（八）置（九）と（十）り

そ（一）と（二）奉（三）中（四）於（五）山（六）の（七）傍（八）と（九）と（十）り（十一）寺（十二）傍（十三）河（十四）邊（十五）ふ
御（一）取（二）紙（三）

一向（一）宗（二）門（三）の（四）後（五）此（六）月（七）親（八）書（九）上人（十）忌（十一）を（十二）傳（十三）は（十四）忌（十五）日（十六）八（十七）十月（十八）多（十九）う（二十）り
水（一）邊（二）一（三）と（四）り（五）と（六）り（七）と（八）り（九）と（十）り（十一）と（十二）り（十三）と（十四）り（十五）と（十六）り（十七）と（十八）り（十九）と（二十）り

一（一）向（二）宗（三）門（四）の（五）後（六）此（七）月（八）親（九）書（十）上人（十一）忌（十二）を（十三）傳（十四）は（十五）忌（十六）日（十七）八（十八）十月（十九）多（二十）う（二十一）り
水（一）邊（二）一（三）と（四）り（五）と（六）り（七）と（八）り（九）と（十）り（十一）と（十二）り（十三）と（十四）り（十五）と（十六）り（十七）と（十八）り（十九）と（二十）り

夷講

廿日この月廿日或は未創よりこの日宮に
高買の徳西宮大神宮を祈る此神

高買を講のべしんこの日野の儀一神饌
神酒未饗は亦あるも朝を佐むと又別一酒宴

を饗く年中出合ふ而の花全或は慈恵の人
を振ましく念慮ほむれを祀り又講と云ふ又野の

儀六のいぢりく實主お混り玉盤玉物と申す
まじり候ふ價を定む或はまじり方友賣る者

講と云ふ必指掌をてねと夷講の儀
一酒宴の儀一すき居あられ夷講

誓言文拂

官者殿と号する極にまじり
延慶をゆる神はまじり

法勝寺大衆會

廿四日 當寺八白河法皇の
皇居の後天宮

の住持取道衣の後醍醐帝の勅よりて律衣
とす今寺に用儀村の敷中も諸堂の跡

る九重の塔の法村の南より塔檀と号す多様の
是而不風雅集淨妙寺園自まじりて

と系極ふよる春の本の一候に當寺八南條寺
の西北新畧谷の南より他八白川大臣忠仁の別業

とて寺八白川院の御形に當寺の
九重の塔浪速の浦よりつりまじり

十日より 大社神宮大神宮出而之國神門那持築
十七日より 村のありおゆる神大已買る孝安天皇三

十二年岳跡昔八宝殿に三十三丈今滅して八丈
後津基院室治元年八月廿五日建之三糸院雁保

元年始く三月會成りて和漢文 毎年神祭
七十二度終中十月八日深秘の事より十九日

十日より十七日まじりを赤間と稱すこの間風烈
波ありき月一蛇化度一澤と云ふ海濱に浴む

人となをてねはもや國造一神人この人上座を賞
有りて蛇蛇を曲物と云ふと神祭納む

その蛇の取蛇蛇も似く續形の如文連りこの
彩色画が如し尾先八魚尾も似く岐まじり

く宇賀神の如神祭
に切 切ねの風味をまじり

ゆきこの長切といひ切やゆをよぶ人の其を用
 古射の茶八煮といひ煮といひ茶といひ類しく湯六
 蟹眼をぶ一茶味方よ中を云五羅組茶の上品な
 るも其類固雀右の名あり宋の初園茶を刺せ
 名香を風く蒸して以録となす凡茶を賞する
 する唐より始する陸時飲をめて茶法を定
 む○陸羽云茶の名五あり一茶二檀三護
 四よ名五茶因話録本朝茶を定ぶと足利將軍
 義満義政相續く其茶を賞む或のよ義満
 々大内義弘よ命して茶を定ぶ陸の植の後
 宇治を以上品とて迎世紹興利休茶法よ名
 あり或はその亭を教あるといひ又園と称を
 和名録茶名余推集注茶八位加の及ゆ亦
 様二傳云云今略といひ挿を茶と略くとも
 を昔を音略云々これ八茶六たて和名八を
 き又吳志云孫皓の時茶葉を縁ふく以酒
 ふ當とあれ八和漢とも一
 茶八つとよりつとん也
 初霜 又早霜
 霜の花 霜の初
 霜の初 霜の初

初霜消す 霜の花 霜の初
 霜の初 霜の初

藻 雨相折 畫 青女 准厚 雲を
 次 雨相折 畫 青女 准厚 雲を

雲を以て秘苑抄はひとあくる宿のよせのう
 らふらけりとも地ゆるく枯生ゆる○雲秋のよ
 より降も如く秋の顔入る秋
 うる但雲とむり初霜も冬
 名之久礼 初雲雨村志れ
 初雲雨 村志れ

雲雨 泪の志れ 袖時雨
 雲雨 泪の志れ 袖時雨

松風の志れ 川若松風の声を雲雨とて
 松風の志れ 川若松風の声を雲雨とて

と数ふちとつ六つひの夜のまゝありと化
 る一事も時迄云立巻の後十日を入液し雲を
 又とく出液とて又茶雨といふ百虫これを飲之皆伏
 蟄一茶をまむり雷鳴と出ると云ふは方よく

なり香なり九月の花望しく梅のいともやきよの
清香のれり流くもく用ひく(の紅梅の九をま
うり香の望しく成

馬橋と入篤信指譜

帰花

正花と云
の皮を指

水仙花

草

なるもねの中一酒盞のり深黄うと金色なるを金
盞銀盞と云ふ子ふなる者毛を玉玲瓏と云ふ本草遺

陽夷華陰の人水仙花八石を服く批杷の花

槐花
黄く

水仙となると派ゆさうと云をあり
萃子忙う批杷者
医者忙う五難姐

散紅葉名採栝と

花の字色の字候び風木と云るるを魁

と秋なり御筆

風

字彙或ハ本栝

他々冬河の疾風あり又信風信本朝の俗字ん
音詳ると木の果ありり酒の名 言水

常子啼

冬日常教中啼くあり志れ
と正音山のをき啼とらふ

或ハ今まままままの常和暖と感と声を散と
り実とまりやり時や日まり里の雪はり 四雅文

枯尾花 落葉 栝の花 冬栝 栝栞

兼文物

雪六花

韓氏外傳 九草木の花
多くハ五出雪花独六

出朱子云地六ハ水の成數雪ハ
水結ひく花をを成六出

雪吹

雪ハ風
の六ハ

玉塵

玉屑又同

雪消

食をとのへく
寒氣を防ぐを

雪け ぼと雪

口ととりも流りま
の雪をいといと説あり

薄太乱と出ッ 雪の心と雪

たび雪夜衣
ようけ

てうとささをいたハ惟子の略あり一雪礎以
て愚按どものハ片葩多く五難姐

云雪のいまど花を成さるのを今の俗米粒
雪といふ雨水初く凍く孩ひる者と云本邦

の俗いふ風花之惟の和訓もいといふ元片
平のままといふ片葩雪ハ初冬のままをいふ一

花より雪は平雪より雪
花より平の雪より雪より雪
花より平の雪より雪より雪

死ハ内もときと風のふたふたの心と
死ハ内もときと風のふたふたの心と
死ハ内もときと風のふたふたの心と

にあらハ忽ち
にあらハ忽ち
にあらハ忽ち

雪作
雪作
雪作

小越の人冬月竹竿を落徑
小越の人冬月竹竿を落徑
小越の人冬月竹竿を落徑

雪団
雪団
雪団

雪車
雪車
雪車

雪礫
雪礫
雪礫

雪山
雪山
雪山

作小床氷上曳之溜之凌床
作小床氷上曳之溜之凌床
作小床氷上曳之溜之凌床

東坡集
東坡集
東坡集

雪中ハ新を推の具之木を以て
雪中ハ新を推の具之木を以て
雪中ハ新を推の具之木を以て

近來雪車の夕作あるを
近來雪車の夕作あるを
近來雪車の夕作あるを

細負
細負
細負

雪女
雪女
雪女

雪蛆
雪蛆
雪蛆

雪履
雪履
雪履

五雜俎
五雜俎
五雜俎

今歳を以て
今歳を以て
今歳を以て

富士の雪

冲牟六万系の不二の峯ニイサ
 雪ハ三月の昂まけねといふの夜あり
 けりといふこと引て難きと云抄ハ赤人の田子の浦
 の雪新古今冬の終入りのとく冬と云々天者一ハ
 よりも季を

定むぐー 霜

鷲管山の霜紫を深べ 雨潭
 記催ハ霜の白さ者へ 説文 又

玄霜

氷

氷の轄

八雲御抄藻以草

薄氷

氷柱 氷氷

氷柱氷氷下あふりふま
 氷氷を氷簷下 雷の氷氷

銀竹

これハ氷氷之羅山ニハ雨を以て
 李白詩ハ白雨映寒山 森々似銀竹

厚氷

氷の衣

氷の聲

大寒のとき氷の音ありをいふ

氷面鏡

氷の鏡ハ何れを以て云抄に
 注麻川ありと云云を定む

凝射

煮凍

氷英

孫百云 氷英ハ雨雪相雜あり
 師説日三曾礼 和名録 又霞介

雅も云霞ハ冰雪の雜リ下之和名義曾礼

霞 氷散とも和名と云れと訓ス 又霞和名録ニ安良

礼と訓ス 今の俗霞散を云れと云霞をいふと云

この二のハその品お似々名も又相混也 朗詠集

霞散を云れと訓スこれハ霞散を云れと云と云

秋愚按もろろ冬に霞をいふを霞散といひ其傳

を霞といふ霞ハ補角反音は

今の俗流りもひやうといふ是あり 朗詠

霞

和名録

霞ハ三出 陸佃埤雅 〇霞ハ是霞散

似と大なる者之但霞散ハ寒くして雨霞ハ寒

北方出布ニハは遇おゆる菴と云々ハハ別霞下

四時皆あり謝氏云余齋魯マハハ四五月の間屢これ

を云れ又云々も云々も云々霞下るの地ハ未變年を

孫ハ生世も蓋冷ハ凝結ビク地入りいふ化

不の史書ニ裁も牙霞大サ桃李文如 雉文

如く芥の如くも者あり惟武帝元封中霞大 馬政の如きもの極なり 和音神録ニ又裁ス揚行自

天祐の初鼓城あり暑を佛寺に避く忽大声
 地を震ふをやくきりて門外を視せハス一電をえ
 るその大サ寺講堂に寺一地入るを大餘なり月を
 経く乃多消ゆその言被然に似れも宇宙の間を
 くハ亦何ぞわき所あり五雜俎これの説
 を抄ハ電ハ夏をく今類を以てふ
 南都の産あり又雲英酒と

霰地の錦

石畳此
文あり綿

霰釜霰燄

凍不龜其菜

凝

はあは

寒の字
を書り

牙

寒一脈

ひえ切りの略
ひくハ痛く

皸赤切の
略名

炭竈

炭燒

炭

○小野炭○池田炭
○さく炭○枝炭

○切炭○畑炭○炭斗
 ○輪炭○炭俵

炭頭

一俵の内の大
多者をつ

白炭

河州の産礮燭の
古木之本朝食鑑

細炭

炭なり
くれハ白

獸炭

晋の羊琇炭を用て獸の形を焼く朗
郷に近日那離獸炭是之下も

人こそとねはる炭の火を
 のこりあり道良の考なり

骨
ほくハ火た
れりの略

助炭

冬春地炉を
覆ふ具なり

火達

炬燵櫓
炬大

火鉢

○火桶○懐炉

埋火蒲團

衾

襖頭巾

古の讀ハ巾ヲ三恭頭
毛なり乃多指巾を施す

足袋

單皮和名鏡踏皮太平記○野
人履の皮を以羊靴とるもこれぞ

袋踏皮

皮足袋

温石

鹽温石

十

湯婆ゆぽ

銅釜湯を入れて
火口をわくめる者

綿帽子 綿衣

紙衣しえ

月牙げつが

鐘かね

大根引

蕪わ

胡蘿蔔こくわく

莖菁かき

冬菜ふゆな

莖漬かき

葱ねぎ

根深ねふか

○葱ハおぼろけがかりきわつくと
まろきの一字を以給ス故に「文

切乾きりかん

蘿蔔ごぼう

乾菜かんさい

干菜鈞かんさい

枯芦かろ

木の葉きのは

木の葉のふ

朽葉くちは

ても冬より

柘野しやくの

朽野くしの

鷹たか

鵲うす

兄鶴あにがし

鶴つる

雀すずめ

雀すずめ

隼はやぶさ

鶺鴒あひこ

鶺鴒あひこ

隼はやぶさ

鶺鴒あひこ

小隼せうすん

角鷹かくたか

鵬ほう

雀すずめ

追々おひただ

列れい 雀すずめを以もつ 雛ひな子こをを 追おひひ切き 捉とままるる

鳥叫とりこゑ

雀すずめのの 声こゑ 又また 鶺鴒あひこのの 声こゑ

鶺鴒あひこ

偷立鳥ぬす立ちどり

雀すずめのの 羽うをを 盗ぬすむむ

鶺鴒あひこ

落草らくそう

雀すずめのの 羽うをを 落おすす

雀すずめのの 羽うをを 落おすす

力草ちからくさ

雀すずめのの 羽うをを 力ちからをを 用もちいいふふ

雀すずめのの 羽うをを 力ちからをを 用もちいいふふ

力草ちからくさ

雀すずめのの 羽うをを 力ちからをを 用もちいいふふ

雀すずめのの 羽うをを 力ちからをを 用もちいいふふ

列れい 雀すずめ

雀すずめのの 羽うをを 用もちいいふふ

雀すずめのの 羽うをを 用もちいいふふ

鴨鴨

雀すずめ

雀すずめ

狩杖

犬を牽ぎの杖は杖は是田犬を捕らふに獲の
木を用て作る長廿八寸通の笠の端のこぼ

切る大何八目の通

狩場

去柴翳

狩合
弓かく

しよんをまきこし又木をこぼるる唐のやふふてを獸
を捕ることもしつ又人の目をこぼるるのたつた

おまよはれぬく度ひ隠るる

鴛鴦

鴛鴦

よくと同柴翳とまとい説ゆ

鳧

よく油石を食ふは皆消化止只
海蛤を食ふは消化せむ者異

白鳧

○黒鳧 ○阿伊佐
○鈴鳧 ○鶯鳧

あぢひ

鳧巴
鶯鶯

其のあぢひと別す夫木集西行いさらむ氷をい
ふいといんあぢひらうらうら夜訪の入海むむハ鶯鶯

水鳥

浮夜鳥

鴝

万葉不
乳鳥又

千鳥 ○川ちどり ○浦子鳥 ○群子鳥 ○小枝らり
○淡子鳥 ○破ちどり ○夕波らり ○友樹 ○千鳥

氷魚 氷魚使

山城近江氷魚細代一ツ所其
氷魚九月より十二月まで真屯

大和物語不てころり

柴漬

冬月伏見の里人
柴漬を以雜小魚

余河水の流を所これと積むるナ水面を其徑
四五尺寒も氷盛る時ハ水中凝むるる魚雑小魚

柴の下に集る則細を柴の四方に張り柴をこれハ
魚やとらざるをり細入る享るの後

水沸暖之故は諸魚聚る能もを止

浚取

嚴寒中
池水を

後乾て

網代

魚を取る柵を浚取上あま

夜魚引

冬冬の夜山中は獸を狩大を引おまは獵者の網よまこ
引とらふるを糺狸狩をいといふ又今式ハ大を

山へいれ奉る

生海胤

煖海胤

聖

鹽鱈

鮠 牡蛎

河豚

河豚羹

○今この俗鮠工
作ハ水身

鯉ハ鮪

西施乳

山屋 吳人河豚の腹を

鯉 勇魚取

伊沙那 万葉今久夫 夫辣

鏝突

鏝を以鯨を突く元鯨ハ冬月北より南

前分前後を候とき紀州熊野浦ハ仲冬を盛と

しと鯨は数品のり鯨志ハ詳なり余豆相花屋の日

浦賀より下田まで海上三千余里船中鯨を捕る船

を放つて七八回水面をあらう者僅に二三天を鳥

あり鷗の如くありその色赤海人呼ぶまるといふ

名水上を飛ゆも同船の者云この名の花ハ鯨や

是を鯨と云ふと云ふありと廻るもの花ハ方を

果し鯨又水面をあらう一海四五十町あり大は潮水と

吐きまこれと云ふハ諸魚

潮は花を花擲る如き

風爐吹大根 蕎麥湯

蕎麥種

炭団 鷄卵酒 生薑酒 綿

唐綿 綿布

○筵綿 ○束綿

○冬簞

○冬搦 短日

○肱綿 ○挽車

○北窓園

冬櫻

小梅之花葉ともは彼岸と云ふ似たり其枝

より山中五里より下極あり寒中花開くその地を唯

寒さうとも云ふ又西國にも寒桜あり云ふ者ハ

花を中も了ゆり花

ぬハあを列経

冬の麻

拾遺集 宋を月志

つ古人妻の如けありと云ふも其妻の怨を入たり風

と身ハ冬と云ふ ○揚州の蕙隱夜竹と数人阿房

宮の賦を念むるを吹声と云ふなり小これを見せハ

風をうその大サ夏の中 廻るを教と 五雜俎

十一月

仲冬ハ日月紀子會一斗子一建の辰なり

黃鐘 律 大雪

市小室のち十五日斗子一建を大雪とす

冬至

大雪の後十五日斗子一建を冬至とす

○この月朔日なみく冬至あると

これを朔且冬至といふ内裏宣陽殿に平仲の節令あり諸卿文章を献してこれを賀せ

民間も又餅を割りて一陽来復を賀す但

朔且冬至のまよひて毎年十一月朔日の暮あ

つとくゆら奴僕を 除夜 今の人冬至の夜

勞も然の目あり 今の人冬至の夜

をもも盧照鄰元日の詩云人歌小歲酒花

舞大唐春則元日又これを小歲といふ

亦猶冬至これを除夜といふ太平廣記盧

頊傳云是日冬至の除夜

一陽の嘉節

曹植冬至表 ○本朝桓武天皇延

晉三年十月戊戌朔慶雲を祝ひ

田租を免する 類聚國史

雲を書

今人冬

雲を書き用ふ左傳春王正月日南至

公既之朔を復るを觀其至也

と書これ周礼保章氏五雲の物を以吉凶

水旱豊凶の稷を辨は注小三至二分雲氣を

復る青を虫と白を喪と赤を兵荒

と黒を水と黄を豊とを則 独り冬至

はるる但雲氣條變一歳四台

尚吉凶互の異なり 五雜俎 仲冬

周正

周ハ子を以 正月とす

復月

一陽来復を 月るる

享月

淮南

天正月

晉家

暢月

淮南

霜月

霜降月とす

雪又月

この月より雪志あり降る貴物於候なり

士

神樂月

露水の降く陽支あつるを神
乃若戸より出のふ比く神樂未
を奏する月よりすしと此月六帝の舞るる
ものり又東三條の御神樂未を仍る故と
曆代奏 朔日中務省より本年の曆を奉
るむつハ主上南殿出御をり

これに御後あり出御をきり内侍所は
く曆を奏せりこと欽明天皇十四年百濟の博士
奉る公筆根源 曆毎年南都幸徳井よ加茂氏
の新曆を受く持し鑊あせし行る今より
大経師曆と稱し雍列有志今免許をせり
曆を敷く所山田伊勢三嶋伊豆江戸武蔵南部陸奥世
は南朝のめり曆とす
く画く日月の織しとを **宮線を添** 晋魏
の向

宮中紅線を以日糸を量る冬至の後長き
と一線を添ふ前楚歲時記唐の宮中女功を以
日の長短を授る冬至の後常日
比せり一線の功を増し明皇雜錄履黄を敷
婦人冬至の日を以履と襪を買結よ
たぐはく是長至を儀の美魏晉書

赤豆粥

冬至 共工氏の子冬至に死すとの灵疫鬼となす
まり赤豆を煮る故に冬至の日小豆粥を
食すく疫を

何のりハ

あつるとも十一月朔日赤豆
粥を用ふとこれを何のりハ
相嘗ふ

大和佳吉大神 穴師 恩智 立富 葛木 鴨
紀伊國 日帯の神 主各官幣を受く執り

小迎ひり終く沙汰を 延喜式より相嘗むとの
神七十一座と云たり全事根源の國の初志を以是
を供するその社司神巫亦官幣を

宗像祭

胸肩神 神社業 筑前國宗像郡のあり
る神三座一説は宗像郡田島村より益益流

宗大和山城以上三ヶ所は宗像の社あり三神とも
に喜ぶ鳥をこれ女之田心唯端織津姫市持姫らふ

杜本系 上卯 當麻系 上卯 幸川系 上酉

梅宮系 上卯 當宗系 上卯 中山系 上卯

松尾系 上卯 大系野系 中子 園鞆の系 中子

吉田系 中申 日吉系 中申 山科系 上ノ巳

春日系 上卯 平野系 上申 右各系 又知り
此系年々ある

五節帳其の試 中申 御前の試 全上

中の世は日五五五帳を其の試といふ主上常寧殿に於
て御座候り之を以て奉姫ハ六人の系は儀式あり
しつゝもつるを曉しつゝもあり記しつゝ帳を
にせ御之殿上人にも脂燭を供入主上御座候
し指貫も御座をる主上の指貫とを
とい付の外ハ一但御鞠の何ハ帳書の試と推して

公事根源 五節の起りハ淨見原天

皇天吉野の宮よりしける時天女天降り舞りと

つゝ結へ續目紀才十二 殿方の御座 中ノ寅

聖武記を照く考へし 後乱舞あり次

朗詠今梅をうらむ三献をく後乱舞あり次

仲ノ首を穿け北の陣をめぐりて是所也向ふ

其後所々ありと推系ありと云ふ 狩の使

この四月二日三日も有り 公事根源

昔六村の使をとりてとるれ今日見るは福ん

乃更野の稚子ををまわし使をとりて 公事根源

童女御使 春日 赤も宮系 鏡雲系 中寅

吉田八神の系也 公事根源 其の系ハ人の魂魄

の難たれをを拓く身中ニ流るの事特あり

今麻志麻治命 新嘗系 中卯 今年の秋稻

より新嘗りと云ふ 新嘗系 中卯 今年の秋稻

その代の始りハ大嘗會といふ年毎の事新

二年四月より **豊前**の^{とよみ} **豊前** 中辰 今年の稻
を神とせり

公事根源 **日吉臨時祭** 中甲
を神とせり

建暦三年十一月十八日より **日吉臨時祭** 中甲
を神とせり

官兵のふる多く **日吉臨時祭** 中甲
を神とせり

あり **日吉臨時祭** 中甲
を神とせり

一月より **日吉臨時祭** 中甲
を神とせり

東三條の御神樂 仁平二年十一月十七日
丁未東三條の御神

樂をとり **東三條の御神樂** 拾遺抄
誕生の所或ハ重明親王の家

内裏の外八皆 **山神樂** これ内侍所の
神とせり

齋服 **小忌** 青搦の衣 **小忌の文行桐**
小忌の袖 **山笠の袖** 夏ハ山笠を

の明の帝 **小忌** 青搦の衣 **小忌の文行桐**
寸法を用小又白き袍を袴 **小忌**

後上堂 **小忌** 青搦の衣 **小忌の文行桐**
藪蝶小鳥ホハ山笠の **小忌**

日蔭の糸 **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

神おろし **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

の蔓 **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

とて **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

言ハする **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

又 **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

又 **日蔭の蔓** さうり **日蔭の蔓**
を神とせり

みも生ひはるもくくする昔の長くあつたりなり
 古今采種抄 或は細き丸組之或ハ名組あり
 又白き糸を用ひ長ニ尺斗五粒糸をとり
 うく左右八筋或ハ十二筋冠の左右ノ角ニ纏ひ
 結つて之を灌といふ事を神代ノ鬘曼珠の目目紀
 子ハ云ふや又あのかの目目紀の鬘曼珠の中子ハ
 結びひめ纒の上より老はの色ありやといふ
心葉 梅花三寸より又今之枝ニ梅の花見
 梅鬘曼珠つけ巾子しほくをきく方右各枝
 或ハ四枝 **神托ひの糸** 或抄ノ大雲耳命の時近に
 て稲を春くその四のとき年々始りて此古令
 集りてんえりありて此は御即位の始りて
 こそ如此こそいふをさつめとハ樂談積多あり
 ○舞の糸 志の糸といふは雲の糸といふ
 何そくおぼせり杖の中は山例の糸といふ切

阿知女

阿知女作法 本阿知女於於於 未 於於阿知
女於於於 梁葉抄抄 一条禅客の御説云云

阿知女化法云々くくく見たり但うまをわちわといふ
 何とうとお通之天鈿女命の岩戸の糸ハ俳優をり竹の
 を今世世何ちの化法といふやおはおおの糸ハ声あり
 あつたりとてこれもお通之於於天鈿女の糸ハい
 振り糸あり **庭燎** 此阿天照大神云云 天の石崖屈
 本れ糸あり 入り般石戸を閉と幽居也故云云

合の内常闇うて昼夜のお代るを云ふ云云因て懸
 戸の糸ハ庭燎を奉云云 天鈿女命ハ牙纏の
 稍を指天の石崖戸の糸ハ巧ハ俳優
 を云ふ **日本総神代巻** 庭燎是より起あり **採物の糸**
 糸よりてうくも糸をいふなり ○柵 ○幣 ○杖
 ○條 ○弓 ○釵 ○抄 ○尺折 ○諸奉 ○葛

韓神謡 官内者よりいふは韓神二坐をマコヤ
梁葉抄抄 本 又あつたりはなりけり
 何れうくその糸をいふやうをき未ハひらこをき
 何れめらそこれうくその糸をいふやうをき

(士)

○これらを
後よま

大前張

○宮人○本綿志天○純波浮○
前張○階查最○井基野○股骨

小前張

○薦枕○閑野○孫多○篠波
○殖槻○總角○奮○倭○釜○
申楽歌

○千歳○早分○吉刈○星○傳錢子○本綿志

○昼目○弓立○初念○其約○富島分○酒殿

○吹草祭
吹草祭八日

○の香ふふあれども人倫極むるを
かゝる所か恩寺の法も元如く茂成神に或人云三十九
世満天和尚稻荷八幡を妙に故に稻荷何の火焼と
つゝ十一月の八日派治滿治石工の徒も吹草を
とり扱ふ家もこの神を多かる江戸まで八日の未だ
市中は小児も家の系も群集しと派治やの
びんぼうと噂ふ人聞ち二階より教百の密楯
を投げ那童を争ふとこれを捨ふ是を派治
家の吹草祭といふその派治はあつまるもの吹草の
の吹草もあつたあり小兒お噂ふとあつた如き蓋そのびん
ぼうといふものいふやあつたを罵るものあつた

その徒毎年を裁

御火焼

庭燎の送風欽凡
の月法社に於て

を以て例とき

あれを修む○朔日智恩寺法多々大以神四日ハ
上出雲路章の神八日ハ取と稲荷これハ是親日一揃

荷の氏子の兒童小神輿を造り親日より市中を振
る家小介て米袋を乞ひこれを以八日の大焼料宛

八日の新御供へ社家松本氏調集をといふ同日女居
院有栖川の宮并大坂すけの宮玉造稻荷天王寺庚

申九日貴船結神十日右田の社五糸天神十一日要番
に神明十二日生玉十三日三津八幡十五日八幡宮

并今宮処に神明吉田岡崎天王并坐戸の社十八日
上下の御天正三日亥辰廿五日北野を此外神社毎

この丹舎日は柴を神米と積り神酒を供へて
て後火を扱つてこれを燎と兒童各口一菓の神

の御火焼と
拍をたうり
新玉津島の火焼 十三日 後成
の御話

五条南鳥丸の西あり昨今冷泉家多く
或ハ法乐的和歌あり元々の門一町悉くは社の

氏子之今日市人神酒を冷泉

子祭 子燈心

大黒天の火焼之十二月の子の日ふ

用す所の燈心を修ふこれの子灯心といふ倍倍く

空也忌 十言 曉の陣扣 空也上人ハ天孫三

年九月十日寂

年七十〇空也嘗ハ極樂寺と号す也此条坊門の
南渡川の東あり陣扣木は堂をもち傳ふ云振ふ
ハ元三條梯筥ふあり根筥左場と称すむ一
上人傍光夜々執儀念仏唱(洛中を巡る山々)
何一毎夜麻布する上人その声をあらし
友とま一夜あそびてあれを怪む昨日狐志
来りて云昨夜その下を放り麻布を殺すと云ふ
多る此此一その皮と角と乞ひて皮を剥ぎ角
を杖取し柳と遺棄のおとを捕も又これを悔ひ
愧く忽ち剃髪して僧となる今の陣扣の齋
室也晩年修儀のくめ京を出て東行は從教
潤と云ふ今日寺を坐す日を以て常日と定め

故ユその日を用く法了るを修まるとの院中十八

のその中身志の者剃髪と僧となり代堂の

字を法名に加ふとの余有髮妻常より若は

見光を割一市中一賣る九月十月十二日より十八夜

間夜く市中法外の三昧を巡り各証をまゝ一仏名

を唱念一或ハ竹杖を以推考す所の瓢を鳴りて

常此河を唱く詠物あると此の瓢は久くこの竹

杖ハ貴弘檀上の竹を用ふた猪く北山貴弘檀上の

寓居の遠と一第こまわねもせん 陣扣 去来

長嘯の墓のめぐる侍り也

松安位 十言 袴忌 常解 日 今の信男 女三歳

居神一信一む或新制の衣裳ハ表花を乞一或ハ

大酒宴を設け親戚朋友を招くもの更術と

るくこるをりこれを松安位の祝ひといふ又男

云方を袴忌と袴女子七歳を常解と袴忌その

ところ松安位の祝ひよを 喜ハその日より衣服

附叙を解なほに解い解いと云々を添そりて解い解いの
 解いを解い解いのいえあいぬをい入い解いをいる
 こと古くよりあり元補家集よ本いがいこと
 といふものいはきい世いの中いといなるいは
 といふこといてい命いないていといこと
 いふことをい入いれい又東學い云い建仁三年十月
 實朝時政い名い越いのい元服い云い實朝始い
 著い甲い曹い云い今いのい穉いといとい申い曹いのい思い袖
 をいいいひい作いてい庶い民い
 といていむいくいあいをいるい也い 被い初い
 京師いといてい云い
 東國いのい節い解い
 こといとい女い見いていめい
 被いをいるい也い 道祖神祭い十旨い 振別天王い
 寺い村いのいありい亦い後い田い夫い余いのい日い一い村いのい童い何い
 たりい往い來いのい人いはい淺いをいるいとい糸い礼いのい料いとい淺いをい
 あいらいざいれい小い繩いをい以い往い來いをい速いくい留いむいちいて
 あいのい上いをいるい者いはい高い買いといといもい今日いといのい形いをい通い
 ぶい但い蝦いのい魚い荷い花い脚いハい也い
 ありいといるい也い 酉い市い 伊豆國い
 二い時いのい

驛い 鶏いのい町い 酉い 鶴い大明神いのい社い武い列い高い
 たり 飾い那い花い又い村いあり 江い房い里い

毎年十月酉い日い市いとい酉いのい日いニいあいれいハい三い甲いとい上い
 市いありい上いのい酉いをいといとい江い戸い迎い在いりい江い人い群い
 集いりい其いまいたりい是い當い社い神い子いのい遠いまいりい土い産い
 小い辛いりいといるい之い系い諸いのい人い必いれいをい買いふい也い
 小い 報い恩い講い 世い八い日いとい 親い寫い上い人いのい忌い日い上いハい内い
 伯い父い范い綱い卷いをいくい子いとい氏い字いハい善い信い坊い名いハい綿い空い又い范い
 寡いとい更いめい初いめい慈い法いをい師いとい是い後い源い字いのい中いとい
 ちい弘い長い三い年い十い月い廿い八い日い宣いとい年い九い十い淨い云い新い家い
 岡い祖いとい東い西い本い願い寺い十い月い廿い日いとい共い日いといとい

報い恩い講いをい修いとい京い江い在い家い宗い門いのい後い未い論い群い集い
 云い或い六い絹いとい御い雲い月いとい林い是い又い御い講いとい昨い今い時いとい
 てい天い氣いはい眩いりい倍い 大師講い 世い日いとい 知い恵い粥い
 此いをい御い講いといりい

是い天い智い者い大い師いのい忌い日いハい大い師い姓いハい陳い氏い緯いハい知い顯い
 宗い六い使い安い穎い川いのい人い天い台い智い者い大い師いとい号い是い岡い皇い十い七い

年十月廿四日寂佛禪通載比叡東叡日光の三山廿一日より廿三日朔よりありて尺眞夜法回ありこれを論
系といふ一山二院づゝ年々令嬢を勤むこれを天
台令といふ信間も又大師講を修し赤あつ豆粥を
食れ小粘柴を折く箸おん御祭せ廿七日 春日若宮の
としてこれを智ち支粥しと云

去ると一町をくり平林の中より法要集よ云若宮
御殿天押雲傘かき志れ若宮は社家秘説と
○南は若宮のおふ夜宮廿六日 奥福寺の信願を
田樂阿り九次の信一人兩願といふこれあ之の系を急
るく長谷川堂春日の社よ系浦野大刀を推乃馬を
流滴馬あり夜亥刻より若宮の神教子神幸あり
神樂沈と後燈燭を消し社家各神侍を擁護せ
志して闇中縁下に上りしものを放く能を展り
音楽相撲木次勇とこれを修は尚日廿七日 いうく
式日らく寛正年中これを定む巫女及し伶人田樂申
樂阿の信を以職人松の下を在の南ののり

社とこれをまる樂人上張後を騎馬と信を以
是を園白代と又陪侍あり田樂藝術を施
猿楽園園をまるを松下園園といふ猿歩の始
ふ服太妻新よ吉も此の詞を傳りて万歳を祝はとれを
園園の詞といふの後幸曲始る金春金剛西府太妻供
奉の時紀の立合をまる人記世保生若存の太妻供事
の時弓矢の立合これをまる太小の被を以これを拍
と聲後く大和園を領まる武家各鞍並馬長柄
の陰を出し供事の形列あり夜子々
縁下より還幸粗神幸の表上向 且使 春日
時園白殿下よりまる騎馬の伶人是黒袍冠の
中子上衣の送り花をまけしこの系人白玉七十杖
崇徳院の御宇天下太大飢饉三年又太大疫病
あり園白法性寺忠通とこれ系礼の大願を成す
として天下静ありより七每年以つらとを保延
二年丙辰九月二十七日これまの系れとりよりあり

掛鳥 春日の時多秋を以執夏と是これを
掛多といふ雉千二百五十六羽免百三十四耳

十二月

十二月八日丑
又建の辰有り

大呂 律
小寒 節

冬至の後十五日斗
癸小建を小寒とす
中小寒の後十五日斗
丑より子まで大寒とす

是れ九小寒より立春の日
子より丑まで寒中やといふ

志はばと

この月をいふくもてはばとともはばととも
年極の略なりつとともと連声ゆいふ

ハツとてうらむせきつり後師走つらう、程々の説
をさるる者ハツと暗推之奥義秘す云この月僧銭

心久松名をけひ或ハ程とともせ東西は驅走るが
あり師走せ月をあらきけと是字つれを説を授る

の得り之貝系篤依云豊後國は四極山あり四波津山
と称すその名も別も能とす入とこの説その要を記

する子似りもあはれも四波津の四はあむとこの略せり
るはバ四波津と書ハ可なり其名も年極とすハ

冬至の後二戌を臘ととも百神を祭るこ
漢ハ戌日を臘と魏ハ辰日を臘と晋ハ

臘月

冬至の後二戌を臘ととも百神を祭るこ
漢ハ戌日を臘と魏ハ辰日を臘と晋ハ

世の月を臘ととも説文夏は嘉平殷は清祀周は

大蜡漢は臘ととも臘ハ穢なり獸を獲て以先祖

を言するなり礼傳臘の明日秦漢以來祭あり

これを初歳とすとも古の送乞ひ致り晋の張

亮後季子冬月除月周年

急景 殷正 窮月

霜蟾 韓墨大全坊山の井は十二月の異名とも

の降るころりんバ秋をの月をいふ極月

極ハ果ん年極 春待月 弟月

梅初月 三冬月

弟見の朔日 日本 弟見の候

歳時記 全書或ハ乙

間十二月終日候と念ふのとあり人の才なるをこの日を以て
父兄をかえり及ばず兒の居ありと江戸の俗をいふ
候といふこの日候を念ふハ
水鏡ありといふ俗傳あり
忌火の御儀 智二月二日
公事根元

大神祭 上卯 四月二日ト三ノ日
大明神の祭
天智天皇御国忌

二日 崇福寺におきける朱鳥二年よりなる公事根元

崇福寺ハ近江の志保寺に古昔の寺ともいふ

八雲沖抄 臘日 道家は五臘あり正月朔日を天

臘と云ふなり 臘と云ふ正月五日を地臘と云ふ七月七日

を道徳臘と云ふ十月朔日を民歳臘

と云ふ臘日と王侯臘と云ふ五雜俎 温糟の粥 八日

臘八粥 秋の成道の日と本朝の五字於てこの

粥を於て浴佛をせり或ハ七宝五味

の粥を粥と云ふを臘八粥と云ふ見あり

十日 六月申あり神祇官中臣ト勅ホ

率以奉六月との上をト云ふ葵と

月次の祭 上日

神今食 昔いづれも六月はあまの土日の夜に幸

と云ハ神祇官を

江次才頭書 浄佛名 十九日より 仁壽殿の

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

浄佛名 浄佛名 浄佛名

星公を愛するのあり所謂日月
事始 八日六箇計
水木羅暎七曜の像を畫す

その冬二月 荷前の使 言為木の使十二月十
三日或ハ吉日をえん

拾苴抄をえん諸國より鞍を併細
の稻を十陵八墓にそまふをの使より 御製上

主人津波の所梳屑を路り
主殿寮に向き焼き 公事根元
幸童子像を

大寒の日夜半は陰陽師土牛童子の像を門に立
正月黄赤白黒の土牛を春夏秋冬の色をえんひて

さる慶雲二年天下疫病さうみり人民多く
うせり久土牛を造り追儼といふを始り吳國

の青もも農麦のゆき耐を示んとて土牛をえり
公事根元 土偶人十二枚 高各三尺 土牛十二頭

を鉗といひ足まあるを
式 着駄の政 五月におき下檢非違使在京
天子内 徒とよみ刑具し 内侍所の所神樂 徒とよ

約幸所神あり刀自祝知りといふをあり内侍所の
弟子主致察慢を引く官人庭燎をえん本末の

座を二行は設く云云 公事根元 官人内侍所より
て給をよ給是神米を養との養之所供米をえ

をを併久米といふ人の給の音を聽て候り鶉鳴
をりよゆるをを年を取るといふの地をとり耐を

来年何方に向ひても
最勝寺の灌頂 十五日 松尾
障礙なりと云ふ

にあり六勝寺の
正月事始 十三日 衣配 源氏
一より今絶たり

女樂を試らんとく先づ給を配る
必喜武の衣配ま秋のうに由るる耐を定め給

之能滑る冬と守正月の料をい
なり女服ハ養老三幸は始り給
浅草寺美の市

九年の市ハ江戸浅草を以天下第一とて西ハ浅草
所門西北ハ湯橋下谷より親善寺内よりあり寸地

も商人たごるハ十七日の物より十八日の夜より
該人の群給昏夜をとりて実と目とを奪ふと叙昌

この外七日五日ハ神田明神の市廿五日ハ糶町平河

天神の市廿四ハ芝を名の市之つとともハ教昌

後草よ 大徳寺岡山忌 上旨 山城國葛野郡祭

野あり 大燈四

師妙起の忌日あり 和布蒨の神幸 上旨 長門

建武二年正月廿二日祭 又 和布蒨の神幸 四文

宇の國の北あり 隼人の社と称ス多ク神五度玉依

姫彦火出見豊玉姫 不著合阿度目夜良あり

晦日の夜四更祝衣冠帯 叙うと 謙を推炸を

挙神前の石礎を下り 海あり 和布を 蒨る

終夜祝詞あり 元且和布を 神あり 秋宮繪馬

奠既あり 一回 主を 献る 伊勢國志氣郡齋宮村あり 敏官の橋下及

の傍小祠あり 晦日の夜終 ともあり 行疫

神を なるひ 終と や天王寺の道公法師能あり

るる 橋下に宿 終の神 あり終夜神

の馬あり 終の法馬の神 あり終夜神

ふを 終つ あり法華経読誦の切 あり

てこの神神階落山 あり終 五條天神祭

の券属となり あり終 山井あり

彦名あり 祭礼九月十日 終あり 終夜京師乃

士民系あり 白木を買 終あり 終夜京師乃

又小園の候を 終あり 終夜京師乃

供あり 終あり 終夜京師乃

をあり 終あり 終夜京師乃

多の料を 終あり 終夜京師乃

今夜終 終あり 終夜京師乃

候を 終あり 終夜京師乃

夜あり 終あり 終夜京師乃

神道終 終あり 終夜京師乃

人あり 終あり 終夜京師乃

不貼あり 終あり 終夜京師乃

終あり 終あり 終夜京師乃

厄塚あり 終あり 終夜京師乃

(土)

儻ハ以疫を驅之古人最之を重む漢より唐
 宮禁中より之を終ふ護童依子
 千餘人に至る王建が時云金吾除夜進儻
 名畫袴朱衣四隊行之今即民同之哉
 乃但画鐘燭と燃爆竹と耳五雜俎○大舎
 人寮鬼を勤め陰陽師祭文をりく南殿の辺
 所敷の方を立桃の弓芦の矢まきこれを射る
 公事根元 儻ハ晦日の下公事根原より云
 世法同茶塵添埃囊ハ節分の夜とあり
 按よりより云も金吾除夜進
 儻とあはハ節分ハ後の事や

鬼と外

福ハ内

録云文安四年十二月廿二日明日立

春故及昏景毎室散熾豆因唱

於賣

鬼外福内四字云云この以の哉

於挿

はりの挿挿

鯛の挿挿○はりの

と玉佐日記云云あり今鯛

熾豆

鬼撃豆

浅草観音追儻

除夜より江戸金龍山浅草寺あり今夜糸

詣堂中より乃初更の以鬼形の者一人堂外は
 出又入方相成の假面を被りるめこれを追ふ
 て堂を巡る後除夜の札三千枚を撒き諸
 人よふ糸詣の人各あそび拾ふ持りる自
 家の門
 戸は旗 船神祭 北方除夜肉を以船神を
 祠る益公孟婆と寺

節分 年内立春

古今集元方

三よより一ををこがとや

除夜

十二月晦日

るハ此夜舊年を除く本邦の俗この日つ
 を焼く食ふ是継身の別はよりく又質
 をる家くもを食ふ是借取の
 祝語あり今大なるの哉あり

大歳

元日を

小歳と

いづれ若くは曾を
大歳と云瑠瑠代醜備

晚歳

月令

魄歳

上

○別歳 ○行歳 ○除歳 ○歳暮 ○いぬ年

○年の終 ○年波流く ○年の果 ○守歳 ○年尾

○年の際 ○年の漢 春と隣 隣ハ程近

○去意 ○春近 分歳

字典曰風土記云除夜祭先竣事長幼聚飲祝

頌而散謂之分歳 ○支那の俗除夜よの先人を奉

長幼あつちり飲祝頌して 大晦日 小はつちり

散をなす分歳といふ 十二月小の月を 奥州南部の人十二月小の月を

いふ廿九日あり 私人 此ハ聖朔日を以晦日とせしむ

いふ廿九日あり 厄後 厄落 ○此月又より貧者

大といふぞ 毎数千人群をたす

神鬼は安し男婦鑼鼓を以門を巡り錢をとる

これぞ夜胡と名づく又驅祟の類 夢花録月令

廣義 ○十二月二十四日これを上文年といふ正者塗抹

鬼秋子裝成 驅難と叫跳り利物を索乞 熙朝

樂事 うつろ唐山も正者の中をいふ 年忘

正者といふ厄後ハ逐疫之代醉篇よ

唐山よ瀧散と云瑠瑠代醉篇云 誰人歳暮家

人宴集とを瀧散といふ常頼州云田婦有佳獻

潑散新歳除 ○本邦の歳といふまじくこの月下旬

良賤親戚朋友を清く酒醺とる 胸搞

とありこれを年忘といふ年中の勞を忘る

節季候 ○むくハ乞見とのれ人家の門に

とる膚をあつちり身を以拘を致さず季をむらふ

くといふ錢を乞ひんとせを拘といふと三十二書

職人哥合まの園のたり今季季といふは是なり

八月鱧取 江海所とこれあり佐州飯坊の海

一里をり冬月氷をとり厚サ二三尺に及ぶこの所より

鱧を採る先氷の上を小舟を管じり人を採る

穴を定ちちの穴を建てて漁者の休所とせ又

細或ハ繩を入る穴を穿りも焼文を以て

夜半の雑候夜と云ふの夜男女のまじりたること
三冬も 因見 大晦日の夜に火出

逆装 上は

鯛味噌 肉と

巨府薬弱水

宝船 大晦日の夜七福神の船をひいたる

模れ これ初夜つれてある

模れ 象の鼻犀の目牛の尾虎の足唐のとき

模れ 江戸の街上元日宝船の雲賣

鏡 鏡の姿をくらふ

早咲梅 梅

歳藏市 梅

王子の鬼火 江戸近郷王子村稲苅の社

年十二月晦日の夜半この木の下

今夜社内

年の夜の大神樂 大晦日の夜

五日... 江戸の街衢大神樂の獅子舞... 冬を惜む

冬を惜む

長崎の柱候

肥前国長崎... 正月十五日... 西鶴が世間胸算用といふ草

俳諧歳時記冬之部 早

俳諧歳時記雑之部

江戸曲亭主人纂輯

二巻之式

連袂... 物あきと俳諧八百韻

俳言... 俳諧の連ふと書ぶ... 初何書上御... 一字略... 二字返音... 三字中略... 四字中略... 五字中略... 六字中略... 七字中略... 八字中略... 九字中略... 十字中略... 十一字中略... 十二字中略... 十三字中略... 十四字中略... 十五字中略... 十六字中略... 十七字中略... 十八字中略... 十九字中略... 二十字中略... 二十一字中略... 二十二字中略... 二十三字中略... 二十四字中略... 二十五字中略... 二十六字中略... 二十七字中略... 二十八字中略... 二十九字中略... 三十字中略... 三十一字中略... 三十二字中略... 三十三字中略... 三十四字中略... 三十五字中略... 三十六字中略... 三十七字中略... 三十八字中略... 三十九字中略... 四十字中略... 四十一字中略... 四十二字中略... 四十三字中略... 四十四字中略... 四十五字中略... 四十六字中略... 四十七字中略... 四十八字中略... 四十九字中略... 五十字中略... 五十一字中略... 五十二字中略... 五十三字中略... 五十四字中略... 五十五字中略... 五十六字中略... 五十七字中略... 五十八字中略... 五十九字中略... 六十字中略... 六十一字中略... 六十二字中略... 六十三字中略... 六十四字中略... 六十五字中略... 六十六字中略... 六十七字中略... 六十八字中略... 六十九字中略... 七十字中略... 七十一字中略... 七十二字中略... 七十三字中略... 七十四字中略... 七十五字中略... 七十六字中略... 七十七字中略... 七十八字中略... 七十九字中略... 八十字中略... 八十一字中略... 八十二字中略... 八十三字中略... 八十四字中略... 八十五字中略... 八十六字中略... 八十七字中略... 八十八字中略... 八十九字中略... 九十字中略... 九十一字中略... 九十二字中略... 九十三字中略... 九十四字中略... 九十五字中略... 九十六字中略... 九十七字中略... 九十八字中略... 九十九字中略... 百字中略

勿論賦おし字と表八句の
くしんいんくろきせぬあし

百韻

表八句 月七句め 裏十四句九句め月 十二句め花
二表七句 月十三句め 二裏十四句十句め月 十三句め花

三表二の表 三裏二の裏
名所表二の表 同裏七句め

七十二候

表八句
裏十四句

表十句 月 表十句 裏八句

○百頁の二の二折振るを七十二句とあらはし

四十四

表八句 裏十四句 名所表七句 裏八句

○百頁の初折と名所の二折を四十四

五十韻

表八句 裏十四句 表十四句 裏十句

○百頁の二の表と二の裏を五十韻とす

七十二候六十員四十四句
が花月の定座百韻有 歌仙 表六句 月七句め 裏十句 月七句め

表十二句 月七句め 裏十二句 月十一句め
表六句 月七句め 表十二句 月十一句め

表十句 月七句め 表十二句 月十一句め 裏六句 月七句め
○源氏のお折を歌仙お折とす表裏中女は句は

源氏

表六句 月七句め 裏十二句 月十一句め
表十二句 月十一句め 表十二句 月十一句め

長歌行

表八句 月七句め 裏十六句 月九句め月 十二句め花

表十六句 月十五句め 裏八句 月七句め

短歌行

表四句 裏八句 月七句め 表八句 月七句め

裏十四句 月七句め ○長歌の初折は

に十八句の短歌行は四句の
東花坊志考が初折とす
砂服 表六句 月七句め 裏六句 月七句め

表六句 月七句め 裏六句 月七句め
又裏六句の裏がそれ八句の点
首尾 表六句 月七句め 裏六句 月七句め

三つ物 護句 服

表八句

表八句 月七句め 神祇 新教 云々
述懐 懐舊 古人の名 同字 名所

病体おろり 但嬌ふまゆは 古人の色し
るを初らふゆふささるは 表の句体おろりゆふささるは

句數 同季

四季の句数
表六句 月七句め 裏六句 月七句め

冬 夏 秋

冬 表六句 月七句め 裏六句 月七句め
夏 表六句 月七句め 裏六句 月七句め
秋 表六句 月七句め 裏六句 月七句め

戀

二百より六百の事。一白を控む。四百の事。恋向のハ折端より出まはせけ。白より白迄。

但字去

神祇。教。旅体。述懐。

水邊。山類。夜分。居所。

一白より三百の事。初念折。

人倫。人名。名所。國名。

降物。天象。時分。飲食。

衣類。植物。藝能。

その類一白より二百の事。物ハ所をを控む。

火体。風体。言語。病体。書体。

一白を控む。

人倫。人名。國名。名取。支体。降物。

降物。濁假名。二字假名。言語。鳴物。朝。

夕と智りたる時分。日月星と智るる光物。

木竹草と智るる植物。虫鳥獸。

生類。同字。生類。植。

物。時分。夜分。衣類。述懐。神祇。山類。

無常。水邊。居所。書体。病体。風体。

火体。同字。戀。

續く月のハ一白去。三百より一白去。二白去。三白去。二白去。二白去。二白去。

降物。雲。霞。霧。霰。雪。の類。光物。日月。星。電。

降物。雪。霜。雨。霧。霰。雪。の類。光物。日月。星。電。

不附物

枕嵐 ○ 塵ノ跡 ○ 暖ノ長糸 ○ 空ノ

人ノ心 ○ 念を

聴る ○ 鳴く ○ 鳴る ○ 音ノ入ル声 ○ 鶯ノ

舟 ○ 園ノ黄 ○ せんす ○ 成るる ○ ちる

らん ○ らんばら ○ らんばら ○ 氣らん

ひん ○ 清き水 ○ 清き水 ○ 清き水

花ノ梅 ○ 山里に紫の鳥 ○ 紫の鳥 ○ 海ノ

紅葉 ○ 紅葉ノ書 ○ 紅葉ノ書 ○ 紅葉ノ書

老ノ本 ○ 老ノ本 ○ 老ノ本 ○ 老ノ本

名ノ名 ○ 名ノ名 ○ 名ノ名 ○ 名ノ名

附不苦物

月ノ光 ○ 月ノ光 ○ 月ノ光 ○ 月ノ光

日ノ影 ○ 日ノ影 ○ 日ノ影 ○ 日ノ影

衣ノ袖 ○ 衣ノ袖 ○ 衣ノ袖 ○ 衣ノ袖

古ノ跡 ○ 古ノ跡 ○ 古ノ跡 ○ 古ノ跡

二句去

丹ノ糸 ○ 丹ノ糸 ○ 丹ノ糸 ○ 丹ノ糸

車ノ舟馬 ○ 車ノ舟馬 ○ 車ノ舟馬 ○ 車ノ舟馬

比ノ時 ○ 比ノ時 ○ 比ノ時 ○ 比ノ時

植ノ水 ○ 植ノ水 ○ 植ノ水 ○ 植ノ水

魚ノ虫 ○ 魚ノ虫 ○ 魚ノ虫 ○ 魚ノ虫

名ノ名 ○ 名ノ名 ○ 名ノ名 ○ 名ノ名

向ノ遠 ○ 向ノ遠 ○ 向ノ遠 ○ 向ノ遠

瀨濁又云雨又云雪又云雷又云猫
又云鳴子又云妹又云松又云棠又云
 栴又云又又云席又云占又云井又云
 長果又云法又云秋又云井又云井又云
 雙又云山又云葉又云葉又云葉又云
 車又云純又云矢又云柳又云山又云山又云
 菽又云友又云孫又云町又云眉又云
 年又云墨又云砚又云古又云木又云曆又云
 今年又云去年又云角又云角又云角又云
又云夷又云沽又云汁又云芍又云芍又云城又云
又云雅又云あ又云あ又云あ又云あ又云
又云離又云榭又云紅葉又云糖又云
 百浦又云淡又云園又云菅又云炭又云
 歌又云歌又云王又云帝又云帝又云帝又云
又云寒又云寒又云寒又云寒又云佛又云佛又云
又云聖又云聖又云聖又云聖又云公又云公又云
 以類又云百員又云百員又云百員又云百員又云
 事又云事又云事又云事又云事又云事又云

一座万物

もき又云もき又云もき又云もき又云
 あ又云あ又云あ又云あ又云
 樓又云樓又云樓又云樓又云
 霄又云霄又云霄又云霄又云
 礼又云礼又云礼又云礼又云
 ひ又云ひ又云ひ又云ひ又云
 杏又云杏又云杏又云杏又云
 栞又云栞又云栞又云栞又云
 岸又云岸又云岸又云岸又云
 五十又云五十又云五十又云五十又云
 遙又云遙又云遙又云遙又云
 垣又云垣又云垣又云垣又云
 流又云流又云流又云流又云
 委又云委又云委又云委又云
 一座万物
 初

夏の正花

余花

若葉花

秋の正花

花火

花小杜鵑

花燈籠

冬正花

雑の正花

夜分花相撲

帰花

雑の正花 作花

花相撲

花燈籠

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

雑の正花

作花

雑の正花

作花

雑の正花

をむすわがぬきとめぬういせむれは父とてむすわ
浅寄ねれのちかのみすわ父が愛よとてよあはれ
ぬきとめぬのたぢりぬれ衣長足浴のきりり
くはる者よとて説を渡さくぬき衣の上で説あり
後撰

源氏
松島や登のぬれ衣を脱つてよ名をこわやハ
この外ありわ
この極まり

かたむし

女のこころごとくささるにハ
空なる履のおのづからさる

てぬけ
ねとぞ
後朝
さくば垣
恋れ占

二名
錦木
昔陸奥までおりの女の門へまゐる本あり
たぐく
この木ハ二尺ばかりにしく五色はいろどり
くるものもあま錦木といふを初花集匡房
よま初子にき本のまつななてあまもね。後拾遺
能因 錦木ハまゐるを枯
たれあ細布のあまも

諸実ちり
伊達
春心惚
名惜
妻の秋さ
陸奥はま
まの秋をたきくま
まの松山浪
男女れ
くこに終り
望主夫石
其夫役は後ひく遠く
たくとり
幽明録昔貞女あり
國難は赴く弱子を推考く餘り武昌北の山上は送
又ま心り化して石と名又忠列は望天樓望主夫臺
り大明一統志は又速異記は我より不
相思州ありこれも婦人の夫を慕ひ化してまを
万葉 肥前松浦歌あり
石充風
氏の女嫁
と尤郎の婦と名尤郎と名必妻れをむす北あり
曰吾當大風をちりて天下れ婦人の為高旅を阻心
故石充と名つ亦石郵も後本妻山がて
詩つたり
五雜俎 石充風ハ海風
兒名
葉

夫一人を其國にて居りて其後其國に其間郵中の
夫一人を其國にて居りて其後其國に其間郵中の
夫一人を其國にて居りて其後其國に其間郵中の

伊勢物語 七つ、八國の 夫婦 八男前 嫁 夜不

取女 木人月老 御 の意極 房 夜不

洞房 洞房兩株合 歡花 水滸傳 羽平帳紅圍

肉屏 肉陣 共ニ房中より 後宮 美人の

美人の名 美人を画 漢の元帝の宮

漢書 元帝後宮既多一常小見ると以得

乃画王をとりて其を圖せり其圖を案ずりて其を畫

独玉牆肯せり遂に思ふと以得む由奴胡人入

美人を求め 嬪御とて之を以て上國を以

後宮 一と以帝を悔ひて名籍已定帝

信を外國よりせん其故は漢人を更之乃其

返魂香 漢書李夫人季延年が妹武帝の夫人

の玄宗羅公遠 就と揚せ妃が冥魂を 香 薰物

蘭奢待 黃熟香 十種香 競馬香 三友香 吳越香

沉香 蘭鷄香 小鳥香 佳吉香 百和香 奇南香

伽羅 赤梅檀 芥子 芸香 初香

大泥 源氏香 香机 香盞 香匙 掛香

白ひ袋 酒香蒲 守宮の識 女の肘に

あけハ二枚浦を以て春心をうけり時ハ忽ち消ゆ

の流万畢術。博物志。墨客揮犀皆其法
あり大抵美を必忘るゝ別術の心念を

紅粉の

黛眉掃

男色

義少年

雜妓

開卷葵

常陸帶

妻の袖

筑石鴻

其の如

雜喉寢

小夜

密男

於曾風流

今代人概の

老ハ得之

中々俗小おそく此を以てよかや一概ハをそく候意遠
ア万葉小於曾の風流士又於曾也公君又心鏡日向
為在在

妹許ゆ

女の許へ

紅絹

紅絹

と申白と三吟未來記一河さき後林小何ぶちり
うちりともとよあ白ふむげやく母ふをれをとう
とふ附りあまふを人の廊うよひとえさる改ち
向中ふ控奥のうまの解らるゝあうら紅絹とつちり

女房

女房男房元官人の徐々
妻の妻を唯く女房と

外婦

貴妃 官嬪 姉 妹 御政 音子
御女 植女 傳 醜女 賤掃

花街

花里 江口 大磯 祇園町 浅妻 吉原の里
神橋

板橋

町之 板橋雜記 青樓 妓家 揚屋

遊女

遊行者 總彌女 妓女 娼女 離妓
指阿曾 出女 夜敷 辻君

女樂

舞姫 分舞妓 了張 妓の幼稚

小三板

水上 舟會 髮織

白眉神

妓院 所 關卷葵 鴉老 妓樓の老女 私家子

常間

重頭 傾城 傾城傾國 金剛

陰間

男を 飛子 旅陰間

五雜

關卷葵

花女

金剛

あまの もろ 万葉集 萬欲得

治定の歌

この詞を志すとうけし治定
はまは松か柳かの数あり

よもぎ ありあり

あり越へるまゝ

現在 ありあり

あり赤いおしり

未来 ありあり

ありい現まゝ

ありあり

ありこれ切字に

これとまぬのり

あり切字あり

切字あり

あり下知

下知あり

ありこれ

ありあり

あり切字

ありあり

ありよ

ありあり

あり句の時

ありあり

あり二

ありあり

ありらん

ありあり

ありか

ありあり

あれハ初人の人なりあれハ初風さむさ

あれハ初人の人なりあれハ初風さむさ
あれハ初人の人なりあれハ初風さむさ

題

あれハ初人の人なりあれハ初風さむさ
あれハ初人の人なりあれハ初風さむさ

むらたの曲輪をさるるまじく来まへ一敷の虫
 輪とておれんぞまハ秋ありう等敷ましくしてま
 かりとてまをさうけうけう地はまいふまされハ敷の
 典神伝にまれを来下大傍野とるありこれハ
 古人の類をゆく後不敷をたれ

附合

附合

ありとたけましく作へ一服とての所をばらま
 敷の金様を補ふ一附三附の場なり
 ときふとけあるより不様へ一人てふらんも
 届の外外すふゆまももとの句と優劣ふま
 かぬまの三百ハたと天地人の三とて世の天
 下一附の地をま生とて陰陽も陰成志と
 後三の人の同上生とて人は天地陰陽の氣を
 けとて陰とてまもりの姿天地も天あり 天あり
 三とて一附あり 一附あり 八句あり 八句あり
 本意歌と和を二敷うとて人情あり 再敷
 樂生ハ一附あり 志の喜とて生生死死流
 音感 思は礼重山の異別なり 名砂の裏ハ

即りと性善の本心とて天下太平たうとて示
 せ一卷のまひ世の如く家兄約忠云附合ハまゆま
 如くま一兄弟のやまゆまゆまゆの親一
 あり切なるハなりとてまもえ他人之兄弟情ハ聞とて
 同胞なりあの人をりて附合をまれまの句の
 をま一とての言わらひ何ふゆま附合ハ
 ありま一情頃粧所走まり句あり 文考七
 名ハ情を制まて平度附合ハ自化の運ひま
 其角云附合ハ一合とてまれんたり上まとい
 てもまをまゆまとあの説ありとわりありまもまを
 ても御所のま一合一平度ありま一情の平
 度まをまゆま一合とてまのま一合を解ま
 馬一附合ま一合をまゆま一合とて附
 合をまゆま

点取

世にま合てまゆま一あり
あハ何のまゆま一ありゆき

ねと何のやんばれまゆまの信ま一とてありあ
 てもまゆま御所もまゆまといまゆまのまゆまあり
 ようひらまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆま

里正の先祖よきを遇せよとてそのつらさを
 感すゆひ死所のはしりて自画一張をまゝに
 乃き本はつらとれをて蘇せよの画相撲の画と
 いひゆる志ももとの被お撲の掬板よりと
 右よきはの如きものなり左よきいのおも
 ものあり敗るれ百年を強くと紙面よりや
 うらむぞえ海のそとにそを以奥羽新脚の目
 里正の家よき家と主人の古画をりくそ
 一綴を結ふそを便すあそよ綴せ

東風羅神



裸身てりしそよのや月一風

とそ風

西へり果



此画鏡裏は嘆息もくははるるこゝにを
 此風くわつこゝ月をぬれ八月とあるこれ

をを以て有りてを名をなするものとの
 續もこの御書よりを故よのて載せるの
 ハ愚が古人をそよそ波女ん之梅きよ奥の細
 屋よ三日風をあれくすしれき山中は遠雷
 云云何ぞれ云是より出羽の國大山を隔
 と及そそちたつたれはたあその人をこのそ
 類もさうしそをス云云肌よつらそ汗を流
 てや丸上の店よ梨つ云云尾を尻よりくは風と
 のすのをねぬもくはあつたれたれども志い
 うぞ都ももをうくつとひくそすかぶ旅の
 情事もあつた目ざらそあつて長途そ
 うらりうらりそよりそをいゆる云云今れ里正
 のあの佳風が足強きや何と申合ふらう
 とも猶多うそ

俳諧歳時記雜之部

此書は四季の詞を以て分ちて各
 十二月は配ま傍かた小圈わを施して神
 親草木生類句去木の織ちとて俳諧
 席上しやう小推お乃の今いま其そのと調法てうはふなる書なり

江戸曲亭先生著

俳諧いろは韻い刻巻近刻

享和癸亥暮春發行

東都通油町

蕙屋重三郎

浪華順慶町

柏原屋清右衛門

尾府玉屋町

永樂屋東四郎

書

肆

